

技能が練られます。然るに訓育の方になりますと、此大切な訓育を十分にやり遂げる人は、それを使用して居る人でも十分出来なければ、又父兄でも出来ない。矢張實業補習學校の教育に當つて居る者が之を指導しなければならぬ。然るに實業補習學校に於いて一週間十時間の教育を致すのでありますから、それでさう云ふ大切な時期を無事に過ぎさせる教育が十分に行はれるかどうか、實業補習學校では唯一通りの知識技能を授けると云ふことが漸くのことである。更に其上に正確な訓練をし、經濟的公民の資格を造上げることが、期待が大き過ぎると云ふやうにも考へられるが、併し又此時期の少年なり青年なりは一方から申すと夫れ自身の自治心が段々發達して來ます。他の命令規律に依つて動いて行くのでなくして、自己の自治心、自己の良心に依つて立たうと云ふ傾が段々強くなつて來るのであります。それでさう細かな指導をしなくとも大體の指導をすれば、却て此頃の少年なり青年なりは自分で自分を練上げて參るのであるから、必しも多くの時間を費して訓育をしなければ性格が練上げられないことはないのであります。一週間に五六時間乃至十時間の教育を與へる中に於ても、矢張訓育の出來ぬことはないのであります。

實業補習學校に於て教授よりは、寧ろ訓育を重く視なければならぬと云ふ考は、獨逸の實業補習學校の問題が議せられます場合にも、何時でも起つて來て居る。此獨逸の實業補習學校は大體から申すと、十四歳で國民學校を卒りまして、三年乃至四年それを義務に致して居りますから、十七歳或は十八歳まで學ぶのであります。是ではまだ足りない、もう二年延して二十歳まで教育するやうにしなければ、此人生の一大過渡期を有効に過ぎしむることは出来ないと云ふやうな議論が盛んであります。是は農工商何れかの専門の知識技能を與へると云ふことよりも、今申した四年でも足らぬ、六年にしなければならぬと云ふのは、其教授と

云ふ方から要求するばかりでなく、寧ろ訓育と云ふ方から、此十四歳から六年位の間に訓育をすれば、豫定して居るやうな公民が出來上ると云ふ意見が非常に強いのであります。獨逸が段々恢復して來れば、實業補習教育をもつと延ばすやうになるか知れませぬ。併し何も是は獨逸ばかりでないのであります。此前述きました丁抹のグランドウイグの國民高等學校は十八歳から二十歳までの青年を受取りまして、それを寄宿舎に容れて、二年間教授だけではない、十分な訓育を致すことを努めて居ります。それに依つて丁抹の輿論の中心になる人物を造つて居ります。更に又英吉利に於ては陸軍中將のバーデン、ボーウエルが組織致しました少年義勇團なども大體同じ點に着眼して起したものであります。少年義勇團のことは既に御承知のことでありませうから此處に詳しく説きませぬが、氏が少年義勇團を組織しましたのは、決して軍事的訓練を基にして起つたものではない、十四五歳から十七八歳或は二十歳まで位の少年は非常に強い訓練を要する時である。又少年夫れ自身は非常に自治心や社交性が發達して來る時である。此時に團體の力で十分な訓育を與へやう、少年義勇團と云ふやうなものを學校教育の外に設けて、青年を指導するでなければ、今後の英國の青年の性格が形造られないと云ふやうな考から、少年義勇團を起したのであります。

實業補習學校に通ひますやうな少年或は青年と云ふものがさう云ふ時期に在るものと見ますれば、實業補習學校に於ける訓育と云ふことは、餘程是は考へてやらなければならぬ。或點から申しますと教授に骨を折るよりは、より以上の訓育に骨折らねばならぬことになりませぬ。若し訓育で旨く指導が出來ますれば、所謂此公民たる資格が出來るばかりではない、其自分の専門の業に就て常に研究心を持ち、其仕事に斷へず進歩的の考を持つて従事して行く性格を持つた者も造上げることが出來ると云ふことになるのでありますか

ら、補習學校に於ての訓育と云ふことは、餘程吾々が考へて之を施して行かなければならぬ。其訓育を施しますには申す迄もなく此時期の少年なり青年なりの生理状態心理状態と云ふものを吾々は能く理解して、少年の心理、青年の心理と云ふことを根柢に置いて其訓育を圖つて行かなければならぬ。

訓育の方針 前に申したやうに此時期の少年なり青年なりは餘程自治心が發達して來て居る、それを旨く指導さへして行けば、さう煩瑣な手数を要せず、而も其性格を堅實に造上げて行くことが出來ると云ふことになるのであります。

然らば其公民としての訓育はどう云ふ點を狙つて行くべきであるかと申すと、是は詰り自分の意志、其意志は今申しましたやうに段々自治心が發達して、自己活動力が強くなつて居るやうな状態にあるのであります。其自己の意志と、それから自分が身を處して行く社會的境遇、或は廣く申しますれば國家社會の意志と旨く調和させて、自己の意志を國家公共の意志に従はせて行く。さう云ふことが詰り公民としての訓練と云ふ意味になつて參ります。今日の公民として立ちますには、自分が國家社會の政治にまで參與するといふ資格を有するのであります。自分の専門とする農工商の仕事から云つても、其仕事は矢張大きな社會的事業であります。政治上から云つても職業上から云つても、自分が大きな國家社會の公共生活に入つて行くといふやうな前途を有つて居るものでありますから、それを訓練するには其大きな公共團體の中に自己を正しく處せしめて行くやうな、さう云ふ訓練を與へることが、公民教育としての訓練と云ふことになるのであります。他の國民と同様に共同責任の感を持つて、其職業に勵んで行くやうな性格を持つた者を造らなければならぬ。更に今度は職業教育の方から要求する訓育はどう云ふことを要求するかと云ふと、詰り所謂勤勞の精神、

自分の職業の神聖なることを理解し、働くことが面白い、農工商孰れかの方面に働くことに依つて自分が此世に生れて來ただけの價値ある生活を送らう、自分の足跡を實業に依り、自分が死んだ後までも残さう、自分は農業なり工業なりに於て自分の手足を勞し、自分の精神を勞して何か新しい物を生産し、其生産した物は永久に何處かに残る。其仕事を自分がして居ると云ふやうな考で、生産に従事する人を造らねばならぬ。商業の方から云ふと其生産した物を各地に分配して有ゆる人の生活の向上を圖る。夫れが爲に物質文明を進めるだけではない、精神文明を發達せしむる所以であると云ふことを理解して、商業をやる人を造らうと云ふ、さう云ふやうに勤勞を喜ぶ人を造ることが職業方面に於ける訓育の目指すべき所であります。それで實業補習學校に於ける訓育としまして、國家公共の意志に自分の意志を従はせて行くやうな訓練を與へ、同時に、職業の神聖を理解し、勤勞の精神を以て其職業に勵んで行くやうな人を造らうと云ふ、さう云ふ性格、さう云ふ意志の力を持つた者を造らうと云ふことが訓育の仕事になつて行くのであります。唯専門の知識技能を得さるだけでは實業補習教育を與へたとは言へない、公民としての訓育、實業家としての訓育を與へて、一方には國家公共の爲に働き、他方には喜んで其職に當つて行くと云ふ、さう云ふ實際的の意志の訓練を経たものを造上げると云ふことを目指して行かなければならぬ。

勤勞作業團體の組織 それにはどう云ふ風にすればさう云ふ訓育が實業補習學校で行はれて行くか、御參考までに獨逸のミュンヘンでやつて居りますケルシエンシュタイナーの配下の學校の訓育の方法を御話して見ませう。是は必しもケルシエンシュタイナーの考だけではない。英吉利や亞米利加には大體斯う云ふ考が強いのであります。亞米利加の哲學者教育者として第一に推されますジョン、デューイ、此人の考なども、

ケルシエンシユタイナーには影響して居ります。ケルシエンシユタイナーの考にすると、實業補習學校で公民教育を施し或は勤勞を喜ぶ精神を持つ人を造るには、學校其ものを勤勞作業團體に組織しなければならぬ。勤勞作業團體に組織すると云ふ意味は、恰度昨日勤勞主義の教育を御話致した時に申しましたやうに、學校と云ふものは唯靜に智識を授くる場所であつてはならぬ。生徒が活動して、恰度工場で物を製作して居るやうに、生徒が活動して智識を得ると云ふことにならなければならぬ。是迄の學校のやうな靜な場所、兒童が受身になつて智識を受取る場所、さう云ふ場所であつてはいけない。智識の工場でなければならぬと云ふ風に考へて居る。學校に入れば働かずには居られない、働くことに依つて學ばしむると云ふやうな空氣で學校其ものを満たさなければいかぬ。言換へれば學校は學術を學び藝術を學び、道徳を學ぶ場所と云ふよりは、「生活」其ものを學ぶ場所でなければならぬとして居ります。

此考はケルシエンシユタイナーだけでなく、氏に影響を與へたデューイも大變此考を強く持つて居ります。デューイの考では學校は生活の準備をする場所ではない、學校は生活其ものを教へる場所で、生活其ものにならなければならぬ。生活を理解せしめるが爲に學問も教へ、藝術も教へ、道徳も教へることか云ふことが學校の目的ではない。實際社會に於ては學問が應用されて居る。藝術が味はれて居る、道徳に依つて社會團體が動いて居る。それを知らせる爲に學問を教へ藝術を教へ道徳を教へることにならなければならぬ。何が爲に學校で學問を教へ藝術を教へ道徳を教へるかと云ふと、畢竟は生活に導き入るゝにならぬ。大學などは學問を教へることが目的としても宜いが、普通教育或は實業教育は生活其ものを教へ、生活其もの

に導き入れることになつて行かなければならぬ。かく學校を生活其ものに導き入れる場所といふことにすると、學校の價値、學校の意義と云ふものは非常に變つて來る。學校は先きに行く準備ではない、學校其ものは生活に導き入れる場所であり、學校其ものに非常な價値を持つて來ます。少年や青年は大人になる爲に少年青年の道を歩くのではなく、少年青年として人間の歩むべき道を歩いて居るのであります。大人になるが爲に少年青年の時期があるのでなく、少年青年の時期は其時期に意義がなければならぬ。學校は生活をする準備を爲さしむる所とすると、學校と云ふものは生活の方便にならなければならぬ、向ふに行く道を行つたに止らなければならぬが、學校其ものは人間として國民として公民としての道を歩きつつある、其生活をしつつあると云ふことを考へて教育をしなければならぬことになり、非常に學校教育の意義が重くなつて來る譯であります。準備と見ない、其もの自身に價値があると見る、其ものに生活の十分な意義があると見て行くのであります。又斯う云ふ風の考にすると學校と云ふものは實際社會と離れたものであつてはいかない、實際生活が學校の中にも導き入れられて來なければならぬ。學校と云ふものは從來恰も寺院が山の上に在つて俗世間から離れて居つたと同じやうになつて來たが、今日の學校若くは今後の學校は實際社會と觸れ、實生活と觸れ、生活其ものに少年なり青年なりを導いて、能く立行くやうに教へても行き、訓育もして行かなければならぬ。所謂教育即生活、教育は即ち生活を教へる、教育は實際生活に即して行はれなければならぬと云ふ考であります。斯う云ふ考で學校の教育が施されますれば、學校を卒業してから實際社會に出て迷ふと云ふやうなことがない。今日學校を卒へて實際社會に出ます者は學校で教へられたことが實際役に立たない。學校では非常に立派な教を受けたのであるが、社會に出てはそれが行はれないと云ふ

やうな憾を抱くのは、詰り學校と社會とが非常に隔たつて居つて、此間に障壁を構へて、學校は生活を教へる所でないといふ昔風の教育をしたからであります。之に反し學校は生活と觸れなければならぬといふ考で學校の教授を爲し、訓育を爲し、さうして育てられた者が社會に立つ場合には、何等迷ふことはない。直ちに社會に出て十分な活動をし得なければならぬことになつて來るのであります。斯う云ふ風に學校生活を解釋して居ります。

然らば學校生活の中に實際社會を導入することをもう少し詳しく言ふたならばどうするかといふと、今日の社會生活は經濟生活が基である、今日の社會生活の根柢になつて居るものは何かといふと經濟生活である。社會は經濟に依つて動いて居ると云ふ點を理解させ、經濟生活に立たせるやうに導いて行かなければならぬ。随つて學校の中で教へることは數學であるとか理科であるとか手工であるとか、或は商工業に關した事であるとか、女子でありますれば家事科、さう云ふやうな科に重きを置いて行かなければならぬ、其設備も亦十分にしなければならぬ。理科などの爲には十分な實驗室或は家事科の爲には立派な設備をしなければならぬ。實業科を課するならば、其實習も爲させなければならぬ。斯う云ふ風に考へて其學校と云ふ一つの生活團體、社會團體は經濟を中心とした勤勞作業團體に組織しなければならぬ。言換へれば學校の組織學校の生活を經濟化し、道徳化し、或は社會化しなければならぬ。さうして其學校全體の空氣の中で前に申した自己の意志と國家公共の意志を一致させ、或は勤勞を喜ぶと云ふやうな精神を養成して行かなければならぬ。學校に入れば自分と他の事を同時に考へて、協同責任の感で働かなければならぬやうに訓育を施して行かなければならぬ。學校に入つたら働かずに居られない、働くことが人間の務めであると云ふやうに學校の組織を造つて

行かなければならぬとするのであります。ケルシエンシユクタイナーの考をもう少し細かく説いて申しますと、ケルシエンシユクタイナーは學校を勤勞作業團體に組織することに依つて、第一に公民教育と云ふ方面から觀まして、自分の身を處して行く場合に、常に自分と他と、或は自己と全體と云ふことを考へる、訓育が行はれて行くことが出來ると云ふことを説いて居ります。即ち學校に於て大勢の者と何かの作業をさせる。作業は一人ばかりでは出來ない、先生の指導も要るし、同學の協力の要する。作業して居る間に自から自分と他人と互に助合つて行かなければならぬ。互に助合つて行くことに依つて其仕事も出來て行き、學校全體の空氣も緊張して行くことが出來ると云ふことが分つて來る。秩序を重んずると云ふやうな訓育も其間に行はれて來る。言換へれば共同心、共同的精神が勤勞作業團體の間に自から養成されて來るとして居ります。

更に今度は職業教育の方から之を觀ますと、勤勞作業團體に學校を組織して訓育をして行くことになる。學校其ものが勤勞を喜ぶと云ふ精神に満ちて居る組織になつて來るのでありますから、働くことが非常に面白い、忍耐し刻苦して或仕事を仕上げるのが非常に面白いと感じ、又事業を爲すにつきての確信も其間に養成され、職業の神聖なることを理解させることも自から行はれて行くことが出來ると云ふやうに考へて行つて居ります。實際ミュンヘン市の實業補習學校に行つて見ますと非常に活潑なものであります。ミュンヘン市は商工業の土地でありまして、農業は入つて居りませぬが、皆全力を込めて商工業の實習などをやつて居ります。恰度吾々工場で職工がそれ々の方面に汗水垂らして働いて居ると同じことで、學校が一つの工場となつて居ります。

併し斯う云ふ風に學校を勤勞作業團體にすると云ふ考の中に詳しく分けますと二種あります。ケルシエン・シユタイナーやデューイなどは所謂經濟中心の團體に之を造上げやうと云ふことで、謂はば實用主義、さう云ふ風にすることに依つて、結極の目的は實業の帝國若くは實業の王國を建設させやうとし、筋肉勞働に非常に重きを置くやうになつて居りますが、之に對し同じ勤勞作業團體のことに賛成をしながら、もう少し異つた考を有つて居る者は、是は實用主義に對して理想主義を取るものであります。是は獨逸の方でも亞米利加に於ても或は英吉利に於てもありまして前に申しました丁抹の如きも一の宗教的な精神的な考から勤勞をやらせやうと云ふ考で居り、さうして此方の理想は詰り一つの高い文化國を造らうとし、従つて頭腦の勞働を尊ぶと云ふ風になります。勤勞團體に組織することは何等異論が無いのであります。其團體の生活の理想は高く立て頭腦の勞働も尊び、心の底から勞働を喜んで働くやうな考を有つた者を造つて行くことにしなければ、矢張經濟生活で甘んじて行くこと云ふやうな考の者が多く出来て來はせぬかと心配されます。實業と申しても單に經濟生活を高むるのみが實業の目的ではない、文化の發達に貢献せしむることを頭に入れて人を造つて行かなければならぬ。さうするには作業團體の中に理想的精神的の考を含めて之を指導して行かなければならぬことになつて來ます。

斯う云ふ風に吾々が公民としての訓育をやり、若くは實業家としての訓育をします場合に、勤勞作業團體に組織さへすれば、公民の資格も出來、實業家の資格も直ちに出來るかと思はれますと、まだ少し不十分な所がある。實業學校に於ての訓育の方法としてはもう少し足らぬ所がありはしないか、唯學校生活を實業團とし、實業生活を理解させる、或はそれに導き入れる場所とすると云ふだけで足るかどうかと云ふ問題が起つて來ます。之に就いては英吉利、亞米利加で段を始めまして、今日は歐羅巴の方にも次第に行はれて行きつつある學校自治制を参照することを要します。

學校自治制 學校自治制は現今亞米利加では小學校から之を行つて居ります。どう云ふ風にしてやること
が學校自治制の精神であるかと申しますと、亞米利加の教育家達の考は、小學校なら小學校の兒童、中學校なら中學校の少年青年は夫れ自身自分を治めて行かうと云ふ精神を有つて居る。それ、自尊心を有つて居る。殊に年齢が長するに従つて他から支配されることを厭ふ傾がある、結局人は自ら治めることになつて行くのが、其生活の進歩である。學校に於ても小學校であらうが中學校であらうが、出來る丈自治心の發達を助成して行かなければならぬ。さうすることに依つて獨立な自由な人間が出來て行く、それに依つて眞の自治的の國家社會を組織して行くことが出来る。一體是れ、の規律は守らなければならぬと云ふやうな風に訓練をして行くことは是は時代遅れの導き方である、今後の教授にしても訓練にしても總て兒童夫れ自身に懇へ、自發的に物を學び、或は自分の身を處して行くやうに指導して行かなければならぬ。他から支配されることの代りに、自分で立つて行くと云ふ訓育を與へなければ、今後の公民は出來ないと考へて居るのであります。さうして若し斯う云ふ風の訓練をすれば、今日亞米利加で政治上の選舉などに對して、色々面白からぬ事が行はれて居るが、さう云ふことが段々矯正されて行くことが出来る。亞米利加を眞の民主國にするには學校に於て學校自治制を行ふに勝ることはない、是が眞に亞米利加を盛んにする根本の方策であると云ふやうに説いて居ります。是は何も共和國だけに必要な組織では無い。我國のやうな君主國に於ても政體が立憲政體になつて居る以上は、矢張吾々の兒童を教育するには亞米利加のやうな民主政策を執る譯には行き

ませぬけれども、吾々七千萬人が、天皇陛下の御許に一團となつて働いて行き立憲君主國の模範を示し得るやうに導いて行かなければならぬ。さう云ふ考からすると實業學校の訓練に於ても自治心を助成せしむることは考へて行かなければならぬ。すぐ亞米利加の真似をする譯には行きませんが、立憲政體を十分活用し得るやうに、國民を訓練して行かなければならぬ。殊に實業の方は自己の力で立つ仕事でありますから、實業家の間に殊に斯う云ふ自治的精神が強くなつて來なければならぬ、自治的精神から本當の共同責任の考が起つて來ます。

然らば亞米利加ではどう云ふ風に學校自治制をやつて居るか云ふと、中學校では無論でありますけれども、小學校に於てすら學校の管理訓練をする場合に、成るべく生徒に管理訓練の責任を負はせ、生徒の中から色々委員を選ばせる。其委員に學校の管理訓練を分擔するのであります。學校の規則を拵へるにしても先づ生徒の委員を招集して、生徒の委員に作らせて見る。學校の規律が斯う云ふ風に云つて居らぬが、どうしたら直るか、之を直すことを考へて來いと云ふて、生徒に立案させる。無論子供が立案するのでありますから、完全なものが出來ないこともある。そこで校長や教師がそれを修正してやる、其修正して助言を與へたものが學校の規則として行はれるのでありますから、生徒から云へば、自分等が作つたもので、之に背くことはならぬと云ふことになつて、學校の管理訓練が旨く行はれて行くのであります。無論委員の選び方に就ては小學校で云ふと一年から四年までの者には選舉權も被選舉權も與へない、所に依りますれば四年以上に選舉權を與へる。被選舉權は無論最高級、亞米利加の小學校は八學年が本體でありますから、七學年八學年が委員に選ばれると云ふことになってあります。其委員の中には圖書の委員もあり、衛生の委員もあり風

紀の委員もあると云ふやうに學校生活の各方面に關するものに皆委員が出來る。校長教師から云ふと大變手数が省ける、校長教師は大綱さへ括つて居れば宜い。子供であるからさう云ふ事は出來ないと云ふことを考へるのは間違であつて、子供には自由を與へ、責任を與へれば、却て立派な仕事を仕遂げて行くものであると云ふのが亞米利加の教育家達の考であります。自由を與へ責任を負はせないから却て悪い事をする、無責任の事をする、或は人の目を盗むやうなことをする傾向のあることは争はれません。それで其自治心に訴へて行くことは我國でも執つて然るべきことと考へますが、其方法は我國で工夫して行かねばなりません。

保健衛生 此訓育に關係して保健衛生並びに思想及生活の善導につき卑見を申述べます。保健衛生並びに思想と生活との善導につきましては、今度の實業學校規程改正に伴つて文部當局より御示しになつて居る所でありますが、如何にして之を行つて行くべきかは實際の教育に當つて居るもの、解決せねばならぬ所であり

ます。實業補習學校は一週間の教授時間數も少いのでありますから、學科を教へるだけでも漸くのことであつて、保健衛生に力が割かれなないと云ふやうにも考へられますが、出來るだけ保健衛生に關する教授もしなければならず又訓練もするやうに努めて行かなければなりません。保健衛生に關して第一に問題になりますのは實業補習學校に體操を入れるか否かと云ふことであります。是は歐米諸國に於ても問題となつて居ります。一日申しました佛蘭西の實業補習學校にては良き兵卒を造ると云ふ目的から、毎日曜日の午前を體操並に遊戯の時間に充てると云ふことに原案が成つて居ります。是は其際にも申しましたが、實行にはなつて居りませぬけれども、若し議會の承認を経ますれば直ぐにも實行されることであらうと思ひます。獨逸の實業補習學校

に於ても現在は體操を入れて居らぬのでありますけれども、入れなければならぬと云ふ論が非常に強いのであります。學校の學科としては入れないが、學校の體育の設備を自由に開放して體操や遊戯を爲さしめることは實際に行はれて居ります。亞米利加のペンシルバニア州の費府にワナメーカーと云ふ人の持つて居る高い大きな「デパートメント、ストリーアー」がありますが、此商店では大勢の使用人に對し、毎日交代に或一定時間仕事を休ませて體操をさせることになつて居つて、其結果は非常に良いので、段々一般に行はれる傾向を有つて居ると云ふことであります。それで實際の仕事に従事しましても斷へず身體を練ることが必要でありますから、さう云ふ習慣を實業補習學校で付けて置くと、實業に従事する場合になつてもそれが役に立つのでありますから、必修科として置かなくとも、隨意科として體操科を置くことが好ましいことであり、働かせない部分を練らせ、さうして全身の發達、全身の健康を助けると云ふやうにすれば結構です。それで農業中心の實業補習學校或は工業中心或は商業中心の補習學校には學校々々の性質に應じて多少異つた體操若くは遊戯を爲さしむることが必要であります。それには之を各學校々々で研究もし工風もして、さうして其職業に従事する以上はさう云ふ體操なり遊戯なりを一生涯試み、自分の健康を保つやうに導きたいものであります。それと併せまして實業補習學校に於ける保健衛生に就ては、ミュンヘン市の實業補習學校で教へて居ります國民科の生活指導の中にありますやうに、商業なり工業なりに従事します上に、身體の上に斯う云ふ障害を受け易いとして、それに對する色々の衛生法を説くことになつて居ります。斯う云ふ事も我國の實業補習學校では今後段々に研究もし實行もして行きたいものであります。

それから此實業補習學校に於ても保健衛生に關聯して必ず起る問題は、口にすることを避けると云ふやうな形になつて居りますが、併し實際は非常に大きな問題と云ふべき性に關することであり、丁度此實業補習學校に入つて參ります者は性慾が目覺める時であります。男子に致しても女子に致しても此性慾を一言に動物的の慾と云ふて卑しむ傾向がありますが、これは間違つた考であります。之に依つて吾々の子孫の繼續、大きく言へば人種の繼續が出来て行くのでありますから之は慎重に取扱はねばならぬのであります。此慾には非常に重大な精神的意味があります、吾々の性慾が起ることに依つて同時に精神も發達を致します。性慾が起らなければ眞に他人を愛すると云ふやうな精神は起りません。性慾の發動に依つて人を本當に愛する、廣く言へば人類を愛することも起つて來ます。例へば男子にして外科的手術に依つて生殖機關に障害を來し、或は女子にして卵巢を取られますと、其人には他人を愛すると云ふ精神が缺けて來ます。宗教にしても道徳にしても段々それを煎詰めて行くと、其教は性慾に非常に深い關係を持つて居ります。それであるのに之を口にするのは宜くないとして臭い物に蓋をして行くと云ふやうな形で放つて置いた所が、實際吾々が教育をする少年青年の身體の中から、精神の中から此慾が萌して來るのでありますから、之を棄て、置くことは出来ません。之をどう云ふ風にして教育すべきか、性に關する知識は與へずに置くが宜いか否かと云ふ問題は、非常に大きな教育問題であります。實業補習學校の教育に御從事になつて居らるる方々は此問題の爲に御困りになつて居ると考へます。併し吾々が困つて居る通り世界各國でも困つて居るのであります。性の教育は非常に困難な問題になつて居るのであります。獨逸でも佛蘭西でも英吉利でも亞米利加でも科學の上から性慾に伴ふ衛生若くは病氣を説明すべしとする人があります、或はそれは却つて弊を伴ふとして反對

する人もあります、或は之は實際の上で運動なり其他の方法に依つて適當に指導するを要すると云ふやうに説いて居る人もあります。或は又さう云ふことを學校で教ふべきものでない、科學的に之を説明したからと云つて、其科學的の知見からして此強い性慾を抑へられるとは限らない。却つて説明した爲に、性慾の發動を促して、悪い習慣などを知らせることが起り易いから、口にすべきものではない。寧ろ之は宗教的道德的の訓練で、之を抑へる力を養はしむべきであると説く人もあります。又は學校で校長や教師が教ふべきものではない、學校醫が教ふべきものである。學校醫は是は専門の方でありますから是が説けば説かるる者も異様に感じな云といふ説もあります。或は博物の先生が宜からう、是は植物や動物の繁殖作用を説きますから、自然に學理的に性の説明が出来ると説いて居る人もあります。中には學校の教師の仕事でない、親の仕事である。男の子に向つては父親、女の子に向つては母親から説くのが至當の事である。それで之は家庭の仕事にしたら宜からうと云ふやうな色々の説があります。是は實際に試みて何れが最も結果が良いかと云ふことを試さなければなりません。要するに是は學校の教場で説くべきものではなくして、説くにしても個人的にすべきことではないかと考へるのであります。

何れにしても性に關することは子供自身が知りたがるものであり、又少年少女が教はらぬでも知るのであります。知る慾が起つたならば適當な説明を與へて間違はぬやうにすることが大切な事であり、其仕事に親が當るか教師が當るか云ふことも、必ずしも一定しなくとも宜しい、場合々々で處置をして行つたら宜からうと思ひます。殊に訓育上からどう云ふ注意を與へれば宜からうかと云ふと、成べく性慾の挑發を避ける、發動期には猥らな話を聽かせない、猥らな繪を見せない、或はさう云ふ類の小説を讀ませない、同時

に境遇を綺麗にして、さう云ふことに考を向けないやうに仕向けて行くことが必要であります。是は消極的の方であります、積極的には文學、藝術、或は園藝或は社交に興味を有たせ、就中運動慾を旺盛ならしむることが大切であります。少青年期は體力が非常に發育して來る時でありますから、自から運動慾が強い、それで適當な遊戯或は體操を課し、晝、眼が覺めて居る間に十分働かせ、夜床に就いたならば直ぐ眠つてしまふやうに獎勵することが大切な導き方であります。中にも英吉利では此少年青年の時期を無事に過させるには、運動遊戯が最も大切である、之に依つて性慾發動期を無事に過させることが出来るばかりでなく紳士として或は淑女としての性格も運動に依つて養成されると唱へ、之を實行しても居ります。運動遊戯を非常に獎勵し、勝つにも綺麗に勝て、力の有る限り奮闘せよ。と云ふ習慣を英吉利は獎勵して居ります。英吉利ではフエヤー、プレイ即ち公明正大に奮闘して見事な勝負を附くることを遊戯だけで無く處世上に大切な事と考へて居ります。而して英國人ばかりでなく一體に歐米人が吾々に比較して割合に體力が強くして長く仕事に堪へる所以は、即ち彼等が體操及遊戯を年取つても試むるからであらうと思はれます。我國では學校では體操や遊戯を習つても、家庭の人となれば止してしまひますが、今後の實業學校に於ては矢張學校に於てさう云ふ風の習慣を養成して、教授時間内に體操の時間が無ければ、科外として之を獎勵せられたいものであります。亞米利加でもさう云ふ考が強くあります。運動遊戯をしなくては機敏な敏活な或は共同心のある人間は出來ないと考へて居ります。遊戯運動は身體を練るばかりでなく、精神を非常に敏活にし、共同心を養成すると云ふ價值を有つて居ります。種々の學科なども運動の間に應用される場合が多い。即ち科學的に數學的に運動遊戯をやつて行くで無ければ今日の立派な運動遊戯は出來ないことになつて居ります。

さう云ふ風に考へて見ますと、保健衛生と云ふ方面に矢張實業補習學校では爲される事が中々多いのみならず、今日の衛生上の考に於ては、病氣にならぬやうに吾々は平生から自分も注意し人も教へて行かなければならぬ。病氣になつてから醫者に掛ると云ふことでは手遅れである。醫者は病氣を治療する爲にあるのではなく、病氣しない爲にあるのであると云ふやうに、今日は衛生の考が大分變つて來て居ります。歐羅巴では醫者の収入は病人を治療する収入よりは、健全な人から保健の助言者として受ける収入の方が多くなつて來て居ります。少し届いた家庭では係りつけの醫者に絶えず自分の家族の健康状態を診て貰つて、或はどう云ふ食物を攝つたら宜いかと云ふことに注意をして貰つて、それに對して報酬を出すことになつて居ります。病氣になつてから醫者に駐付けると云ふことでは、それは遅いことであつて、病氣にならぬやうに吾々は注意しなければならぬ。さう云ふ考で今後の少年青年に衛生的の訓練を與へて行くことをしなければなりません。

思想及生活の善導 更に實業補習學校の訓練として思想及生活の善導を爲さるべきことに付いて申上げます。是が又實業學校に於ての訓練で骨が折れることであります。併し之をして戴くことに依つて少青年は救はれて行くのであります。十二三歳から十七八歳までと申すものは身體上の激變も來ますが、精神上の激變も來る時代であります。一方では非常に熱心に英雄的の行動を好みますが、他方では非常に感傷的な心理状態になるのであります。どうかすると華嚴の瀧に走ると云ふやうなことも起つて來まして、非常に細かい指導を要します。殊に今日のやうに思想が動搖し、舊い思想が壊れかかつて新しい思想が起らんとする状態でありては、一層此思想の指導には骨が折れる譯であります。それに就ては例へば少年青年の讀物として思想

問題を非常に知りたがる、或は文藝物を讀みたがる、之を今日の家庭でも學校でも幾らか抑へる傾向がある。例へば社會主義のことを書いた物は讀むな、戀愛小説は讀むなと抑へたがりますが、併し是は抑へ了せるものであるかどうか、知りたがる欲のある者を知ると云ふても、果して知らずに止むかどうか、却て知りたがりはしないか、寧ろ讀んで見ろ、どう考へるか、と此方で批評してやり、其目を覺させるやうに指導して行くことが大切であります。尤もそれ次に指導するにはそれ丈の批評眼がなければなりません。無論さう云ふものを書く者も唯西洋の思想なり藝術なりを其儘に我國に紹介するだけではなく、出來るだけ批評を加へて紹介すると云ふやうなことは、しなければなりません。之に就ては出來得べくんば各學校々々で少年なり青年なりの讀物として出版される物に就て審査を御加へになり、さうして斯う云ふ本は讀んで然るべし、斯う云ふ本は讀んではいかないと、學校に掲示し或は學校の圖書室に備へ、或は父兄にも注意をし或は新聞にも宣傳して、斯う云ふものを讀めと云ふことを示すこともしなければならぬと考へます。唯抑へるだけではいけない、選擇して良いものを提供しなければならぬ。健全なるものを供給して置けば、初めから不健全なものを讀みたがらなくなります。さう云ふやうに良いものを提供さへして行けば、悪いものが讀まれる餘地がなくなりませんから、さう云ふやうに思想の指導に骨を折つて戴きたいと思ひます。

併し青年を救ひますのは單に思想の方面からだけでは、又生活を指導しなければならぬ。生活の善導、是はどう云ふことを意味するかと云ふと、詰り其適する所に従つて、其人を適する職業を與へ、之を社會に送出すことでもあります。前に申した通り學校其ものが一の生活であります、此學校に於ては能く此生活を理解せしめて、それ／＼の方面に向け、働かしめねばなりません。其爲に所謂職業の指導と云ふことを學校で

しなければならぬ。同じ商業にしても、商業に各方面があります。工業に致しても工業に各方面があります。農業に致しても種々の農業があります。此青年は商業のどの方面、之は工業のどの部分、農業のどの部分と云ふやうに其適する方に向けて行かなければならぬ。適する方に自分の専門を指導されると、其爲に非常に興味が出て來ます。是迄面白くなかつたものが面白くなつて來ると云ふものが出て來ます。何か其人に適する事を見付けてやるのが教育者の必要な仕事で、それに依つて其人を救ふことが出來ます。昨日渡邊博士の話されたやうに實驗心理の機械で人の能力が分れば此事もやつて見る必要がありません。併しそれだけで果して人の才能が悉皆分るとも考へられませんが、之は矢張校長教師の心の眼で其者の生活、其者の才能を看破して、どう云ふ方面に此人を向けて行くかと云ふことを看て行かなければならぬ。機械の力でも判りませうが、機械の力だけではいかに、精神の眼で見なければならぬ。精神の眼で見るとは本當に慈愛の精神が其根底になければならぬ。職業の指導は個性を見て、それに適した職業を指導してやることで、若し個性に適した職業を校長なり教師なり手に依つて得ますれば、魚が水を得たと同じく、自在に社會に活動して行くことが出来るのでありますから、それに就ては學校の當事者は其地方の實業團體と相聯絡して、紹介をしてやる必要があります。米國のデーリー市に於ける教育組織の一は職業の指導であります。デーリーの學校をみますとそれが皆デーリー市の諸方面に連絡を取つてありますから、適所に適材が向くやうになつて居る。其者が仕事に従事して、もつと學校に歸つて勉強したいと思へば、又學校に歸ることが出来るやうになつて居る。學校と社會とが一緒になつて居る。殊にデーリーの學校では普通の學科は其學校專屬の教師が教へますけれども、技能に關した事とか若くは實業に關した學科は其デーリー市の商工業の各専門家が來て、

教へることになつて居ります。それでありますから其自分の教はつた先生の許で今度は實際社會に出て働くこと云ふやうな關係になつて居る。學校と社會とは非常に密接な關係になつて居る。のみならずデーリー市の學校では商店の主人、工場の主人へ斷へず學校に來て貰つて、貴方の所から來た者を使つて見たら斯う云ふ缺點がある、斯う云ふ長所がある、此缺點をもう少し直して呉れと云ふやうに注意を受くることになつて居つて、デーリー市の者は其學校生徒を自分の子供のやうに考へて愛護して居るやうになつて居りますから、職業の指導が非常に圓滑になつて行つて居ります。是は我國でも幾らか手が著けられて居りませうが、もう少し學校と實際社會との連絡を旨く取つて行けば、生活の善導に効力が現れて參らうと思ひます。

尙ほ此生活の善導と云ふ中には今の職業を旨く指導するだけではない、今日生活改善として叫ばれて居る吾々の家庭生活の改良、是も能く御教へにならなければいけません。歐米は我國から比較すると家庭生活の上で時間にも勞力にも金錢に於ても無駄がないやうに注意をして居ります。併しそれでも今度世界戦に於て働手は戦場に出る、家は其の妻であり母である人が守らなければならぬ、食物は不自由になつて來る、物價が騰貴して困難になつて來ると云ふことで、非常に生活を切詰めました。さうして今更の如く是迄の生活はまだ時間、勞力、金錢が無駄であつた、もつと切詰めなければならぬと云ふて、生活を切詰めて居る。斯う云ふ眼から見ると我國の家庭生活は非常に不秩序な非科學的な、時間も勞力も金も無駄なことをして居る。家毎に飯を炊き一々お菜を拵へて居る、お互の友人關係親戚關係に於てもやれ子供が産れたとか、旅立つとか云ふと、大切な時間を義理の爲に非常に費して居ると云ふ譯であります。もう少し家庭生活社會生活を切詰めて、出来る丈時間と勞力と金とを費へないやうにし、もう少し秩序が立つて行くやうにしなければ

ならぬ。斯う云ふ事は實業家の家庭なり日常生活なりに於ては一番實行し易いことであるから、實業家の方から段々斯う云ふ事を秩序立て、行くと云ふことにしなければならぬ。斯う云ふ事に就ては是は女子だけではない、男子に就ても家庭生活社會生活の改善と云ふことを、今後は餘程能く教へて行かなければならぬ。英吉利のスペンサーの教育論に書いてありますが、今日の教育は國家社會の爲めに働く人を造ると云ふ、大きなことを言つて居るが、大切な足下の自分の家を造ると云ふことをどれ丈教へて居るか、一家の父となり母となる者を造る爲めにどんなに教へて居るかと云ふと本當の教育が出来て居ないと云ふことを言ふて居ります。先づ自分の家庭生活の改善、是が國家の健全になる基でありますから、之を善く導くことが必要であります。さういふ事は何も實業補習學校に来て居る子供が一家の主人にならなければ出来ぬと云ふものではない、歸つて家に宣傳するも宜い。今日學校の先生から衣食住は斯う云ふやうにするが宜いと聽いて來ました、さう爲さいと、其者にも家庭生活の改善を實行させる位の意氣込で生活の指導をやつて戴きたい。今生活改善と云つて立派な方々が御働きになつて居りますが、それよりは貴方がたが教育なさる間に家庭生活社會生活の確な方法を御授けになつて、直にそれを實行するやうに導く、ことが遙に有效であります。

斯う云ふやうに考へますと、中々實業補習學校で爲さる訓練と申しても尠からざる仕事があります。それを爲さることが本當に教育を爲さる意義であります。個人々々に觸れて即時即座から實行の出来るやうな活きた力を與へることが最も有效な教育であります。

是で講義を終る譯であります、まだ説いて詳ならぬ點が御疑問としてありますれば、何時でも手紙でも宜しうございますから御尋下さい。私は東京商科大学の商業教員養成所で教育を擔任して居りまして、多少

實業教育に關する理解も有ち、興味も有つて居る積りであります。随つて諸君と共に實業教育に於て、諸君は實際方面から、私は理論の方面から協力して我國の實業教育を興すことに、少しの力でも致したいと云ふ考を有つて居ります。今後に於ても何か諸君の方に御疑問がありますれば、歡んで御答致します。或は私の方からも出て諸君の實際にやつて御出でになることを拜見して、忌憚ない意見を申し上げることがあるかも知れませぬ。

獨逸に於ける教育の現状と實業補習教育

附録 普國職業補習學校の組織並に教案に關する規定

獨逸に於ける教育の現状と實業補習教育

小樽高等商業學校長
文學博士 渡邊龍聖君講演

私はどつちかと申しますと、實業補習教育てふ問題に就ては彌次馬の方であります。私の専門ではありません。又私の現職は高等商業學校長であります。但し實業補習教育に就ては彌次馬ながら、熱心な彌次馬であると御承知を願ひたい、昨日も文部次官に實業補習教育は義務教育として貰はなければならぬ、義務實業補習教育令を是非とも今日の如き有力なる内閣に於て、有力なる文部大臣に於て御發布になることを、希望すると云ふ事を懇々述べたのであります。私は昨年文部省から命令を受けまして、歐米を巡回致しました。昨年九月出發致しまして本年四月に歸へりました、往復日數とも約七箇月間の旅行でありました、船中の日數、是に要した所の準備等の日數を合せますと、八十日程掛つて居りますから之を引けば正味は百三十日、亞米利加では土曜日日曜日は學校がありませんから、是等の休み、汽車に乗つた日數等を差引きますと、正味凡そ六七十日も學校を參觀致した位のものでありませう、それも覺束ないやうな次第であります。又此六七十日間には實業補習學校を見たと言ふ譯でなく、何でも彌次つて歩くのでありますから、實業補習教育視察の爲めに費したる時間は寔に僅少である、僅少な此視察で諸君の如き専門家の前で、御話すると云ふことは

甚だお恥かしい次第であります。但し間違つた事だけは話をせぬ積りであります。知らない事は知らないと言つてすつばらかして置く積りであります。

私が旅行中に先づ第一に亞米利加で眼に付きましたのは、實業振興熱であります。英國でも之が眼に止りましたが、亞米利加程ではない、英國では此戦争の創痍を癒やす爲めに、國民が努力致して居りますから、まだまだ實業振興熱が教育者の眼に止まると云ふ程ではありませぬでしたが、亞米利加は此戦争に依つて莫大な利益を得て居りますから、さうして此戦争に依つて敵國から偉大なる教訓を與へられて居る結果、何でも實業教育、而も其實業教育は、専門教育と云ふ高等程度の教育よりは、寧ろ普通な簡易なる實業教育を振興しなければならぬ、と云ふ事で、中央政府でスミス、ヒューズ、アクトと云ふものが出来ました、それを千九百十七年から各州各地で實施せんとして努力致して居ります。其狀況を有り有りと見て參つた譯であります。さて米國各州でスミス、ヒューズ法令の趣旨に従つて先づ第一に着手しつゝある所ものは實業補習教育の義務實施であります私の視察中斯う思つたのであります、元來實業補習教育を義務教育として實施した所ものは獨逸國聯邦である、獨逸聯邦中其最も早きは約三十年前に義務的補習教育を實施して居るので、今回戦争に負けた戰敗國が戰勝國に對して教訓を與へたのは、獨逸の斯義務實業補習教育である、戰勝國たる英米佛共に獨逸の義務實業補習教育の偉大なる效果に驚かされ、英ではフイツシャ法令が顯はれ、米ではスミス、ヒューズ法令が顯はれた譯である、斯かる次第で私の見聞談は先づ第一に獨逸から始める事に致します。旅行は獨逸が一番終りでありましたけれども、話は逆に獨逸より始めます。

實業補習教育と云ふ名稱は、第一私にはチト氣に喰はない、補習と申しますと我國の用語の習慣上何だか

やつてもやらぬでも宜い教育のやうに響く、それであるから此名稱はどちらかと云ふと、改稱した方が宜いやうに思つて居りますが、併し強て名稱に拘泥する必要はない、補習と云ふ名稱であつても之が國民の義務教育となつて、國民教育上是非とも必要缺くべからざるものであると云ふことになれば名稱に拘泥する必要はありません。

英米では補習學校のことをパートタイム、コンチニエーションスクール (Part time continuation school) と云つて居ります。是は御承知の通りパートタイムは一部分の時、コンチニエーションは續く、聯絡すると云ふ意味で、即ち時間的聯絡學校と云ふ意味であります。其處で小學教育の接續學校とも見ることも出来ますが、國民教育即ち小學教育を終つたものが「マンホールド」即ち丁年に達するまでの間を接續聯絡する學校と見る方が味が深いと思ひます。獨逸ではフォート、ビルドゥング、シユレーと云ふて居ります、是は補習と云ふ意味もありますが、やはり聯絡と云ふ意味が主であります。又つやいて品性を建設すると云ふ意味もある、私は本年二月プロイセンの商工省の次官(普國では農業の方は別に一省があつて工と商とが一つの省になつて居る)に會ひましたらフォート、ビルドゥング、シユレーと云ふ名稱は面白くないから、近い中に改稱すると申して居りました、要は今少しく緊要の意味ある名稱を用ひたいとのことである、或は今頃は改稱して居るかも知れませぬ、兎に角獨逸ではフォート、ビルドゥング、シユレーと云ふ名稱で過去三十年間行はれて來ました。さうして名稱の如何に拘はらず獨逸では補習教育は教育の正系統の中に入れられて多數國民の仕上教育と認められて居りました、其處に獨逸の教育制度の長所があり模倣せられる丈の價値がある譯である。我國の如く(或は過去に於ける所の亞米利加若くは英吉利の如く)小學校からして中學校、

中學校から高等學校、大學、之を以て教育の正系とする、又中學校から専門學校に這入るのが教育の傍系である、又小學校から實業學校に行くのも傍系である、我國教育制度の現状はさうであります。之れで見ると補習教育と云ふもの、餘地がないから、本當の補習の意味になる、やつてもやらぬでも宜いけれども、おまけに斯う云ふ教育をやるぞ……斯う云ふ事になる、是では値打はない、おまけに補習教育の内容は小學教育の不足を補ふてやると云ふ趣旨で不規則の時間に不規則の授業をするに過ぎないから振はないことは當然である。普佛戦争後、今回の大戦に至る迄、獨逸帝國が産業上工業上異常なる長足の進歩をなした、實に世界を驚かす程の大發展を遂げたが、其最大原因は、實に義務實業補習教育の普及完成にあるのである。然るに、各國の學者が彼の國に遊んで、獨逸の物興は偉いものである、獨逸の商工業の發達は恐るべきものである、之れでは英吉利の商工業の運命は獨逸に依つて奪はれはせぬか……世界の市場は獨逸の獨占になりはせんか……さて其原因は何であるかと其原因を探究に行つた所の人々が、悉く獨逸の大學がよいとか、獨逸の専門學校が宜いとか、獨逸の實業學校が宜いとか、獨逸人はゑらいとか云ふ方面のみに着目して、更に獨逸の補習教育制度に氣がつかなくなつた。我國からも獨逸の教育制度を見に行つた人は少くはなかつたが大學やホツホシユレーの紹介はしても補習教育の調査をした人は稀であつたのであります、それが爲めに獨逸の補習教育の制度と云ふものは、最近迄他の國には餘り紹介されて居なかつたのであります、約十年前前に亞米利加が氣が付いて、ぼつぼつ獨逸の補習教育調査の爲めに調査員を派遣して居つたのであります。我國では最早故人になられました、私の最も尊敬して居つた所の前東京高等工業學校長手島精一氏が、最も早く此點に着眼されたと私は思ひます、私は十年前に獨逸に居りました時に（其當時はまだ私は補習教育の彌次馬

にはならない）私は伯林大學に通つて居りましたが、其當時手島君が見えまして、是非とも獨逸の補習學校を見て行きたいと云ふ事で、私は同君の御供をして補習學校を見物に參つたのが抑も私の補習教育を知つた始めである。同君は其前に藏前の高等工業學校に於て徒弟學校と云ふものを置いて、さうして斯徒弟學校に非常に將來の希望を持つて居られたのであります。私は同君の御伴をして伯林で方々の補習學校の見物に參りましたが、然し私には補習學校よりは伯林大學の方が價值があるやうに其當時は思はれて、ナゼ手島君が伯林大學やテヒニツヒ、ホツホ、シユレーに行かずに學術上何の價值もない理髮人や料理人の練習場（其當時の我輩の考）を感心して見て居るか、私には不審に思はれました。我國の高等専門教育に従事する而も主腦者が之れであるから我國の教育は進歩せぬなど、思ふた私は、今は手島君の墓前に叩頭頓首せねばなりません。

諸獨逸の教育の系統はどう云ふ風になつて居るかと云ふと、最近共和政府になる迄は二様の系統になつて居りました、國民學校系統と上流階級系統とでも申しましょうか、即ち「フオルクス、シユレー」(人民學校)に學ぶ階級とギムナジウム其他の大學に關係ある中等學校に學ぶ階級と二様に分れて居つたのであります。獨逸の中流以上の階級の子弟は、最近までは國民小學に學ばずして直に中等學校の豫備校に入學したのであります。中等學校は獨逸聯邦を通じて大體三種ありますが、其内で最も古く且つ上流階級の教育の理想はギムナジウムでありました。ギムナジウムは紳士教育を目的とする學校で此處では主としてラテン、ギリキの古典を授け、修業年限九ヶ年而も是にはフオーア、シユレーと稱する三ヶ年の豫備校が付いて居るので、上流の子弟は先づ豫備校に入り三ヶ年を経てギムナジウム本科に入り、九年の後大學に

行くと云ふ順序であつた。是は經濟上から所謂惠まれたる少數の國民の子弟が受ける所の教育系統である。職業で申しますならば、將來紳士的の職業に従事する少數國民の子弟が受け得る所の教育である。所がギムナジウムはギリキとかラテンとか云ふ古典に餘りに拘泥して居りますから、もう少し近代的の學校があつてもよからう。即ちギリキを廢し古語としてはラテン語のみをやらせる、其の代りに英語とか佛蘭西語とかの現代語學を一つ加へてやつたら宜からうとの趣旨から「レアル、ギムナジウム」と云ふ學校が出来た。所が又ラテンなどはやらせぬでも宜い、寧ろ現代の語學を二ヶ國やらせて、さうして科學並に數學を多くやらせた方が宜からうと云ふ所から、修業年限六年のレアルシューレーと云ふものが出来た。而し六年の修業年限では大學や専門學校に接續が出来ないから、之に三年のオートヴァー、レアルシューレーと云ふものを付けて、ギムナジウムと同じ年限にしたのであります。斯くして獨逸には三種の中等學校がある。(1)ギムナジウム(2)レアルギムナジウム(3)レアルシューレー、オーヴァー、レアルシューレー而して是等の學校には何れもフオー、シューレー、豫備校と云ふものが付いて居る。豫備校が三年、本校が第一期が六年、第二期が三年合せて九年、要するに兒童就學の始より十二年掛つて大學若くは高等専門學校に行く譯である。以上三種の中等學校は多少づゝ趣きが變つて居るが、然し何れも大學に關係あり、中流以上の子弟が修學し得る教育機關である。(聯邦中にはミッテル、シューレーなるものを設けて居る所もある、之はレアル、シューレーよりは尙ほ實際的で外國語の如きは英佛の内の一國に留めて置く)獨逸の國民教育機關としては「フォルク、シューレー」或「ゲマインント、シューレー」と呼ばれる、八年制度の國民小學が普設せられてある。形式内容共に整理して居る。義務教育であるから就學歩合もよし、修業年限が長いと云ふことの外、形式上我國の小學校と一見異なる所がない。然しながら國民教育の精神に於て大なる相違があ

る。我國の小學校は中等學校に接續して居る學校である。基礎教育の學校として、各階級を通じて學ばねばならぬ學校である。然るに獨逸の今までの小學校は中等學校に何等關係のない孤立的の學校である。無産階級の子弟にのみ課せられたる義務教育の場所である。前に述べた通り有産階級のものには彼等の子弟を小學校には送らない、それは中等學校の豫備校に送るからである、一度小學校の門に入れば中等學校にも大學にも行くことの出来ない制度であつた。之は男子に對してのみでなく女子に對しても其通りであつた。有産階級の女子に對する學校としてはリチュームと云ふものがある、丁度男子のギムナジウムに對する學校のやうなものである。それからヘアラー、メートヘン、シューレーと云ふものがある、之が丁度男子のレアルギムナジウムに當るものである。それからビュルガー、メートヘン、シューレー或はミッテルシューレーと云ふものがある、是は男子のレアルシューレーに對する學校である。女子の方にも此三種の中等學校を設けて、是にも矢張りフオーシューレーと云ふものが付いて居る。斯う云ふ譯でありますから金持上流社會或は中流社會以上の者は、自分等の子弟を男女に拘らずフォルクシューレーに入れない。フォルクシューレーに入流する者は多數國民の所謂中流以下の子女である。之れでは教育上の階級制度が餘りに劃然として居り過る、帝制時代の國民統御政策からはよかつたかも知れぬが、今日の時代思潮には反して居るので、此度の革命政府は、基礎教育と云ふものは、國民平等にしなければならぬと云ふ精神で、如何なる階級の子女を問はず、悉くフォルク、シューレーに於て最初の四年間の基礎教育を受けなければならぬと云ふ法律を發布した。さうして中等學校に付いて居る豫備校を悉く廢棄するの法令も出たのであります。所が中等學校の規則を改正すると云ふことは差當り困難であるから、現在の狀態は中等學校の規則を改正せずに、只フオー、シュー

レ一だけを廢して、小學三年修了の優秀生を中等學校の第一年に收容することになった。之れが私が本年二月伯林に行つて參觀した時の状態でありました。私が參觀した一二の小學校では中等學校豫備級が出来て居りました、即ち小學第三年生にして中等學校入學志願者を別組として授業して居るのであります。之れでは無論基礎教育統一「アインハイト」の精神に反して居る譯である、只中等學校の豫備校を廢して小學校に豫備校を置いたと云ふに過ぎないと私は感じました。

以上述べた丈では獨逸の教育制度には何にも感心する所はない、無産階級と資産階級に對する二様の教育は寧ろ時代錯誤の感がある、獨逸教育の長所は二様と云ふ點でなく、二様の教育共に徹底的であつたと云ふ點にあると思はれる。即ち中等學校に學んだものは大學教育を受けて能力相當の職業に就くし、小學教育を完成したものは義務補習教育令に由りて各自が志す職業に就て理解ある教育を受け、尙ほ進んでは自家の職業の専門學校に入る迄の機會が與へられて居ると云ふ點にあると思はれる。何れの國でも多數國民は小學教育で終るものと見ねばならぬ、其多數國民を職業別に、徹底的に教育せんと努力したる獨逸教育家は崇敬に値する。我々の最も敬意を表すべきは獨逸の義務補習教育制度であると私は信じます。歐米先進國は何れも國民教育の競走をして居りましたが、其競走は優秀頭腦の展覧と云ふことに留まつて居つたやうでしたが、獨逸獨り國民全體の究極教育に留意して居つた様に思はれます。獨逸二十六聯邦の中で或る聯邦の如きは、既に三十年前から國民の義務補習教育を實施して居つたのであります。茲に獨逸國の教育の眞の味ひがあります。國民の内には學者もあり實際家もある、頭腦の人もあれば手腕の人もある。學者の理論は職工に由りて適切に能く應用せらるゝと云ふ所で國運が隆盛になる譯であるから、大學教育が進んだからと云つて満足

して居る譯には行かぬ、手足となつて働く多數國民の徹底的教育が最も大切であるので、私は獨逸の教育の眞の味ひは、多數國民が滿十四歳で小學教育を終つて、各自志す所の職業に従事する、それ等の者を一週一回若くは二回義務的に補習學校に收容して、職業を中心として、國民的教育を授け、各自の職業に、理解と趣味とある國民たらしむると云ふ點にあると思ふ。之れが獨逸の國運を、過去に吾々が見た如くに隆盛ならしめた所以であると私は深く信じて居るのであります。そこで獨逸では補習教育は教育の傍系に屬するものでなく、國家教育の正系統の中に這入つて居る最も重要な教育である。斯くして一面に於ては大學出の智識階級が學問的發明をなす、一面に於ては之れを應用する上に手足となつて働くべき階級の者が適切なる教育を受けて居るから所謂理論と實際とが始終適中併行して行くと云ふが獨逸の現状であります。

獨逸の補習教育は、十六世紀に於て、日曜學校開設に起源して居ます。千八百〇三年に「パイヴアリア」王國に於て、滿十六歳以下の者は、男女兩性共に日曜學校に出席するの義務あることを、法律を以て規定しました。然し乍ら此當時の日曜學校の目的は、道徳及宗教教育に在りました。現在では此目的は陰に隠れたけれども、全然失はれたとは申しにくい。聯邦の内には、宗教家をして課外に宗教々育を爲すことを獎勵して居る所もある。

十九世紀の前半に歐洲に於ける商工業の制度に於て、一大變化を來しました。從來家庭的な小工業の時代には、師匠徒弟の制度が廣く行はれ、商業に至る迄も徒弟見習、手代番頭と仕上げて、遂に一本立になるの制度は、我邦従前の商店の組織と少しも變りはなかつた。此時代の徒弟の訓練は相當行届き、一定の年季奉公をすれば高なり工なり一人前の人間になり得た譯であつたが、個人工業が會社工業となり、器械の應用に由

りて手工業の性質が變つたり、商店の經營方法が變化する様になつて來るに従うて、徒弟の使用法がだんだん器械的になり、教授上の價值を減じ訓練も行届かなくなつて來たので、先づ南獨逸に於て日曜學校や夜學校を徒弟の實業教育に轉用するの傾向が顯はれた。素より文化的教育を無用視する譯ではないが、兎に角實業教育に重きを置いて然るべしとの輿論となり、補習教育に新なる意義が加はつた。此意義が加はると共に補習教育の必要が益認められ、千八百六十九年に北獨逸聯邦では、職業法令の中に實業補習學校存在地に在る滿十八歳以下の勞働者は悉く就學の義務あることを規定した。獨逸二十六聯邦の内此規定を發布したは十二聯邦であり、其他の聯邦でも地方官憲に土地の狀況や輿論を參酌し、義務補習學校を設立するの權限を附與した。其結果獨逸聯邦重要なる都市にはぞくぞく補習學校が設立せられた。

獨逸帝國の建設を見るに及んで、補習教育に第三義が加はつた。それは國民權行使に關する教育である。帝國的問題に關しては、國民の普通投票に關ふ事になつて見ると、此國民權を行使すると云ふことは中々重大なことである。小學時代は年齢弱少であるから、斯の教育には不適當であるから是非共補習教育に待たねばならぬ。斯くして補習教育に第三義が加はつた。

斯くして獨逸の補習教育は、宗教的意義に始まり、次で經濟的意義が加はり、最終に國家的意義が加はつた譯である。

獨逸現在の補習教育上、最も大なる貢獻を爲したは、ミュンヘン市の「ケルシエンシュタイナー」博士である。千九百〇二年に「エルフルト」(Erfurt)の帝室學藝院で「十四歳より二十歳に至る青年の公民的訓育」てふ題で懸賞論文を募集した。要は小學卒業より兵役従事の時に至る迄の間、國家的見地から青年を如何に

訓育すべきかの問題である、此懸賞論文に當選したはケルシエンシュタイナーの論文で、それが補習教育に及ぼした影響は、全獨逸は勿論の事、歐洲各國、今日では北米合衆國にまで及んで居る。

「ケルシエンシュタイナー」の論據はこうである。小學教育は、有效なる國民的訓育を與ふるには不完全である。小學兒童の社會的經驗は、餘りに狭少であり、精神的には餘りに幼稚であるから、速も期待せられた丈の効果を及ぼすことは出来ない。滿十四歳で小學課程を了り社會に出で、衣食の爲に働く兒童は、最早正式教育から全く絶縁する譯である。然もそれは人生の最も危険期で、監督が薄らげばそれ丈、品性に悪影響を及ぼす時期である。以上の理由に由り、國家は滿十四歳より滿十八歳迄の青年の爲に補習教育を設け、義務教育を施行すべしとが「ケルシエンシュタイナー」の意見である。此意見は獨逸一流教育家の賛同する所となつた。國家が小學教育を義務教育となしながら品性陶冶上最も大切なる時期に於て、之を放任して顧みざるが如きは不合理も甚しきものである。智識階級とか上流階級と呼べる、社會少數の天恵ある家庭に生れ、紳士の職業に従事せんと志すもの、爲には、普く中等學校や高等學校を設けて充分なる教育を施しながら、資産の上からも頭腦の上からも、憐むべき地位にある社會大多數の青年を危険なる社會の運命に曝露して知らざる振りを装ふは當代の奇現象である。然も是等多數の青年は近き他日の公民として、國家的に社會的に大なる活動をなすべきものにあらざるか。是れ義務補習教育が國家の教育機關として必要なる所以であると「ケルシエンシュタイナー」は説破した。

現今獨逸の教育者の中に、補習教育の主なる目的に就て二様の見解がある。即ち公民的訓練を目的の主體とするものと、職業的熟練と能率増進を目的の主體とするものとである。「ケルシエンシュタイナー」は補習

教育の主たる目的は公民的訓練である、職業的熟練や能率増進は之れが方便に過ぎないと主張して居る。然しながら公民的訓練の最もよき方法は、各自が従事する職業に就て、完全圓滿なる教育を受けると云ふことにある。職業的訓練に伴ふて公民生活に必要な諸徳が發達する。公共心、忍耐、自制力、奮闘的生活の愛好等は公民生活に必要な諸徳では秩序ある正式の職業的訓練によりてのみ得られるものである。是等諸徳が元となり個人相互の關係、個人と國家との關係も理解せられ、智識の尊ぶとむべきこと、衛生の重んずべきこと、規律ある生活に親しむべきことが知らず識らずの間に會得せらるゝに至る。こゝで補習教育の目的が達せられる譯である。道徳は實際生活を離れて授けられるものではない。各自が日々従事する職業其ものの遂行如何に由りて徳者も生れ不徳者も生れる譯である。職業其ものを衣食の方便と心得るは社會的に危険である、それ故に職業教育も器械的熟練を専らとし、經濟戰爭に勝利者たらんが爲に熟練職工たらしめんことのみ心掛けて教育するは、補習教育の目的に叶はぬ次第である。「ケルシエンシタイナー」の主張は無論ミュンヘン市に先づ實施されたが、今日では全獨逸に擴がつて居ると云ふて差支ない。然し二十六聯邦（アルプス・ローレンを失ふた）もあることであるから各邦でも多少趣きを異にして居るが、一貫して居る骨子は「ケルシエンシタイナー」の主張である。

教育の眞の目的は品性の陶冶であるが、言語や歴史や宗教を授けたとて此目的を達せられるものでない。實行の伴はざる教へは何等意味のないものである。斯くの見地からケルシエンシタイナーはミュンヘン市の學校に實驗室、栽培場、臺所、工場等設け、之れ等を諸學科の中心として授業すべきことを主張した。兒童の學校生活は彼等が學校や家庭や往來に於て觀察したる事項を基礎として、言語も圖畫も算術も歴史も地理も授くべきものである。勿論書物も讀ませるが、それは實際生活に關係ありて充分に興味あるものでなければならぬ。兒童は能動的に開發せられねばならぬ。受動的に徒らに記憶せしめんとするが如きは無意味であるのみならず却て有害である。

如上の見地から「ケルシエンシタイナー」は工場作業を補習教育の中心とした。ミュンヘン市の各學校に各種の代表的職業の工場を設け、堪能なる職工を指導者として各職業を秩序的に授けしめた。圖畫も算術も國民科も工場作業を中心として授けて始めて生徒の興味を惹起し充分なる効果を擧げることが出来る。普通所謂公民科として知らるゝ學科を講演したり暗誦せしめたりした所で、それで良公民が出来る譯のものでない。又器械的にいくら作業をせしめた所で良職工が出来る譯のものでない。己れの職業の科學的、美術的、社會的關係を充分に理解して始めて良工となり、良工となりて始めて其職を樂しみ、其職を樂しみて始めて良民となることが出来る。故に先づ第一に作業上の理解と熟練、之に伴ふ樂み。第二に其作業上の熟練と樂みとを以て社會に奉仕すること。第三に社會並に國家の目的を充分に理解せしむること。之等が「ケルシエンシタイナー」の意見では補習學校で授くべき要項である。

千九百年に於て「ケルシエンシタイナー」の意見がミュンヘン市に於て初めて實施さるゝことになつたので、彼は第一には職業教育を補習教育の中心とすること。第二には傭主や諸會社から賛同を得ること。第三には日曜及夜學校は、年長者にして任意教育を希望するものに止め、滿十八歳以下の義務就學者には晝間に授業すること等の改良を加へた。又學科課程に關しては各種實業學校教員及各種實業關係者を網羅せる四十六回の會議に因りて決せられ、又更に四十六回の會議に因りて修正補足せられた。

斯くして十ヶ年を経過したる千九百十年にはミュンヘン市（當時人口五十八萬）で義務補習教育を受くるもの男生九千人、女生七千五百人、任意補習教育を受くる女子三千六百人、通計約二萬人となり、學校の數は男子徒弟の爲に設けられたるもの五十二校にして職業別にすれば四十六種、徒弟にあらざるもの爲に設けられたるもの十二校、又女子義務補習の爲に設けられたるもの四十校、任意補習を受くる三千六百人の女子は二十一校に分配せられ、外にマスターやジャーネーマンにして任意補習教育を受くるもの二千五百人ありて一百三十學級に分たるに至つた。二十人の徒弟ある職業には必ず其職業の學級を置く。授業は日曜以外の週日に、一週一回全日又は二回半日とし、教員總數は其當時專任一百十人、兼任（他に職業あるもの）約三百人であつた。

補習學校の授業の中心は無論工場、實驗室、厨房、栽培場等である。圖畫や數學は勿論出来る丈實際問題に連結して授業せらる。工場にて作業せない圖畫なく、圖畫せない作業はない。又所有する作業は原價より最終の仕上に至る迄綿密なる數學的計算を伴ひ、原料、器具、機械等一々實際使用するに従うて之を學ぶ。作業の性質が科學的説明を要する場合には、實驗室に於て實驗に由りて會得せしむ。公民科の授業としては其職業の歴史的發達、社會的位置及關係、職業に對する自尊及協力等を機會ある毎に實際に就て理解せしめんことを努めた。

商業補習學校は(1)食料品商(2)銀行、保險、書籍業等(3)織物、裝飾品等(4)陶器、金物類等の四部分に分つ。簿記や商品學を授くるに便せんが爲である。教育はつとめて實際に經驗あるものを用ひ、學科は算術、商業文、簿記、商品學、地理、公民科等何れも其商賣に關係を持たせて授業しました。之れが「ケルシエンシタイナ

ト」氏がミュンヘン市で實施した補習教育の概要であります。今回の出張にミュンヘン市に行くことの出来なかつたのは甚だ残念に存じます。

扨て私が此度實際に見て來た補習學校は、伯林市のそれでありませう。御承知の如く今日でも伯林市は獨逸聯邦の首都になつて居ります。元はプロイセン王國の首都であり且は聯邦帝國の首府でありましたが、今日でも矢張り聯邦共和政府の首都となつて居る。大統領始め各種政治機關は伯林に在る譯であります。伯林市に於ての教育上の狀況を御話すると、私が十年前居つた當時と少しも變つて居らない。下、小學校より上、大學に至る迄、外形上も内容上も何等變つた點を認めませんでした。革命政府になつて教育上どんな變化があつたか……別段變つたことはないが、國民基礎教育の統一と云ふことが重なる變化である。先刻話したやうに、獨逸は是迄二種教育制度を因襲し來つたが、革命政府は、國民の子弟子女擧つて四ヶ年間は國民小學に就學せねばならぬことを發令した。又革命政府の普國文部大臣は、學校に於て宗教を施してはならぬと云ふ命令を出した。併しながらそれは行はれて居らぬ。學校に行つて見ると矢張宗教を施して居る。昔の通りに新教の兒童には新教の宣教師が來てやる、舊教の兒童には舊教の宣教師が來てやる、新教にも舊教にも屬しない猶太教の兒童は其時には遊びに出る。こんな譯で學校に於て宗教を施してはならぬと云ふ大臣の命令は少しも行はれては居らぬ。一體獨逸に於て現在の政府が最も手古摺つて居るのは教育者らしい。教育者は實に頑固で言ふ事を肯かぬらしい。革命政府の今の文部大臣は、學校に於ける自治と云ふことに就て訓令を發した。それは校長や教師の專制教育を避けしむる爲で、生徒の中から代議員を選出せしめ、學校も或る程度迄自治體たらしめんと趣旨らしいが、それは全然行はれて居らぬ。革命政府が出した命令

の中で斯う云ふ事が一つ行はれて居る。地理と歴史の授業に教科書を使用せぬこと……是は必要上から起つたのであります。従來の教科書はホーヘンツォルン家の功績を稱へて革命政府に不利であるからです。今回の戦争が始まつて二年後に於て、其時の文部大臣は、歴史上に於ては古代史の方は略して近世史、而もホーヘンツォルン家のカイザーの皇室系の歴史を詳細に授けよと云ふ命令を發して居る。それは國民の忠誠を煽らんが爲であつた。然るに今度はそれと反對に、古代史は授けて宜いけれどもホーヘンツォルン家の歴史は授けてはならぬと云ふ命令が出て居る。此命令は遵奉されて居ります。其他革命政府の新文部大臣は幾多の訓令を出したけれども殆んど實施されて居らぬと見えて、十年前に私が見た時とチツトモ變つて居らない。只非常に變つたと思はれることは、十年前は今の中等學校の中で最も勢力のある學校はギムナジウムであつた。それは希臘語、羅典語の古語を教へる學校である。その最も勢力のあつたギムナジウムが今は人氣を失つて來た。「ギムナジウム」よりも聊か實際的の「レアル、ギムナジウム」それよりも一層實際的な「レアル、シューレー」と云ふ具合に、十年前の人氣とは全くあべこべになつた。大體としては人氣は實際的教育の方面に向つて來た。それであるから彼地では實業教育の方は今は萬歳である。伯林市の補習教育の狀態は如何と云ふに……之も十年前と餘り變つて居らぬ。茲にプロイセン、メタートに於て現在實施されて居る所の職業補習學校の組織及び教案に關する規定、並に伯林市補習教育の現行規定があります。之を諸君に御話しやうと思つて參りましたが詳細に説明する時間がありませんから今日は大體の要點を御話し、後で何等かの方法で是等の規定が諸君の手に入るやうに致しましょう。

普國職業補習學校の規定には、先づ第一に學校の職分は十四歳より十八歳迄の青年を有爲な國民に教育す

るの助けと爲すにありと規定して居る。學校の編成は三つの方法で編成しなければならぬ。第一は生徒の數に由り、第二は其職業別に由り、第三は能力に従つて編成せねばならぬ。一學級の生徒の數は原則として三十名よりは多からず二十名よりは少なからず、若し其數四十名を超ゆる場合には分割せねばならぬ。進級の上中下の三學級を有する學校が基本形式である。小學教育の不足して居る生徒の爲には豫備級を設けよ。小なる學校で若し二學級しか出来ない場合には、下級だけを分離して上中級を合併せよ。若し全生徒を一學級に編成せなければならぬ場合には、分割教授を避けて教材を三部に分ち、三年毎に教材全部が交る々々繰り返さるゝやうにする。上級中級合併の場合には二部の教材を同様に繰り返すのである。大なる學校では必ず職業別に依つた職業學級を作らねばならぬ。同が年級及び同一職業の生徒が多數にして、多くの學級を作らねばならぬ場合には、第一に教授時間を異にした學級に編成するがよい。生徒を分割する際には生徒の才能の相違を斟酌せよ。同一職業の生徒數が進級の學級を作るに足らざる時は、それを類似せる職業に屬するものと聯關せしめて職業團の進級の學校を作れ。例へば似寄つた職業の者を合せて進級の學級を作るのである。職業團の生徒數が尙ほ進級の學級を作るに足らざる時は混成的職業學級を作るのである。それから生徒が上級で、授業を受けた方が効果あると認められた場合には、何時でも進級せしめるのである。一ヶ年の教授時間原則として最少二百四十時間（是は聯邦に依つて違つて居りますが大體は二百四十時間よりは少なからず、三百二十時間よりは多からずである）で之が一般に四十週間に分たれ、一週の教授時數は六時間となる。（六時間の授業を一日に受けしむる所もあり二日に受けしむる所もある）職業教育に範圍の最も廣き圖畫、並に専門教授を要する職業に對して、時間數を多からしめる事は甚だ望ましい事であるから可成多くするがよ

い。時間制は一週六時間の場合には斯く配當するがよい。豫備級では、二時間が獨逸語、二時間が計算、二時間が圖業、或は三時間乃至四時間獨逸語、三時間乃至二時間計算、下級中級上級では二時間が職業學科及び公民學科、二時間が計算及簿記、二時間が圖畫(圖畫の必要な職業即ちパン焼、屠殺業者の如きには其職業學科)或は三時間業務學科、公民學科及簿記、三時間圖畫及び専門の授業、時間數が六時間以上に其場合は殘餘の時間は圖畫、専門科或は工作授業に充てよ。授業時數が六時間を超過する場合には、體操及遊戯を課してもよい。又労働者の學級の如き圖畫及専門科の授業を要せざるものにも亦然りである。以上は一般規定の概要である。次で學科に就て教材の選擇から教授法又各種學科に就て詳細の規定があるが今は時間がないから略します。

普國各都市では又それぞれ施行細則やうの補習學校規定を發布して居ります。今此に柏林市の規定がありますが、詳しく御紹介する暇がありませんから大要に留めて置きます。

柏林市に於ける現行補習教育規定は一千九百十三年一月十三日ベルリン市長「ヴェルムート」に由りて認可申請、同年同月三十一日州知事の認可を経て公布せられたるものである。

該規定は男子部女子部に分たれ、其要點は

一 就學の義務

滿十七歳に達せる其時の半學期の終り迄、其時迄に課程未修了の場合には滿十八歳迄

二 義務の免除

- (1) 特殊職業に従事するもの

- (2) 相當と認められたる學校に在るもの
- (3) 一年志願の資格證明書を有するもの
- (4) 身體上又は精神上の缺陷者
- (5) 國籍なきもの

三 授業

出來得る限り職業教育に従事し職業的智識、社會教育、計算圖畫を授くべし

授業時數 毎週平均六時間

授業時刻 午前七時より午後七時迄の時間内に於て行ひ、例外として午後八時迄延長することを

得

日曜日は授業せず

四 傭主の義務

就學督勵、登校監督、缺席の場合の届出其他

五 刑罰

補習教育規定に違反するものに関する刑罰は二十馬克以内の罰金、納付無能力者の場合には三日以内の拘留

以上

概して云は、柏林の補習教育は能く行き渡つて居る。大「ベルリン」は幾多の市に依りて成つて居るが、

其内のベルリン本市だけに就て云ふと、補習教育區劃を男女共に各十區に分ち、男生に對しては一百十七の職業學級を編成し、女子に對しても亦十區數十種の職業別の學級を編成して居る。

ベルリン舊市に於て千九百二十年に於て義務補習教育を受けつゝある男子の數は大要左の如くであつた。

勞働學校	アルバイトシューレー	六千
金屬工業	メタル、グザアルバー	四千
建築工業	バウグザアルバー	二千二百人
商業	カウフ、ロイテ	四千
美術工業	クンスト、グザアルバー	二千
仕立業	ベクライドウング	六百
パン焼業	コーヘ、ペーカライ	六百五十五人
理髮業	バルビーア	三百

以上は總括的職業を擧げて概略的統計を示したに過ぎない

小學教育を滿十四歳で終り、各種の職業に従事する徒弟等は更に三ヶ年間實業義務補習教育を受ける。而して義務補習を完了したるもの、爲には更に高等の補習教育を受け得るやうに、任意補習學校を設けてある。又各種専門學校は義務補習教育完了者を主として入學せしむるやうの制度であるから、如何なる職業に従事するも其職業に就ては最善の教育を受け得るやうに出來て居る所に獨逸教育制度の特色があると思はれる。八年の小學教育、三年の義務補習教育、任意高等補習教育、職業専門學校と云ふ順序で、何人でも自家の職

業に就ては専門的智識が充分に獲得せらるゝ譯である。

ベルリン本市では男子補習學校區劃を十管區に分けて居ると申しましたが現在實施の職業別配置は左の通りである。

- (1) 勞働者、未教育者（給仕、小使、年少勞働者、家僕、陪乘者、配達人等）總ての管區に入學せしむ。
- (2) エツチング職工……………第三學區
- (3) 麵飽焼師……………第九學區
- (4) 繻帶師……………第九學區
- (5) 理髮師、鬘師……………第九學區
- (6) 建築工者（左官、大工、屋根匠）……………第十學區
- (7) 彫刻師……………第五學區
- (8) 花飾師……………第六女學校區
- (9) ポンボン菓子製造人……………第九學區
- (10) 製本師、鍍金業者……………第三學區
- (11) 印刷匠、活字鑄造者、植字工……………第三學區
- (12) 銃工……………機械職工と同様
- (13) 桶職工……………第五學區

(63)	石版工	第三學區
(62)	劃線工	第三學區
(61)	寫真版工	第三學區
(60)	塗物師	第十學區
(59)	皮革職工	第六學區
(58)	銅版彫刻工	第三學區
(57)	銅細工工	第五學區
(56)	銅版印刷工	第三學區
(55)	美術意匠師	第十學區
(54)	美術鍛冶工	第六學區
(53)	組合錠前工	第六學區
(52)	筐篋製冶工	第五學區
(51)	菓子業者	第九學區
(50)	料理人	第九學區
(49)	葉鐵職工	第五學區
(48)	給仕人	第九學區
	鐵製品販賣業者は總て	第九學區

(64)	繪師	組合長	第五學區
	其の他の者		第十學區
(65)	機械製造業者	第二、第六及第八學區	
(66)	左官		第十學區
(67)	機械職工		第二學區
(68)	及物工	錠前工に準ず	
(69)	金屬型鑄工	飾帶業に準ず	
(70)	家具磨工		第五學區
(71)	雛形製作工		第五學區
(72)	模型指物工		第八學區
(73)	樂師		第十學區
(74)	樂器製造工	(ピアノ工を除く)	第十學區
(75)	意匠業者		第十學區
(76)	針工		第三學區
(77)	眼鏡工	機械職工に準ず	
(78)	給仕		第九學區
(79)	寫真師		第九學區

(96)	石版印刷及美術印刷工	第三學區
(95)	靴製造工	第九學區
(94)	植字工	第三學區
(93)	活字鑄造工	第三學區
(92)	廣告畫工	第十學區
(91)	烟突掃除人	第十學區
(90)	切型及打出し職工	第二學區
(89)	裁縫師	第六學區
(88)	鍛冶工（車鍛冶）	第五學區
(87)	錠前工 機械製造人に準ず	
(86)	編綴工	第五學區
(85)	飾窓裝飾者	第九學區
(84)	馬具工	第九學區
(83)	印刷鍍金工	第三學區
(82)	組紐製造人	第九學區
(81)	ピアノ製造工	第五學區
(80)	鑿師（希望によりては婦人鑿師も亦）	第九學區

(97)	石切工	第十學區
(93)	鋪石工	第十學區
(99)	車匠	第九學區
(100)	印刻師	第三學區
(101)	道路掃除人	第九學區
(102)	ステロ版製造工	第三學區
(103)	漆灰工	第五學區
(104)	室内裝飾師（組紐製造工、軍什品製造工）	第九學區
(105)	袋物師	第九學區
(106)	指物師	第五學區
(107)	陶工	第十學區
(108)	時計製造人	第二學區
(109)	鍍金工	第五學區
(110)	測量技術家	第十學區
(111)	工具製造人 機械製造人に準ず	

(112)	木版工	第三學區
(113)	義齒製造工	第六學區
(114)	器具鍛冶工	第八學區
(115)	大工	
(116)	錫鑄造工	第八學區
(117)	彫鏤細工職工、金屬彫刻工	第三學區

未教育労働者及び無職業者は、其の住宅所在地の各指定管區に於て就學し、前條に掲記せられざる職業に従事せる者にありては、其の雇主の營業所在地に規定せられたる管區に於て就學せしむ。
女子補習學校も亦十管區に分ち、現行實施の職業別配置は、左の通りである。

- 第一、婦人労働者、未教育者（使送婦、配達婦、労働婦等）は各區に於ける、住所に應じて入學せしめらる。
- 第二、ペン製造女工、造花女工……………第三學區
- 第三、花束、花環女工……………第六學區
- 第四、金錢出納係、倉庫番人、派遣店員……………第一、第四、第八學區
- 第五、裝飾女工……………第六學區
- 第六、裁縫女工……………第二、第七、第十學區

- 第七、女賣子……………デッスアー、ストラーセ、廿四番
- 第八、白布刺繡女工……………第五、第九學區

附 録

普國職業補習學校の組織並に教案に關する規定

A 一般規定

I 學校の職分

義務的職業補習學校の職分は十四歳より十八歳までの青年の職業的教練を促進し、且彼等を有爲なる國民並に人に教育するの助けとなすにあり。

II 學校の編制

1 一般原則

學校の編制は第一に生徒の數に、第二にその職業に、第三にその能力に従て之を定む。

2 一學級の生徒數

一學級の生徒數は原則としては三十名より多からず、又二十名より少からざるべし、一學級の數が常に四十名を超ゆる場合には分割するものとす。圖畫の學級及び單級學校は最高限度を三十名とす。

3 基本形式

進級的三學級（下級、中級、上級）を有する學校を以て基本形式とす。

學校教育の不足せる生徒には、その生徒數が相當多き場合には、豫備級を設く。その目的は、中級を除き生徒をして下級に入學する準備をなさしむるにあり。

4 小なる學校

若し二學級のみを構成し得る場合には下級（並に豫備級）を中級及び上級より分離するを可とす。若し全生徒を一學級にて教授せざるべからざる場合には、能ふ限り分割教授を避けて、教材を三部に分ち、三年毎に全部が交る交る繰返さるるやうに爲すを可とす。中級及び上級の合併せるものには、同様にして二部の教材を作る。

5 大なる學校

大なる學校に於ては、同一職業の生徒を合せて職業學級を作る。手工の生徒と工業の生徒とは、その教練關係が本質的に異なる場合には、能ふ限り之を分割す。

同一年級及び同一職業の生徒多數にして多くの學級を作り得る場合には、第一に教授時間の異なる學級に編制するを可とす。生徒分割の際には才能の相異を考慮することを得。

一職業の生徒數が進級的學級を作るに足らざる時はそれを類似せる職業に屬する者と聯合せしめて職業團（譯者註、職業團とは類似せる職業に屬する者の集合なり）の學級となす。一の職業團の生徒數が進級的學級を作るに充たざる時は、原則として混成的職業學級を作る。この混成的職業學級にありては、職業學科及び公民學科並に計算の教授は一週一時間だけ短縮することを得。その場合には、この時間を専門授業に向け、且原則として、圖畫教授と結合す、從て圖畫教授の編制が一般に専門教授の規準となる。併しそれには、一定の職業に屬する生徒數が相當に多きこと、及び特殊の専門教授に對し、等しく専門的に充分なる教練を積める教師を有すること必要なり。

一職業の三ヶ年の全過程につきて、一の集合學級を作ることとは、其の學級の指導に對し、教授の熟練並に

専門の知識に關し特に優秀なる教師を有する場合か、若くは他の理由、例へば作業時間が、特殊の教授を可とする場合には差支なし。

準備の不足せる生徒のために豫備級を編制す。特に劣等なる生徒は之を合して進級的補助學級となすことを得。

6 圖書教授の編制

圖書に於ける學級の編制に關しては千九百十七年一月二十八日の布令を適用す。

7 記號

學級の記號は職業を認知せしむるを要す。下級はU、中級はM、上級はO、豫備級はVにて表示す。同一年級の學級は1、2、3、に由て區別す。小學校よりの卒業が復活祭並に秋季に當るならば、半年の數に従つて表示するを便宜とす（IよりVIまで）。

8 進級

生徒が上學級にて授業を受けて效果ある場合には、常にかゝる生徒を進級せしむることを要す。

III 教授時間

一ヶ年の教授時間は原則として最少二百四十時間とし、之を一般に四十週に區分す。従て一週の教授時數は普通六時間とす。

範圍廣き圖書並に専門教授を要する職業に對して時間數を多からしむることは甚だ望まじきことなり。四時間以内（四時間を除く）の輕減は、國家の認むる組合の學校又は協會學校にて最小限二時間の専門科

目の補充教授を受けたる學級には差支なし。

季節職業（壁工、大工、畫工、塗色工等）に屬する者に對しては、主なる労働期の間、教授時間を輕減することを得、但しそれに應じて閑散期に時間を増加するものとす。併しそれには、全生徒に補充教授に出席する義務を負はする事、及びこの補充教授を施行する適當なる教師を有することを要す。

休暇は職業生活の必要並に地方一般の學校休暇を考慮して決定す。

IV 時間割

一週六時間を原則として下の如く割當つ、
豫備級にては、

二時間 獨逸語、 二時間 計算、 二時間 圖畫、

又は

三時間 (四時間) 獨逸語、 三時間 (二時間) 計算、

下級、中級、上級にては

二時間、職業學科及び公民學科、

二時間、計算及び簿記、

二時間、圖畫(又は、圖畫を必要とせざる麵麩焼、屠獸者等の如き職業には専門學科)、

又は

三時間、業務學科及び公民學科、計算及び簿記、

三時間、圖畫及び専門授業、

時間數六時間以上に上る場合には、殘餘の時間は専門圖畫、専門學科又は工作教授に割當つ、時間數が六時間を超過するか、圖畫及び専門教授なき學級にて四時間を超過する場合には、體操並に遊戲の教授も亦可なり。

從て圖畫並に専門の教授なき學級、特に學習なき勞働者の學級には、次の如き時間割となる。

職業學科及び公民學科	二時間	又は四時間	又は二時間
計算及び簿記	二時間	又は二時間	又は二時間
體操及び青年遊戲	二時間		

V 學用具

各生徒又はその備主は地方令に従つて、學校に採用せられし學用具の書及び圖畫—材料、雛形、筆記帖、讀本及び計算簿等—原則として自辨にて調へざるべからず。但し現在發行のものは能ふ限り低廉となれる事に注意すべし。

新なる學用具の採用は地方長官に報告するものとす。地方長官には一定の學用具の使用を禁ずる權能あり。讀本の採用は長官より特別認可を受くることを要す。

VI 教授に對する一般原則

1 教授及び教育

補習學校に於ける教授は十四歳より十八歳までの年齢の特質を考慮せざるべからず。高まれる名譽心、並

に獨立の要求は教育上善用すべきものなり。道德宗教的基礎の上に品性の修養を促進すること特に肝要なり。

2 材料選擇

教育の選擇は補習學校の目的に従つて、生徒の生活並に職業の興味を助け、且勞働の喜びを高むることを主眼とす。其れ故に青年の經驗せる範圍又はそれと密接に關係せる方面より材料を得ることに特に留意すべきものとす。特に職業的並に地方的關係より得たる具體的實例を選擇すべきなり。

材料の分量に關する妥當なる制限は最も重要なことなり。材料過多にして其れを満足に取扱ふに時間の不足を來す如きは避くべきものとす。實際にその目的を達し且其れを使用し盡し、練習し且反覆する時間を有するだけの材料を呈供すべし。

教材選擇の際には生徒の豫習、業務の特殊事情、補習學校教育に關する教師の熟達を考慮すべきものとす。

3 教授法

教授法は兒童期の爲に考量せられたるものとは重要な點に於て異り職業生活に入れる青年に適當せる如くに工夫すべきものとす。新材料を取扱ふ際、並に反覆の際に、全教授を通じて問答の形式を採るは不可なり。材料の特質に従つて、新事項の共同學習を目的とせる自由なる形式の談話、或は教師又は個々の生徒の關聯的小敍說の方法も亦適用せざるべからず。生徒の經驗を利用し且彼等の活潑なる共働を要求する問題を能ふ限り度々課すべし。取扱ひたる重要材料を生徒をして自由に反覆せしめ且應用せしむることは總ての年級に於て努むべきことなり。常に生徒を教師の指導より獨立せしめ、且彼等が學校を修了せし後にも獨力にて發展するやう彼等を獎勵することを目的とせざるべからず。

B 學科

I 職業並に公民學科

1 職分

職業並に公民學科の有する職分は、

- (a) 職業に對する生徒の理解を能ふ限り深め、彼等を思慮あり、義務を知れる労働者に教育すること(専門學科)、
- (b) 個人に最も必要なる、業務生活の知識を傳ふること(業務學科)、
- (c) 個人並にその職業労働と、家族、學校、工場、社會、國、帝國に於ける共同生活との關係を覺らしめ、公的生活の重要なる組織の發達及び本質を説明し、憲法及び法律制度に對する畏敬、郷黨、祖國及び君主に對する愛を涵養し、尙喜んで國家に於ける共働に従事するための標的を示すこと(公民學科)。

2 材料選擇

(a) 混成職業學級に對しては、總ての職業に對して等しく重要なる如き材料を選擇すべきものとす。其れ故に専門學科に就ては、最も重要なる粗材と勞作過程とを簡單に取扱ふを得るのみ、その他に於ては業務並に公民學科を教授の中心點となすべきなり。例へば、補習學校、教授及び労働の契約、労働指示、郵便及び鐵道、新聞との通信、購買並に債務關係、火災及び生命保險、會社及び組合、職業階級出の生徒及び徒弟に關する最も重要なる規則、尙、地方團體及びその組織(貯蓄、金庫、燈火消防等)、租稅、労働者保護、及び

労働者保險、職業並に官吏懲罰、最も主要なる官廳、國及び帝國の制度並に支配に關し、軍隊、艦隊及び殖民地に關する最も重要なる事項を取扱ふべきなり。

(d) 個々の一職業又は一の職業團を包括せる學級に對しては、その外、粗材の取扱ひ、道具、機械及勞作過程(専門學科)が、専門的教養を積める教師を有する限り、問題となる。此の場合に於ても業務並に公民學科の取扱に對して充分なる時間を用意すべきなり。

(c) 學習ある工業労働者の學級に於ては、業務學科は、永く獨立せざりし労働者に取りて重要なるだけ取扱ふのみとす。

(d) 學習なき労働者の學級に對して特に考慮すべきは、労働並に交通事情、衛生學(榮養、衣服、住居、攝生、労働及び恢復)、禮法、經濟的並に國民的教養なり。

3 教授法

(a) 一般原則

専門學科に於ける教授は、爲し得る限り、工場の過程より出發し、生徒に取りて必要なる事項を力説し、又能ふ限り簡單なる試み、試験、模形、略圖等を應用すべきなり。

業務學科に對しては、營業に關して屢々繰返さる、業務的事項にして能ふ限り、小なる業務過程と結合せるものを觀察の中心點となすべきなり。かくて、例へば、購入及び販賣、過失處罰及び處罰義務、交易の經濟的意義及びその危險、郵便及び鐵道による送達等を實例に依て展開す又手工場の教授契約、新聞の公告及び報導、貯金通帳及び保險契約も亦善き結合點となる。

同様に公民學科の教授を卑近なる事項、例へば、補習學校及び地方救病金庫の法令、納税證、地方團體の財政案及び之に類する事項と關聯して爲すべきなり。職業と社會生活との關係より生ずる義務及び權利、並に地方團體の組織は第一に取扱ふべきなり。そこにて得たる理解は國家組織の説明にも利用せらるべし。經濟並に法律の基礎概念の説明は反覆を要さざれど其の方面に於ける系統的敍説は補習學校の教授事項にあらず。併し乍ら個々の組織の歴史的發達と偉人の典型的事業とを指示するは可ならん。先づ第一に青年が將來公的事業に於て共働すべき使命を有し、又從てそれに對して共同責任を負へることを確信せしむべし。勿論黨派的政策を學校に取入れることは一切嚴禁すべきなり。

國民的教育に取りて先づ第一に體操及び青年遊戲は、若し其れが正當なる方法に於て勇氣、自己教養、自ら進んで服従することに導くならば甚だ重要なものたるを得べし。

(b) 文書作業

生徒が公民的及び業務的生活の間に起る最も重要な文書作業を獨力にて且重大なる過失をなすことなく遂行し、又彼等の經驗圈内の事物に關し明白的確に説述する事學ばしむべし。

文書作業は職業並に公民學科と最も密接なる關係を有す。從て第一に取扱ふべきは、普通の書簡文及び業務文、例へば郵便及び鐵道との交渉購買並に債務の關係、勞働並に保險の契約、新聞及び官廳との通信より起る如きものとす。

文書作業は職業並に公民學科に於て取扱はれし材料を練習に由て確實ならしむるを要する故に、それと關係なき特に立ち入りたる時間潰しの準備は避くべきなり。殊に業務通信に就ては、業務上の事件より記載の

前提及び目的、經濟的及び法律的结果が生ずるものなり。されば先づ事件を明瞭ならしむることが、思想を目的に適ふやうに組織し、且つ正しく言語に綴るために必要な條件なり。かくて書簡を與へられたる關係より能ふ限り獨立して展開せらるべきものなるべし。

的確に捉へし部分的問題に從つて、それを先づ第一に口語にて展べ、且それを能ふ限り、云ひ方の異なる形式にて再述するを可とす。

營業生活に於て最も普通に行はるゝ雛形を理解せしめ且充實せしむべし。特に、それが規則正しく反覆せらるゝ記載、契約等として如何にして業務の經營より生じたるか、又かゝるものとして理解するを要するかを指示すべきなり。計算書及び受取證の如き最も簡單なる種類の雛形は又それと獨立しても考案せしむべきものなり。

書簡、回章、業務廣告、計算書、受取證、交附證等の正當なる形式及び文體を練習せしむべし。時々缺點なき雛形を模範として紹介することは大に可なり。

業務文の外に年に四回より六回位、職業並に公民學科或は他の分科に於て取扱はれたる材料に關する記録を作製せしむべし、但しそれには能ふ限り單純にして且狭き範圍の材料を撰擇すべきなり。その他尙、教授の際に取扱ひたる材料より屢々簡單なる記録を作らしむることも亦可なり。

書取は豫備級及び下級のみにして可なり、但しそれは職業生活の中に屢々現はるゝ言語及び云ひ方について練習せしむるやうになすべし。

習字の特別教授は課する要なし、たゞ總て文書作業を綺麗に且規則正しく書き上ぐることに注意せしむべし。

し。

業務文、記録、草案（半ヶ年に十回より十五回を最小限度とす）を教師は注意して通讀し且原則として一週間後返付すべし。最も重大なる誤謬は類別して説明し、生徒は原則として改作をなすを要す。

(c) 語學及び正字學

總ての時間に於て、生徒が明瞭的確に思想を發表することを學ぶ事を主眼とすべきなり。口語の發表の完全を圖るために、能ふ限り關聯的說話を練習せしむべし。

語學及び正字學の組織的教授は豫備級のみを課することを得。それを繼續して應用し且練習することを眼目とすべし。言語の分解の如きは避くべきなり。教材は能ふ限り職業生活より採るべきなり。

その他時間の缺乏せる場合には、かゝる題目に就てはたゞ折々之れに觸れ得るのみ。殊に文書作業の説明の際に、特に屢々現はるゝ誤謬を練習に由て除く機會あり。その際には語法は能ふ限り斷念すべきものとす。職業生活に於て行はるゝ専門の云ひ方及び外來語はその意味及び書き方を説明すべし。善き獨逸語の存する限りは、之を正規に使用せざるべからず。

(d) 讀方

讀方は豫備級及び補助級に於てのみ特殊分科として行ふべし。職業並に公民學科に取りては讀方は教授の中心點とならず。要件は寧ろ材料を自由に口語にて取扱ふ事、及びそれに關係せる文書の練習なり。併し法令及び契約の如き、職業生活に於て行はるゝ難形及び文書に通ずることは必要なる補充となる。その際には言語の分解は之を避け、寧ろ生徒が競走してその主要内容を發見するやう彼等を獎勵すべきなり。教授を活

潑ならしめ且それを補充するために時々讀本に掲載せる如きものにして適當なる讀章を授くるも可なり。青年の眼に高貴なる典型を示す所の個々の關聯せる小敘述を折々講讀するは望まじき事なり。然し乍ら先づ第一に生徒が餘暇ある時に善き書籍（特に學生文庫よりの）を讀むやうに彼等を刺戟すべきなり。

IIa 計算

1 職分

計算教授は職業並に公民學科を裨益するものにして、そこに取扱はれたる材料が數的取扱に適する限り、それを尙進んで使用するものとす。公民並に職業生活に取りて必要なる問題を求めて之を解き、又職業的並に公民的生活の個々の組織を、選擇せる計算の實例に就きて一層よく理解することを生徒に學ばしむべし。形式に依ればこの教授は國民學校に於て得たる計算の熟達を維持し且向上せしむる職分を有す。

2 材料選擇

問題の選擇は、第一には、職業並に公民學科に於て取扱はれし範圍の事項を考慮して爲すべく、次に初めて計算困難の場合を選擇す。純遞次的計算は豫備級、補助級及び薄弱なる下級に於てのみ課す、されどそこにも問題を日常生活の方面より取るべきなり。

職業並に公民學科の教授の過程が許す限り、下級にては特に基礎計算四法及び分數の應用を、中級にては百分計算の應用を授くべし。上級にては價額計算（計算學）の原則を取扱ふべし。併しこれは既に下級及び中級にても豫め簡單なる原料及び勞銀の計算に由て準備すべきなり。

平面及び立體の計算は、屢々現はるゝ職業上の問題を確實に解き得るだけに、總ての年級に於て練習せし

むるものとす。

3 教授法

職業並に公民學科に對する聯絡は外面的に現はるゝのみなるべからず寧ろ生徒の經驗を絶えず使用し、一事項を種々の方面より計算的に取扱ふを要す。

暗算の爲には原則として各時間の始めに凡そ十分間練習せしむるを可とす。その際には一より一百までの數を絶えず使用し、且貨幣、尺度、及び重量に關する確實なる知識を得せしむべし。不定數の計算は計算の熟練に重大なる缺陷の生ずる場合にのみ應用せしむべし、分數其他の困難にして特殊なる問題は授くべからず。日常行はれざる計算の便益及び計算法は職業的補習學校に於ては一般に應用せられず。

日常筆算の助けにて解かるゝ不便なる數に關する問題は除外す。一層大なる計算に於ては、中間の結果を書き取らしむるを可とす。

筆算に對しても亦主眼とすべきは、手工者及び勞働者が一般に遭遇する如き單純なる問題を日常生活より探るにあり。その際に一時間の問題は、内容能ふ限り互に連絡を有して統一を形成するものたるべし。生徒は或る問題の結果を豫想する習慣を養ふべし。日常行はるゝ單純化すること及び省略することは適用して可なり。外部に數へ示すことは能ふ限り簡單的確になさしむべきなり。

日常逢着する如きものにて漸次に廣汎となる問題を生徒が自ら解くことを學ぶは望ましき事なり。この目的の爲には彼等を規則的に指導し、必要な豫審を自ら爲さしめ、又必要な數の方案を自ら作らしむべし。それ故に觀察に導き且學校と職業とを結合せしむる探究問題を規則正しく授くるを可とす。

價格計算は圖畫教授に於て作製せられたる比例略圖及び製圖に能ふ限り依頼すべきなり。先づ第一に其れは一簿記との關係に於て必要なだけ一正價の測定、一般的入費の確定及び配分に對する理解を促すべきなり。

地方團體及び國家の財政、租税、保險法制等よりの問題は先づ第一に嚴密なる事實的關係に於て、公的生活の是等の方面の理解に導くことを助くべきなり。困難なる利息計算等の熟練は補習學校にて取扱ふ事項にあらず。

平面並に立體の計算のためには、問題の作製に教室及び周圍にある對象、尙進んでは圖畫教授の模型、工場の對象物を使用するを可とす、又是等をば計算前に概算し且測量せしむべし。日常行はるゝ形式及び表の使用は熟練せしむべきなり。

教師は、總ての問題を特別の計算帖へ、清書としてにはあらざれど、綺麗に且規則正しく記載せしむることとに注意すべし。見本又は試験の作業ともなり得る所の二三の清書帖を作製せしむるは妨なし。

IIb 簿記

1 職分

簿記は規律的營業と收入を自身の必要並に家事に檢かに且適當に使用する事とに對し指導を與ふる職分を有す。

2 材料の配分

下級及び中級の計算教授に於て豫備として個人及び家族の費用を週、月及び年に依り地方的情況に従て計

算し、且貯蓄組織を明瞭ならしむべし。尙進んで中級に於て規則的家計簿記を調製せしめ、且その際に特に主要費用の豫算を練習せしむべし。

上級に於ては計算の時間を短縮して凡そ四十時間業務簿記に充つべし、地方的或は職業的事情に依りては簡單なる或は所謂米國式簿記を應用し得べし。學習なき労働者及學習ある工場労働者の學級には家計簿記を特に重んずべし、業務簿記を彼等に課するは可なれども、必要にはあらず單級の學級にては各半年に於て一週一時間を簿記に充つるを可とす。

3 教授法

規則的簿記の價值と利益とは特に之を力説し、且日常の實例に由りて實證すべきなり。業務簿記に對して原則の説明は、それが理解上絶対に必要な限りに於てのみ授くべきなり。選擇せる簿記の種類は單純にして解し易きものたるべし。異なる業務事項の記載及び決算の運算は或程度まで確實となるまで練習せしむべし。業務利得の算定及び正當なる租税申告書の編成に注意せしむべし。異なる職業の實際的事情、價額、業務上の習慣等は能ふ限り注意せしむべきものとす。

純然たる職業學級にては現實と密接に關係せる關聯的業務事項を記帳すべきなり。

III 圖畫

圖畫には千九百十七年一月二十八日の布告を適用す。

IV 工場教授

職業學課及び圖畫の補充として工場教授を課することを得。是は原則として關係せる職業方面にて同意す

る場合にのみ爲すべきなり。工場教授は常に専門家より授けられ、必修なる圖畫教授を補充し得るものにて例へば植字工、靴工、裁縫工及び室内裝飾工—又は全くその代りとしての、例へば給仕、菓子工、理髮工のためなり。

手工學校及び其の他の専門の學校にて工場を有し、且地方的關係が許容する場合には、その組織は補習學校の生徒にも利用せしむることを得。

補習學校の外に工場を有する組合又は協會の學校が存在する場合には教案の合同に務むべきなり。

その他機會なき場合には、補習學校は自ら工場教授の組織を設くる事を得、併し原則として費用を多く要する工場組織を作るべからず。

工場教授の採用、殊に手工學校及び其の他の専門の學校の使用は地方長官の認可を要す。

補習學校にて工場教授を授くる能はざる場合には、教練の過程に適合せる一定の考案に從て學校にて作製せられたる製圖を師匠の工場に送る如き方法により工場と學校との間の密接なる共働可能となる。

V 隨意的施設

1 宗教的指導

宗教的指導に關しては千八百九十七年三月二十六日の布告を適用す。

2 青年訓育の組織

青年訓育の組織に關しては千九百十一年一月十八日の宗教、教育大臣の布告を適用す。補習學校の職分はこの方面に於ける總ての努力を援助するにあり。

3 隨意的課程

年長者には圖畫、簿記、専門學科、業務並に公民學科、價額計算等を若し専門の學校及び主課程に由りてその缺點が補償せられざる場合には地方の情況に従て隨意課程に組織するを得。

c. 個々の學校に對する教案及び教授報告

I 教案

教案は此の規定を知れる新來の教師に其の職務を果すため、充分なる根據を與ふるやうに作製すべきものとす。それ故に此の規定の内容を反覆せずして、個々の學校に特有なる點を、特殊の地方的及び職業的事情の明示の下に、完全に然かも簡結にして撮要的なる形式に於て提示すべきなり。

個々の職業學級には必要なる限り、特殊の教案を作るべきものとす。

個々の教授部門に對する教材は三つの年級に従ひ大なる年分(四分の一年、三分の一年、月)に配分すべきものとす。

教案は地方長官の認可を要す。認可の申請には次の視點に依り學校の組織に關する撮要を附加すべきものとす。

- 1 學級及び職業に依れる學校の編制、
- 2 生徒の平均數及び個々の學級に於ける其の配分、
- 3 時間の配分及び教授時間、
- 4 示達せる學用具、

- 5 教師及び、補習學校に於ける教授に對する其の練達、

II 教授報告

職業並に公民學科、計算及び簿記の査定せられし材料に關し教授報告を作るべきものとす。

職業學科、公民學科、文書作業、計算及び簿記に對する材料を垂直的系列に配列し、個々の教授對象の內面的關聯が明瞭となるやうに並置するを可とす。取扱ひと關係せる實例は能ふ限り、個々に示すべきものとす。

職業補習學校に於ける圖畫教授施行に對する原則

職業補習學校に於ける圖畫教授は彼等の職業に圖畫を要する總ての生徒を參加せしむ。

圖畫教授は工作製圖を正解し、且出來得べくんばその職業の一般共通の作業に對する製圖を自ら作製する位置に生徒を導くべきものとす。圖畫教授は、寧ろ工業的(非裝飾的)なる職業には一年を平均して最少限度一週二時間、寧ろ技藝的(裝飾的)なる職業には、若し能ふならば、一週四時間又はそれ以上の教授時間を捧ぐべきものとす。

圖畫は専門學科として行ふべきものとす。未だ圓及び線に通せざる生徒のみ始めて製圖器械の使用の簡單なる豫習を授く。純理論的なる射影畫(點、線及び數學的立體の射影、數學的立體の交貫等の如き)は授くる必要なし。生徒の職業に於て現はるゝ記載的幾何學の應用は寧ろ實際的職業生活より取れる問題に就て練習せらる。

圖畫學級にては三十名以上の生徒を一緒に教授すべからず。

圖畫の問題を職業に適合し得しむるためには、生徒を能ふ限り早く専門學級に分つこと必要なり。併し此のことが可能なりや、又如何なる範圍に於て可能なるかは地方の情況に依るものなり。生徒數少き土地に於ては分割は外面的理由よりして已に除外せらるべし。生徒數多くして多くの學級に分割する見込ある場合に、如何なる視點に依り圖畫學級に於て生徒を配分するかは復た地方の情況に基きて決定せらる。或る地方に於て個々の職業的分技が行はるゝならば、學級編制の際にそれを考慮すべきなり。多數の職業が殆んど等しき勢力を有する場合には、能ふ限り二ツ或は三ツの學級のみを編制する際にも類似せる職業を合同せしむべきなり。事情が許すならば、一方にてはその職業に特に拘束畫（線及び圓にて爲す製圖）を要するものを合同し、他方には特に自在畫を要するものを合同すれば適當なる學級編制を得。拘束畫の學級には一般に總ての工業的職業（建築業的、機械工業的等）を、自在畫の學級には總ての裝飾的職業（裝飾畫工、漆喰工、石版工等）を指定す。衣裳業（裁縫工、靴工等）の生徒が少數にして特別の分科學級を作る能はざる場合には、是等は特に自在畫を修むる學級に配分す。

多數の生徒を有する地方に於ては學校の編制を個々の職業に一層內面的に適合せしむることを得べし。併し乍ら此の場合にも亦専門學級の區分には地方の情況が基準となる。個々の職業の生徒數が非常に多數にして、多くの學級を形成し得る場合には、學年課程を有する進級の學級を編制すべきなり。尙生徒數が個々の年級に於て並行學級の編制を許す場合には此等の並行學級を生徒の能力及び資性に從て階別することを得。非裝飾的職業の専門製圖は、存在せる模型に就きて比例略圖を作製することより始む。かくてその後には圓及線にて畫く測量せる對象を課すこの際に略圖は特に比例數を負へるものとして役立つ、併し目及び手

の練習の爲には、それを分明に描寫し且その關係に於て、測量せる對象に適應せしむることに注意すべきものとす。かゝる測量略圖の際には、それが正しき自在描寫の要求を充すことに重きを置かずして、對象を仕事に適ひしやうに再現することに必要なる比例を取りて之を描りことを主眼とすべきなり。比例略圖による課業は鉛筆或は墨にてなさしむ。總ての略圖につきて製圖を課することは必要ならず。課せられたる略圖の中に二三枚のみ墨にて引き、多くのものは鉛筆にて畫きたるまゝにて可なり總ての模型は摘要と必要なる概略を探りて課するものとす。

模型としては、行はるゝ限り、生徒の職業上の製品又はその個々の部分を使用すべきものなり。他の材料を模造せるもの又はその標準を變更せるものは能ふ限り避くべし。かゝる模型は各職業に關して多くは容易く調達せらる（壁工に就ては、煉瓦、型石、加工切石、家具等には側面の縁の截片、戸の隅。金屬工には鐵面の截片、金屬板、螺旋、小道具機械の一部。馬具工には革紐、金、革帶等）。

生徒が簡單なる個々部分の圖的描寫に通ずるだけに進歩せば、小尺度の前置物、又は教師の略圖によれる作業製圖を作製することも指導して可なり。

裝飾的職業（畫工、漆喰工、金工、飾り錠工、裝飾家具工、石版工等）の場合には、非裝飾的のものに於けるよりも遙かに高等なる程度に於て目及び手の充分なる練習を積ましむること肝要なり。それ故に専門製圖の外に美術的自在畫をも、その一般的形式に於て、對象物、自然の形、又は基本的なる技藝的前置物に就きて修めしむるを可とす。併し乍ら前置物につきての描寫は決して單なる模寫に陥るべからず。色彩應用の基本要素の習練は多くの職業に就きて缺くべからざるものなり。獨立の技藝設計は補習學校の要件にあらず。

多くの裝飾的職業、就中裝飾畫家には前置物の略圖によつて擴大すること竝にかゝる略圖を異れる目的に變更することに於ける相的の熟練を得ること肝要なり。裝飾畫家のかゝる練習は能ふ限り自然の大きと膠色とにて行はしむべし。漆喰工竝に職業上型を取ることの熟練を要する他の手工には、地方の事情が許す場合には製圖教授の外に型を取る教授を採用すべきなり。

總ての裝飾的職業には圖の製圖の多少の練習も亦望まし、これには生徒の個々の職業に従て教養中に多少の餘地を與ふことを得。

壁工、大工、金屬工作者、管控付工等の如き純工業的職業は裝飾製圖を要せず。併し事情が許すならば、才能ある生徒に、簡單なる對象物の自在なる眺望描寫を練習する機會を與ふことを得。

特に工業的なれども技藝業と接觸する職業（家具工、轆轤工、石切工、錠工等）は拘束畫を充分練習せる後に、裝飾的職業に倣つて裝飾的圖畫をも教授することを得。

一般に補充圖畫の効果は、一週二時間以上圖畫教授に充つる場合にのみ達せらるべし。

衣裝職業（裁縫工、靴工、革工）の専門製圖は同様に、個々部分の完了せる後に比例略圖又は職業上の産品（縁の部分、金、襟片、靴脚、裾型、帽子等）を採りて始む。尙進んでは工場にて使用せらるゝと全く同一の専門的製圖を習得せしむるものとす。

千九百十七年一月二十八日、ベルリンにて

商工大臣

千八百九十七年三月二十六日、ベルリンにて

職業的及び地方的補習學校の生徒をしてその宗教的教育の促進に與らしめたく希望は已に反覆説述せられ、又國會の討議に於ても言示せられたり。

補習學校の教案及び授業案の中に宗教教授を採擇することは不可能なるを以て、この希望を達する最良の法は、兩宗派の牧師が、出來得る場合には補習學校の場所にて且教授と聯關して行ふ所の指導並に教訓的講話に由て生徒の宗教的知識を深からしめ、且彼等の宗教心を喚起し、促進することに努むるにあり。

それ故に余等は足下に、願くは補習學校理事が牧師にその關係せる希望に對し教場を使用せしめ、尙その外牧師にして彼等の事業の遂行を各種の方法に於て可能ならしめ且容易ならしむるやう、該理事に勸告せんことを謹んで懇願す。

ダンチヒ、ヌリーエンヅエルデル・ボーゼン、ブロンベルヒ及ビオツベルンの王國地方長官への附言
勿論宗教的訓練は全然獨逸語にて行はざるべからず、之に對し關係僧正は特に注意を受け居れり。

宗教、教育、及び醫務大臣

農、官地及び山林大臣

商工大臣

王國全地方長官等宛

米國に於ける教育の現
狀と實業補習義務教育

米國に於ける教育の現状と實業補習義務教育

小樽高等商業學校
文學博士 渡邊 龍聖君講演

諸君は中島先生から大分肩の凝るやうな御話を聴かされたやうでありますから、私は暫くの間お茶請ヶ話を
をする積りであります。今日は亞米利加と英吉利の兩國の狀況を大要御話致したいと思ひますが、或は時間
がなくて亞米利加で終ることになるかも知れませぬ。亞米利加だけで終りましたら、英吉利は他日の機會
に譲ることに致します。

私は元、二十五年前、否二十六七年前に亞米利加に居つたのであります。さうして二十六七年振りて昨年
亞米利加へ渡つたのであります。其處で以前の亞米利加と昨今の亞米利加とを比較して見ますと、大分色々
の點に於て相違があります。此相違は諸君の御參考にならうと思ひますから、お茶請ヶ話として御話致しま
す。御話することは色々點にまたがつて居りますが、補習教育にも多少關係をもつて居ると思ひます。

第一に物質的文明の點であります。物質上の文明に就ては二十六七年前の亞米利加と今日の亞米利加とは
天地雲泥の差異がある。出發前や船中での私の考へでは、我日本國も既に一等國に數へられるやうになつた
し、所有る文明の器具機械も備つて居るから、彼の國と我國とは物質的文明上、左程相違もあるまいと思つ

て参りました、處が豫想外に進歩發達して居る。迪も及ばぬとても及ばぬ……。斯う言はなければならぬのであります。甚だ残念ながら、物質上の文明に就ては、まだまだ大分彼の國に譲らなければならぬ。又彼の國から學ばなければならぬと云ふことを感じたのであります。亞米利加から歐羅巴に渡つてみますと、流石に大戰で苦んで居つた有様がありありと見えました。亞米利加の物質上の文明に比べて見て、歐羅巴のそれは、今日では甚だ見劣りがするやうに感ぜられたのであります。さうして歸りには印度洋を廻つて來ました。が神戸に上つて見、東京へ來て銀座を横切つて見ると残念々々、如何にも貧弱の感が致しました。我國と米國とを比較して見ると云ふことは、我々の國民的プライドを傷ける苦痛であります。我々は物質上の文明に就ては一段の努力をしなければならぬ。如何にしたら物質上の文明に就て彼等に劣らぬやうにすることが出来るかと云ふことに就て私をしていたく感奮せしめたのであります。そうして是は先づ第一に實業補習教育の振興普及によらねばならぬと感じました。

第二には米國人の體格である。彼等の體格は二十五年前に比べると著しく良くなつて居る。二十五年前に、私が學生として参りました當時の彼等は、身體こそ大きけれ、相撲を取つても足が弱いか腕が弱いか全體としての發育は不充分のやうに認められましたが、今日の彼等の體格は著しく改善されて居る、其理由は後から申します。二十六七年前の亞米利加の婦人などは、齒の善い女といふものはめつたになかつた、所が今日では殆ど齒の悪い女を見たいと思つても見ることが出來ないと云ふやうに、齒並みが善くなつて居る。誰れも誰れも立派な齒をもつて居る。亞米利加の今日の齒醫者は齶齒の療治をすることよりも、寧ろ齒を悪くしない豫防的施術の方が本務である、斯う言つて宜い位、皆齒並が善くなつて居る、其理由も後で自然

説明致しませう。

第三に亞米利加人のリファインメント所謂紳士的態度とでも申しませうか、風采とでも申しませうか、風致とでも申しませうか、是も二十五六年前に比べると著しく改善せられて居る。過去の亞米利加人の態度は非常に野卑であつた。東の方に参りますと英國の紳士淑女風もありましたけれども、西の方殊にカリフォルニア邊に住んで居つた者は概して蠻的態度であつた。所が今日の亞米利加では決して野卑とか蠻的と見るこゝとが出來ない。紳士的風采が備つて居る。今日では英國紳士に見劣りせないのみならず大様なる態度などは却つて立派である。然し過去の亞米利加人は野卑であつたけれども傲慢ではなかつた。今日の亞米利加人は私の見る處では野卑ではないが傲慢である。誰と會つても、話をしてみても、自分が世界を支配する所の國民の一人である云ふやうな態度を表はして居るのであります。至つて親切ではあるけれども、それと同時に、己れは物をお前に教へてやるぞと云ふ態度が現はれる。是だけの相違が出來て居ります。併しながら昔も今も變らず、至つて世話好きで親切である。それであるから彼は頼まれ、ば何でも萬障を繰合せて、自分の仕事を打棄て、も奔走して呉れる。何か調査をしたいことでもあつて自分に六ヶしいからと頼むと、向ふでは非常に時を費して其調査をして呉れる。頼んだ以上の参考材料を集めて呉れると云ふ氣風を持つて居ります。

四、次に亞米利加の都會と田舎との關係であります。是は何れの國も同じやうであつて、都會は非常に膨脹を致して居ります。其都會が膨脹した割合に田舎は發達して居らぬ。私が過去に留學致して居りましたミシガン大學の所在地の附近の田舎をチョット廻つて見ました。又嘗て居りましたコーネル大學の附近も廻

つて見ましたが、田舎は更に發達して居らぬ。處に依ると、寧ろ中部邊では淋れた様に思はれた。人口が増して居つても、田舎の人口の増した割合は甚だ少ない。けれども都會は非常な發達を爲して居る。そこで亞米利加の都會を見て、亞米利加全體はそんなに進んで居ると思つたら大變な間違ひである。都會と田舎とは總ての事柄に就て、まるで比較にならぬ。其點になつて來ると我國の如きは、まだ寧ろ誇ることが出來ると思ふ。都會と田舎とは勿論文明の差違も大きいけれども、併ながら都會の小學校と田舎の小學校とを比べて見ると、建築物や設備の點に於て比較にならぬにしても、兒童の學力とか其他訓練とか云ふことに至つては、さう大した差違があらうと私には思はれぬ。處が亞米利加の都會の小學校と田舎の小學校とは丸きり天地雲泥、非常に差があるのであります。ミシガン大學はアナバーと云ふところにあります。之は小都會で總べて文明の利便は備はつて居ります。然し其附近……チヨット離れて田舎に行きますと水道もなく、電氣もない。矢張りランプを燈けて水を擔いで歩く、雨水を取つて洗濯に使ふ。さう云ふことをやつて居るので亞米利加の田舎生活は、今も昔も少しも變らぬと云ふ状態である。

五、次に米國人の我々日本人に對する態度……。是も二十五六年前に比べて見ると、私には今昔の感があつたのであります。嘗て留學致して居りました頃には、日本人は非常に亞米利加人に可愛がられた。日本人のすることは眼の中に入つても痛くないと云ふ位であつた。所が今日はさうではない、反對である。却つて處に依ると、諸君も御承知の如く排日運動などが盛んである。是は彼等が悪いばかりでなく、日本人も亦悪い點があると思ふのであります。留學生なども過去に於ては相當の人物が米國に參つて居りましたが、今日ではさうでないやうです。今日大學の所在地に留學して居る者は、決して一流の學生とは思へない。文部省

の留學生なども多少行つては居るが、彼等は彼地で米人と競ふて學力を表はすと云ふやうな方法を執つて居らない。試験を受ける譯でなし、唯研究して居るだけであるから其能力は彼等に分らぬ。向ふに行つて勉強でもさせて貰ふと云ふ人は、場合に依ると金持の息子で日本の學校を失敗したと云ふやうな人が多いと云ふ譯であるから、自然學校に於る評判も良くない。それならば社交ではどうかと云ふと、彼等を満足せしむるやうな社交態度も執つて居らぬ。それからカリフォルニア邊の移住民は、御承知の如く至つて評判が善くない。之は無論米人の自分勝手の主張に出づるに相違ないけれども、又強ち彼等のみが悪いと云ふばかりではない。元來米人は非常に御國自慢をする。何んでも外人が亞米利加化したと見れば、其外人に非常に満足を感じる。處が日本人は亞米利加化さない。何年向ふに行つて居らうとも矢張り日本の生活をする。日本人同志が會へば大きな聲で日本語で話をする。日本の歌を唄ふ。彼等の嫌ふことをどしどしやる。斯う云ふ風で、どうしても彼等が尊しと認める所の亞米利加主義に一致することを好まぬと云ふやうな處から、彼等は毛嫌ひをする。それには無論黄色人種に對する反感も交つて居りますけれども、表面の理由は日本人はどうしても亞米利加人の薰陶を受けることの出來ぬ人間だ、己れの教へを受けることの出來ぬ人間は好まぬ。之れが米人の心理状態であると解釋して差支へないと思ひます。勿論カリフォルニアの排日運動の如きは或る一部分の者、殊にアイルランド人などが主となつて特殊新聞の煽動や政黨などに利用せられて居るのでありますから、米人全體の意向と見ることは出來ませぬ。又今日我國の新聞紙上で響く程の問題ではないのであります。(併しイッ何時大問題になるかも知れませぬけれども)向ふに行つて見ると何處に排日運動があるかと思ふ位であります。只特殊新聞社の前などに行つて見ると、大きな牽強附會な廣告などが日本人排斥の爲に

出て居るが、それを止つて讀んで居る米人は殆んどない位の有様である。

六、それから亞米利加人の公共的國民生活の訓練。是は過去に比べて見ると、一段と能く進んで参つたと思はれるのであります。過去に於ては全く認めなかつたことですが今日では亞米利加萬能を表徴する亞米利加の國旗を中心として國民を訓練して行かうと云ふ風が見えます。殆んど國旗崇拜の態度を持つて居る米人を屢々見受けました。國旗が通ると帽子を振つて「チーア」をする團體を見受けたこともある。そこで亞米利加人は米國的國家主義を限なく宣傳し、之を中心として國民に公共的生活の訓練を與へねばならぬ、それには國旗崇拜が最もふさはしいと考へて居ると見受けました。

七、次に亞米利加人は過去に於ても帝政に對して憎惡心を持つて居つた。元々亞米利加に移住した者は、歐羅巴の帝政の下に虐められて亞米利加に渡つて艱難辛苦して國を開いたのである。其祖先の苦心が頭の中に残つて居つて、帝政に對して何となくいやな感情を持つて居るのであります。併しながら私が過去に留學して居りました頃には、中には矢張り金持の娘などの中には歐羅巴の貴族と結婚すると云ふことを理想として居る者もあつた位ですから赤裸々の帝政攻撃などは餘り耳にしませんでしたが、今日は誰でも彼でも機會さえあれば必々然と帝政に反對するやうになつた。亞米利加人の中には、某國は帝政なるが故に我等は某國に反對する、我等の反對に何の不都合があるか。こう云ふ頑固な非論理的なことを言つて居る者もある位である。殊に歐洲戦争後此聲が一層高まつたと聞きました。亞米利加人は時に依ると非常に非論理的なことを云ふことがある。推理の根底の間違つた處に出發して随分非理の暴論をすることがある。例せば、某國は帝政であるから必ず軍閥的である、軍閥的であるが故に必ず亞米利加と喧嘩をする時がある、機會があつた

ら必ず亞米利加を攻めて來る。斯う云ふ非論理的な勝手な推理を致して、日本を恐れたり憎んだりして居る者も少くないとのことである。

八、次に亞米利加人の例のモンロー主義であります。此節は此主義の趣旨がすっかり變つて來た。過去に於ては自衛的の意味であつたが、今日では自衛的よりは寧ろ我々から見ると侵略的になつて來た。彼等はそれが侵略的であると云ふやうなことは無論考へませぬ。彼等のすること爲すことは彼等の自衛的モンロー主義に適つたものであると云ふやうに考へて居るのであります。侵略的政策でも彼等は之を自衛的に解釋するのである。我が大統領は我々が選舉した所の大統領である。コンGRESSは我々の代議院である。其コンGRESSや大統領のすることは玫瑰を併せやうと、比律賓をどうしやうと、是は悉く亞米利加の自衛上必要なこと、モンロー主義に叶ふたことである……。こんな非論理的な愚論をなすものが今でもあります。

九、次に直接に教育に關係のあることで、米人の氣風の變化であります。亞米利加には官立大學と云ふものはありませぬが其代りに州立大學と云ふものがある。其州立大學は過去には至つて少なかつたのであります。私が居りました頃には僅か七つか八つしかなかつたのであります。今日では州立大學は四十二、外に州立單科大學である農科大學が二十校外ありますから、結局今日州立大學は六十二ばかりあります。此數は米國に於ける大學の總數の眞の一部分で、大多數の大學は私立であります。其私立大學は篤志家の遺産に由りて設立せられたるものや、或は宗教團體に依つて設立維持せられて居るものであります。千九百二十年の統計に由ると、米國に於ける大學の數は合計六百七十二であります。之れ等大學中私が留學して居つた頃は、評判の善い大學は悉く私立大學であつた。例へばハーバート大學、ジョンズ、ホツプキンス大學、エー

ル大學、コーネル大學（コーネルの農科大學だけは官立であつた）其他名高い大學は全部私立大學であつた。其當時の私立大學は經費も豊かに、經營も樂であつた。之に反して州立大學は一向振はなかつた。處が今日は反對になつて來た。寄附金に依つて成立つて居る所の大學は非常に經營困難になつて來た。エール大學の如きはウカウカして居ると第二流の大學に落るであらうと云ふ噂も聞いた。どう云ふ譯で私立大學の經營が困難になつてきたかと云ふには是は亞米利加人の氣風の變化に由る譯であるらしい。過去に於ては遺産を大學資金に寄附すると云ふことは米人間には一種の流行であつた。處が近來は段々と其氣風が薄くなつて來た。勿論今でも随分思ひきつた寄附をする者もありますが、併しながら過去のやうな状態ではない。それは過去には至つて質素な米人氣質が今は餘程贅澤になつて金の難有味を増した爲に、昔のやうな思ひ切つた寄附をする人が減つた譯である。それであるから寄附に依つて創立維持せられた大學は、經營が益々困難になつて來た。そのみならず物價が騰貴して來た爲に、基本財産の値打が少なくなつた。新に貰ふ所の寄附金は減少するに、物價は益々騰貴する。茲に私立大學經營難が顯はれて來た。之に反して州立大學は年々豫算が増加する。物價が騰貴すれば夫れ丈豫算を増して貰ふから私立大學のやうな經營難には遭遇せぬ。それであるから今は州立大學が概して總べての方面で著名な私立大學を凌駕せんとする有様になつて來た。

一〇、次には女子の活動である。是は實に目覺しいものである。膝きりの着物を着て……四ツ這ひになる。と後ろから尻の穴が覗けるやうな着物を着て……各方面に随分活動して居る。會社に行つて見ると女ばかりである。役所に行つて見ると女ばかりである。小學校教員の如きは大多數女子である。處によりては全部女子である。紐育州の師範大學には全校生徒六百人中五百人餘が女子で男子は百人に足りない。男は何をして

居るか……多分男は家で飯でも炊いて子守でもして居るか……到る處女ばかり……働いて居る者は皆々女であるかの如く見えた。以上が二十五六年前と對照して變つたなあと私に思はれた要點であります。

米國の補習教育に就て御話を致す前に、彼國の教育制度を簡単に御話致しませう。それでないと今日の米國の義務補習教育實施の味ひが充分分り兼ねぬと思ひます。亞米利加の教育制度は諸君も御承知でございますが四十八州、州に依つて皆區々である。決して一定の教育制度と云ふものは米國にない。彼等には文部省はない。文部省を一個拵らへたことがありませんが、拵へた翌年に潰して仕舞つた。内務省にビュロー、オヴ、エデュケーションと云ふ一局がある。つまり教育局である。其處では統計を取つたり、新しい教育事業の獎勵指導、又議會に對して全國の教育の狀態を報告する出版物を出す、外國に於ける教育の調査をする。と云ふやうなことを職分として居る。それでは教育行政は何處でやつて居るかと云ふと、各州夫々に教育を司どる役所を置いてある。此役所をデパートメント、オヴ、エデュケーションと云ふて居る州もあり、又ポールド、オヴ、エデュケーションと呼んで居る州もある。デパートメントと云ふ時は州行政の一局で、州知事監督の下で教育行政を司るのである。例へばマサチウセツツの如きはデパートメントになつて居る。それからポールドになつて居る處は委員制度を取つて居るのである。其委員は選舉に依つて擧げる處もあれば、或は州の知事に依つて委囑せられる處もある。處に依ると裁判所の判事が指名する處もある（例へばヒラデルヒヤの如きは裁判所判事の指名）兎に角何れにしてもポールドと云ふ時は委員制で、つまり教育委員會と譯して然るべきか……。然らば教育行政の眞の實權は州の「デパートメント」なり「ポールド、オヴ、エデュケーション」にあるかと云ふに、そうでもない。州が教育行政上握つて居る權能は、綱要的のもので、州

立學校に關する事項の外何等具體的權能を持つて居らぬ。米國に於て教育行政の實權を握つて居るは市町村若くは學校聯合組合に於ける「ボード、オブ、エデュケーション」である。之れも委員制度で合議機關であるが、施行機關としては「スーパーインテンドント」と呼ばれる、教育事務官があり、其下に視學官的のものや監督官的のものを置いてある處もある。こんな風に各地方で勝手に管區内のことをきめるから、米國の教育は各州皆區々であり、一州の中でも各市町村學校區域は皆區々である。そこで亞米利加の學校はどうかと尋ねられても、一口には答へられぬ。亞米利加のどの州の、どの町の學校はどうかと問はれなければ答へる譯に行かぬ。然らば全然共通の點がないかと云ふに、そうでもない。所謂米人氣風に基く共通の點はあるのである。

米國の教育行政は斯くありとして、次に學校に就て申します。小學校は五年制度の地方もあれば、六年制度の處もあれば、七年制度の處もあり、八年制度の處もある。又九年制度の處もあります。斯う云ふ譯であるけれども、亞米利加全體としては何れが一番彼國の代表的の制度かと云ふと、八年制度である。五年制、六年制、七年制度の處もあるけれども、是は八年が宜いけれども先づ都合上五年とか六年とか七年とかにして置かうと云ふ考へから起つて居りますから、先づ彼の國の代表的の制度としては八年制であると見て宜しい。又高等學校に聯絡するは八年制の小學校である。この點からも八年制が標準制と見て然るべしである。此小學校修學年限の相違は州に依つて違ふばかりでなく、市町村みなまちまちになつて居ります。同じ州内でも例せば「マサチウセツツ」では斯う云ふ狀況である。千九百二十年の報告に、九年の小學校を執つて居る市町が八十ある。八年小學校を執つて居る市町が二百四十一ある。七年制度を執つて居る處が七ヶ町村、六

年制度を執つて居る處が二十八學校組合である。マサチウセツツ一州の中だけで斯んな相違がある。そこでマサチウセツツ州の州教育長と話をしてみると、八年が理想の制度であるが、土地の状況上止むを得ぬと申して居りました。亞米利加では八年制の小學校が標準制であるけれども土地の便宜に依つて任意の制度を採用して居る。五年もあれば六年もある、必要と認めれば九年制も採用する。そこが共和政體の特色である。米國自由制度の恩典であると彼等は考へて居る。我國は六年の義務教育で國民を拘束して居りますが、亞米利加人はそんな劃一的考へは持つて居ない。

さて米國の高等學校は四ヶ年が標準である。是は亞米利加全體を通じて、さうであると心得て宜しい。何となれば四ヶ年の高等學校のみが大學に聯絡して居るからである。けれども實際に於ては一年の高等學校があり、二年の高等學校があり、三年の高等學校もある。勿論之は都會の學校でなく片田舎の學校である。不思議なことには、斯う云ふ風な高等學校もある。先生が一人で生徒が三人、然もそれは小學校の中に設けられてある。亞米利加人の内で特に田舎に住んで居る人の考へは斯うである。高等學校だと云ふて必ずしも立派な建物で授業する必要はない。高等學校の教育を受けたいと云ふ子供があれば、其子供に教育を受けさせてやるには、學力相當の先生を連れて來れば澤山である。斯う云ふ考で、先生が一人で生徒が三人と云ふやうな高等學校が出来る譯である。さう云ふ譯であるから、亞米利加の高等學校と云ふものには色々の種類があると思つて然るべしである。御參考迄にマサチウセツツ州の統計について申し上げますと、マサチウセツツには千九百十八年六月、高等學校で教員が二人あるのが十二校ある。(マサチウセツツ州などは米國では随分教育が進んで居る州ですが)教員三人の學校が三十八校ある。千九百十二年と十三年の間には、四人以下

の教員數の高等學校が八十一校もあつた。其時には教員一人の高等學校が一校あつて、而も一人で四學年を通じての授業をしたことである。それで亞米利加人が如何に制度や形式に拘泥しないかと云ふことが分る。一人でも生徒があつたら高等學校を置いてやらう、無くなつたら廢止しやうと云ふ位、氣輕な考を持つて居ります。それで面白いのは或る高等學校を卒業しても學科不備である時には、是々の學科は教へて居ないと云ふことが卒業證書に記載されて居ることもある。それであるから高等學校を卒業したと云つても學校々々で夫々資格が違ふから、大學入學の際に條件附で入學許可になるものが少くない。譬へば某は何科の條件付、某は何科の條件付入學と云ふ具合で其條件付の學科は成るべく早き機會に、附近の高等學校なり或は適當の先生なりに就て修學證明を得て、其條件を取り除いて貰はねばならぬ。さもなければ正式に大學を卒業することが出来ない。

近來米國には初級高等學校と云ふものが顯はれた。それは小學校の七年八年の二年と高等學校の第一年とを取りて、三年組織の學校にするると云ふ譯である。初級と云ふ譯語が適當かどうか分りませぬが、英語では「ジュニオ、ハイ、スクール」と申して居ります。小學校の第六年を終りたるものを收容し、三ヶ年間の教育を施して上級高等學校、即ち「セニオ、ハイ、スクール」に送つて、更に三ヶ年間學ばしめると云ふ組織である。ユトウ州の如きは現に此制度を取つて居る。而も是が亞米利加の中央教育家の理想案であることとであります。然し現在あちらこちらに出來て居る初級高等學校と云ふものは區々で、必ずしも此理想案に従つて居らぬ。小學校の八年と高等學校の一年とを取つて居る學校もあれば、又は高等學校の第一年と二年とを取つて之に初級の名をつけて居る學校もある。「ワシントン」中央教育局の普通教育調査課長はこんな話を

私に致しました。近き將來に於ける亞米利加の理想案としては、初等教育即ち小學教育を六年とする……今迄八年が理想制であつたものを六年にする（日本では六年の小學を八年に延さうと云ふ際であるから特に興味があると思ひます）小學教育の八年は長すぎる、國民基礎教育としては六年が適當である。小學の最後の二年と高等學校の最初の一年を取つて初級學校即ちジュニオ、ハイ、スクールとなし、さうして現在の高等學校の二年、三年、四年で上級高等學校即ちセニオ、ハイ、スクールとする。是が中央に於ける教育爲政家、地方に於ける教育経験家に依つて、理想案として近き將來に於て實施されたしと希望せられて居ることである……要するに米國は從來八四案即ち小學教育八年、中等教育四年であつたものを、六三三案即ち小學教育六年、中等教育を三年宛二期に分つと云ふことにしたいとのことである。

米國の教育制度は大體こんなことであるとして、次に今回の巡回中どんなことが教育上、私の注意を惹いたかに就てお話を致します。如何なることが教育上私の注意を惹きましたかと申しますと、先づ第一に教育上彼等が盛んに盡力して居るものは亞米利加化……アメリカニゼーションと云ふことである。それは歐羅巴から非常に移民が入る、東洋からも入る……今日は東洋からの移民は拒絶して居るけれども……戦後特に歐羅巴からドンドン這入る。是等の移民を何でも亞米利加化さなければならぬ。これが國家の重大事であると考へて非常に努力して居る。然して米國化の根本事項としては、英語の使用と米國々體の理解と云ふことであると考へて、政府でも民間でも一方ならぬ盡力して居ることが、一寸彼の國に足を踏み入れたものに目につく程である。

第二には米國教育の社會化と云ふことである、ソシアリゼーション……各地の學校で此傾向をもつて居る

やうに思はれました。今より約二十三年前と思ひますが、其當時シカゴ大學教授（今はシカゴとコロンビヤ大學の教授になつて居りますが）ジョン、デューエー博士がソシアル、スクールと云ふ意味で、シカゴ大學附屬として小さな學校を拵へたことがある（ジョン、デューエーは嘗てミシガン大學で私のサイコロジの先生でありました）同氏が此學校を拵へたは、丁度獨逸でケルシエンシタイナーがミュンヘン市で、教育は實業を中心とし作業を中心として國民的訓練を與へなければならぬ、と云ふことを主張したと殆んど年代が同一ではないかと思ふのであります。ジョン、デューエー氏の考へは、學校は生活の準備ではないのだ。社會の準備をする學校ではない。學校は社會其ものである。學校は生活其ものであらねばならぬ。學校は小さいながら、社會を其儘移し、生活其ものを經驗させねばならぬ。是がデューエー先生の考へであつた。千八百九十九年四月同氏主宰の小學校で三回の講演をなした。後にそれが「スクール、エンド、ソサイチー」と云ふ書名で出版された。所がジョン、デューエー氏の考へが最も具體的に且大規模に應用せられたのは、インディアナ州にゲーリーと云ふ處がある其處にワルトと云ふ人がある、此人が盛んにデューエーのソシアル、スクールの理想を實行した。（私の不在中ゲーリーシステムと云ふ言葉が度々新聞に出て居つたやうでありますから、多分我國でも相當に研究されたことと思ふ。）「ゲーリーシステム」と云ふても、要はデューエー氏のソシアル、スクールを「ワールト」氏が大規模にゲーリー市に實施したに過ぎぬ。世間ではゲーリーシステムと云ふものは二部教授を特色として居る點から名高いやうに解して居る人もあるやうですが、是は大間違ひである。二部には分つけれども、特色がそこに在る譯ではない。特色は矢張り學校の社會化、生活化と云ふ點に在る。ミシガン州のデトロイトでは前からブラトーン、システムと云ふ制度を實行して居る。

此制度もゲーリーシステムと變りはない。詰り兒童を二組に分ける、教場を正科教室と特別教室との二種に分ける。甲組生徒が正科教室に在る時は乙組生徒は特別教室に行く。一日の授業時数は六時間で、其六時間を十二の三十分に分ち、各組共に午前中に三回正科教室に、三回特別教室に入り、午後にも亦同様である。特別教室の任務は主として社會生活、實際生活の實現にある……デトロイトに於ける「ブラトーンシステム」の源は矢張り獨逸に在る。デトロイトには獨逸の移住者が多いからこんな制度を始めたのであらうと或る米人は私に語つた。私は伯林に行つた時に某獨人に此物語をした。其獨人は、何、それはこちらに在る、伯林の郊外に現に斯う云ふ學校がある、行つて見よと言つた。そこで私は行つて見た。成程幾分寄つた處がある。こゝでは極端に學校を實際化して居る。然し規模から見ても創立の年月に徴しても、ブラトーン、システムやゲーリー、システムの先驅とは認められなかつた。ゲーリーの學校は勿論のこととして、今日米國に於ける教育界の氣分は、學校を日一日と社會的氣分に導き入れ、學校生活を社會化しつゝあると云ふことが私の目に止まりました。

次に私の目に付きましたのは、米國各州は學校集中と云ふことに努めて居る。理由の一面には經費の節減と云ふこともありませうけれども、主として教育の効果をより多く擧げたいとの趣旨からである。彼等は「コンソリデーション」と申して居りますが、小さな效果の薄い學校を各地に散在せしむるよりは、出来るだけ便利よき中央に集中せしめて教育せんと考へである。特に村落には不完全の學校が多いから、そんな學校はなるべく一つに集めて、交通機關を公費に依つて供給し、適當の中心に集めて教育せんと企である。生徒の通學は公費支辨に依つて便利を計つてやる。鐵道や電車は勿論のこと、馬車自動車等の交通機關を供給

して、遠隔の地に在るものも通學の不便のないやうにしてやれば、學校を併合すると云ふことは甚だ良いことであると申して居ります。（補習學校を我國に於て拵へると云ふ上に於て、此ことは多少參考になりはしないかと思はれる。悉くの地方に補習學校を散在せしめると云ふ譯には行かぬから、交通機關を利用して交通費を支辨して、一つ處に集めてやつた方が、却つて安上りで有效な教育が出来るであらうと思はれます）彼の地の教育者中にはコンソリデーション、オブ、スクールは近來教育上の最も賢い工夫であると申して居つた者が數人ありました。

其次は米國教育の實業化の傾向と云ふことである。是は各州共に非常に努めて居るやうでしたが、最も注意を惹きましたは紐育市にあるブレゾオケーションナル、スクールである。職業準備學校とでも譯ませうか……之は小學程度の學校であります。小學第六年、第七年、第八年の三學年を置いた學科半分、作業半分の學校である。作業は各種の工場を設けて實習せしむるのである。此種學校の起りは小學八年の普通教育は不適切である。兒童が將來從事する多くの職業は熟練と趣味とを要する。熟練には手指のまだ固まらぬ前の練習が緊要であるし、趣味も亦兒童の好奇心の盛んな時代に喚起せられねばならぬと云ふことから、試みに設立せられたさうである。又イリノイ州其他二三の州にアチヅメント、コース又はホーム、プロセクト、コースと云ふ科目が置かれてある。之は作業課題とでも譯したら最も分り易いかもしれぬ。其趣意は小學校に於て六年、七年、八年の生徒に實科を課する。實科は何でも宜しい。家で何か仕事をやらせる。例へば野菜の栽培、鐘詰作業或は養鶏、裁縫或は商賣、料理、音楽、牛乳しぼり、それから勞働に出て賃金を儲ける、小牛を飼ふ、豚を飼ふ、羊を飼ふ、作業の種類は何でもよい、生徒の好む所の仕事を宿題として課するのである。

る。御参考の爲に野菜栽培の一例を挙げて見ませう。一生徒が野菜栽培の課題を選んだとする。先づ第一に其父兄と相談して畑を借らしめるのである。其畑の標準は一エーカーの四分の一以下で、如何なる場合でも此程度を超えてはならぬと云ふのであります（日本の一反以上を超えてはいかぬ）其畑に對して地代を拂はしめるのである。そうして自分で計畫を立て、野菜を栽培し、出來上りの上はそれを段々に賣つて、最後に損益計算をなして學校に報告するのである。之に依つて學科點が與へられる。無論父兄に相談して其忠言を受くることは差支ない。學校でも其専門の係りの先生を置いて、見廻らしたり監督させたりする。之は野菜栽培に就て一例を挙げたに過ぎないが總ての科目に就て作業規定が設けられ、其規定に従つて計畫、實行、損益計算報告をなさしむる。イリノイ州クック、カウンターの如き、此科を非常に重要視して居る。之れ丈でも米人が如何に教育を實用化せんとしつゝあるか伺はれる。それから先刻御話致しました、初級高等學校設立論も、一面には小學の七年八年を取つて今少しく實用的に教育したいとの意見に基いて居る。

紐育市にコーオペレチヴ、スクールと云ふがありまして見に行きました。オハヨウ州にも其他にもあるさうです。私が見た學校では六百人の生徒があつて、甲乙三百人づゝ二組に分れ、甲組三百人が會社商店で勤務して居る週間は乙組三百人は學校で授業を受ける。次の週間に甲組三百人の生徒が學校に歸つて來ると、今度は乙組三百人が會社商店に行く。會社商店では丁度二人で一人の勤務をやつて居る譯になる。學校では甲乙兩組交代で授業をやるから、三百人の設備で六百人を教育して居る譯である。要は教育は實際的でなければならぬ、實社會と密接なる關係を保ち、理論は實際に應用せられ、實際は理論に依りて改善せられねばならぬとの趣旨から斯種學校が生れたのである。

次には米國の學校衛生のことを申し上げたい。亞米利加人の體格が大變良くなつたと云ふことを前に申しましたが、之は天惠潤澤なる土地に居住するに由る點もあらうが主たる原因は、彼等が體育衛生に留意するにあると信じます。亞米利加人の考へでは、學校の生徒に形式的の體操や操練をやらせるは體育上何等効果のあるものでない。それよりも自由に運動させるのが發育上最も效能がある。何よりも一番我々が慮れる處は、子供等の發育上の故障である。相當に發育すべき者が發育しないと云ふのは、何處かに病氣がある。其病氣をなほしてやらなければならぬとの趣旨から、大きな學校に行きますと、醫者が詰切りに來て居る。看護婦も來て居る。それから齒醫者も日を決めて來て居る。さうして子供の齲齒を皆なほしてやる。齒並の悪い者はそれを直ほしてやる。斯く行届いた學校もある。そこまで届かなくても學校醫が子供の悪い處、營養不良の點や或は發育の悪い原因を診査して、それを父兄に注意してやる。父兄が直ほしてやる事が出来なければ……直ほす力がないならば校費で直ほしてやる……是丈は何處でもやつて居る。國民の中に弱い者があると、それだけ社會全體の損であるから、一兒童の輕症でも等閑に附する譯に行かぬ。之れが彼等の考へである。米國の學校醫は、體格検査のみの爲の學校醫ではない。兒童兒女の治療は勿論、發育改善まで積極的に處理する所の學校醫である。亞米利加人の體格が良くなつた、又は齒並が良くなつたと云ふことは是等が與つて餘程力あると思つて居ります。

米國高等學校の性質が私の留學當時に比すると非常に實業化して居る。以前には高等學校即ちハイ、スクールと云ふものは日本の高等學校のやうなものであつて、大學の豫科に過ぎなかつた。ラテン、グリーキが主なる學科で文科、理科と分れて居つても、要は大學豫備校に過ぎなかつたが、今の高等學校は商業科、工

業科等の専門科が置いてある。中には工業科のみの高等學校もあれば、商業科のみの高等學校もあります。都會で完備した高等學校と言はれて居るものには、文科もあり理科もあり、同時に商科も工科もある。女子の爲には家政科もある。或る米人はこんなことを申して居りました。大學に行かなければ完全な人間にならないと云ふことはない。學生が競ふて大學に學ばんとするは米亞利加の國是ではない。高等學校を終ればそれで結構である。高等學校は國民の大學である、ビーブルス、カレヂである。國民教育の仕上げ場であるから、そこでは何か職業教育の端緒を授ける必要がある。社會に有用な働きをなす丈の素養を授けて置かなければならぬ。即ち高等學校だけ卒業しても、社會に出て有用の人材となり得るやうにせねばならぬ。勿論進んで大學に行かうとすれば行くことが出来るが、行かなくてもよい。之れが彼等の考へである。高等學校を卒業して三年五年社會に出て働き、時を経て大學に行きたいと思ふ時に、大學に行つて教育を受けると云ふことは彼の國に數ある實例である。こんな譯で彼の國の高等學校と云ふものは、最近非常に實業化して來た。面白い話があります。ミシガン大學に私が入學して居つた頃に下宿して居つた家の娘が、其當時丁度大學に在學して居つた。私が一年に入つた時に其娘は四年であつた。所が娘の許嫁の約束をして居つた男が遠方の高等學校の教員として赴任すると云ふことで、彼女が大學を卒業せんとする間に、僅か四時間位の課程を終らずに結婚して行つてしまつた。今度偶然私がミシガンに行つて其家を訪ねて見ると、其娘であつた人が好い加減のお婆さんになつて居る。其息子にも逢つて晚餐の御馳走になつた。さうして其娘であつた人から話を聞くと、彼女の女は昨年自分の三番目の息子と一緒にミシガン大學で卒業證書を貰つたと云ふことであつた。之れに由りて如何に亞米利加の大學と云ふものが自由制度であるか、又亞米利加人の氣質があくせくし

て居らぬと云ふことが分る。

女子の家政科が最近非常に獎勵され、又大いに發達して居ります。家政科で學位を授ける大學もあります。コーネル大學農學部内に在る家政科の如きは大規模のものである。國家が特に家政科を獎勵する所以は、國民の健康、消費經濟共に家政に待つ所多しからとの趣旨に由ることである。

商工心理の研究も亦私の注意を惹きました。私の友達で、コーネル大學で一緒に勉強したヒルと云ふ人が、今はミシガン大學のサイコロジの主任教授である。其人が今度の歐洲戦争に行つたのである。其人ばかりでなく、數多くの心理學者が召集された。戦争等に何故サイコロジストが必要であるかと云ふに、ヒル氏の話に依るところである。亞米利加は常備軍がない國である。それに三百萬人も動員して見ると、誰を何方に向けて宜いか分らぬ。誰がどう云ふことに適當であるか分らぬ。兵卒の職業分をしやうと思つても手がつけられない。そこでサイコロジストが召集せられて行つた、さうして實驗心理に依つて其職業分けをした。所が其成績が非常に良かったと云ふことであります。それから實驗心理熱が顯はれた。今日迄實驗の結果、或者は或職業には絶體に駄目だと云ふことが分る。世の中で何が不經濟かと云ふと、何職業に由らず不適當な人を其職に就ける位不經濟なことはない。適當適材位結構なものはない。教育を受けさせるにしても、其ものゝ才能に不適當な教育を受けさせること位ひ、無用で而も不經濟なことはない。人には先天的に適不適がある。之を無視して工業家になれぬ者に工業教育を施したり、美術家になれぬ者に美術の教育を授けると云ふことは愚なことである。耳のあいてない人間は音楽家になれぬ、數理に暗い人間は計算家には不適當である。賣子に適しても帳方に適せず、帳方に適しても賣子に適せないものもあるので、實驗

心理に依りて豫め適否を決定しやうと云ふが商工心理である。現に紐育市のメーシー、デパートメント、ストリアでは人を採用するに、實驗心理に依つて採否を決定して居る。採否の實驗をやつて居る人はコロンビヤ大學で商工心理を研究した婦人である。私は行つて見ましたが、中々面白くやつて居ります。店員の採否から店員の職業分、店員の勤怠調べ、店員の成績調など實驗に對照して色々の表を作り、今の處では殆んど百發百中であると申して居りました。商工心理の研究は單に亞米利加ばかりではない。獨逸でも盛んにやつて居ります。大學は勿論のこと、高等商業、高等工業などでも研究して居ります。伯林で元の宮廷の一部分がベルリン大學の商工實驗心理室になつて居る。私は態々一日を費して文部省の久保田君と一緒に居つて見せて貰ひました。色々面白い有益な實驗をやつて見せてくれました。私の學校からも人を送つて研究させて見たいと思つて居ります。若しも實驗心理で職業に適否が分るなら、こんな經濟なことはない。無用な人に無用なことを勉強させないで済む。殊に徒弟教育上、如何なる職業に就かむるが宜しいかと云ふことに就て、先生や學校長は親切な相談相手となつてやらなければならぬ。それには若しも實驗心理が本當に役立つものとすれば、非常に有難いことであらうと思ふのであります。私の注目した亞米利加の教育制度の殊色は以上申し上げた通りであります。

さてエ、ベダゴグが見たる米國の現状は如上であるとして、其教育制度の上に一の大缺陷がある。八年の初等普通教育、四年の高等學校教育、四年若くは四年以上の大學教育は、如何にも系統的であり理想的であるかの如くなれども、それは單に天惠の頭腦を持ち大學教育を終る丈の機會を與へられたる小數者の爲に系統的であり理想的であるのであつて、大多數國民は小學教育で社會に出るから、高等學校以上の教育

は彼等に何の用をなさぬ。彼等が最も必要とする、各種職業に關する教育に就ては、國家としては特に施設して居らぬ。大學に於ける専門學科や、高等學校に於ける商工科は彼等にはあつても同じことであるので、米國では使用人に特殊教育を要する會社では自衛上社内教育機關を設けて、自家に都合よきやうに教育することが廣く行はれるやうになつた。然し會社の教育法は甚だ自分勝手であつて、なるべく自家に役立つて他には不向きであると云ふやうに教育するのである。即ち自家の營業に機械化すると云ふ方法を執るのである。之れでは平時は兎に角一朝事あつて各種産業機關に動員でもあつた時には始末が悪い……此缺陷に就ては、米國の有識者が十餘年前より氣付いて居つたことらしい。と云ふは十餘年前より歐洲各國の職業教育の狀態を綿密に調査して居つたからである。然るに今回の歐洲戰の教訓は、急に米國民の自覺を促したらしい。今回の戰には、獨逸は八方塞りであつた。物資の供給は全くたゞれて居る。國內には石炭があつても原料のない國である。半年か一年の間に獨逸が勝利を得たら兎に角、持久戰となつて二年も續いたら物資の缺乏から破産する外はあるまい、と各國人が思ふて居つた。然るに二年経つても三年経つても、そんな様子は無い。産業狀態なども却つて聯合國のそれよりもよかつたかも知れぬ。其原因は何處にあるかと云ふに、實業教育、特に徹底したる義務補習教育に歸する外はないと云ふことが分つた。獨逸は軍事上の動員を爲すと共に、産業上の動員をも爲し得たのである。それは全く補習教育に由りて多年産業上訓練せられたる國民を有して居つたからである。

一年位で行きつまるであらうと考へられた獨逸は、二年経つても三年経つても行きつまらずに却つて聯合國が行きつまりかゝつた。獨逸は益々横暴を極めて、米國に迄挑戦しかゝつた。米國も立たざるを得なくな

つた。立つとしたらしつかりとした決心でかゝらなければならぬ。軍事上の動員をするにしては、之れが産業機關に及ばず影響も考へなければならぬ。無限の富源を有して居ると安心しては居られぬ。物資はあつても之を仕上げる産業機關が止まつては何にもならぬ。之を動かすものは人である。之を動かし得る丈に教育せられたる人である。軍事上の動員をするにせよ、産業上の動員の準備をせなければならぬ。幸に戰が一年や二年で終るなら、米國の如く天恵の豊かなる國には大した影響はないかも知れぬが、三年五年と繼續する場合には、容易からぬ變化が来るかも知れぬ。して見れば、此際實業教育振興策を講じて、今日迄の國家教育制度の缺陷を補填し、國家長久の計をなさねばならぬ……斯くの考へからスミス、ヒューズ法令が千九百十七年に生れたのである。

此法令が出た當時にはさして注目を惹かなかつたが、さて米國が動員して三百萬人の壯丁を歐洲に送るとなつて見ると、豫期に反しあまりに速かに其影響が産業機關に及んで來た。二年や三年はと思ふたに、一年経つか経たぬに各種産業機關に滯滞を來した。それは物資の缺乏からでなく人物の缺乏からである。頭株の人物の缺乏からでなく熟練職業の缺乏からである。一の産業機關の故障は他の産業機關に影響を及ぼす。職工の奪合が始まる。賃銀は高くなる。田舎者が都會に集中する。農田は荒れる。農産品は減る。工業品は粗悪になる。米國識者の豫見が餘りに早く的中した。スミス、ヒューズ法令の實施がまだ着手せられない前に、過去に於ける教育制度の缺陷がありありと分つて來た。一旦緩急の場合には、少數の智識階級のみで國が護れるものでない。今の戰は昔の戰とは違ふて居る。昔の戰は強兵であれば勝利であつたが、今の戰は産業機關の調節が基である。産業兵卒が強くなつては終局の勝利は得られぬ。して見れば、小學丈を終りて社會に

出て、産業兵卒となる所の多数國民を、社會が爲すが儘に任せ置いた米國の從來の教育制度は一大缺陷があつたと云はねばならぬ。之れが缺陷を補はんとするスミス、ヒューズ法令は賛同せられねばならぬ。速かに其効果を見ることを努めねばならぬ……之れが今日亞米利加の輿論である。斯くして該法令の價值が急に認めらるゝやうになつて來た。

スミス、ヒューズ、アクトを極簡單に、私の話の目的に必要な處だけを申しますと斯うである。實業教育、農業教育及家事經濟等の教員、指導者及監督の俸給を國庫から補助してやる。又是等の教員を養成する爲に必要な所の費用を國庫から補助してやる。斯う云ふ法令である。各州で此法令に賛同すると否とは勝手にあるけれども、此法令に賛同した州に對しては、其州で出すだけの金額を中央で補助してやらう。州で一弗出すならば國庫で一弗の補助する、百弗出すならば百弗出してやる。要するに實業教育振興上、何に困るかと云ふと實業教員に困る。少ない俸給では人が得られぬので其教員の俸給に困る。困るなら補助しやう。若し此法律に賛同して實業教育を振興するならば、州で出す寸の金は中央政府で出してやる。教員養成に關しても其通りであるぞ。斯う云ふことである。初めには軍人復職に關する規定は此法令の中になかつたが、今は軍人復職の爲の實業教育の規定も加はつた。それから職務上から起つた不具廢疾者の轉業規定も加はつた。職業上の災害から跛になつたり片手を失ふたりして、其職業に勤められないことになつた者の爲に、他に轉業し得るやうに教育をし直してやると云ふ趣旨である。併しながらスミス、ヒューズ法令の主眼は矢張り實業教育の一般振興策であつて、而も之に潜んで居る骨子は義務實業補習教育の國民的普及である。前に述べたやうの理由からスミス、ヒューズ法令は、各州から非常な歓迎を受けました。昨年十一月の話に、四十八

州擧つて賛同したとのことでありませう。さうして各州には夫々實業教育局が出来まして、中央の實業教育局と力を合せて實業教育振興策を講じて居ります。スミス、ヒューズ法令に由り國庫補助を受くるには色々の制限が設けてあります。其制限を段々讀んで見ると、實業補習學校を拵へよとは書いてはないけれども、結局初等程度の實業學校か又は實業補習學校より外に拵へるものはないやうになつて居る。段々煎じ詰めて見ると、此法令の趣旨は、初等程度の實業學校の獎勵、實業補習教育の獎勵と云ふことに歸して居る。そこで此法令に賛同した各州では、義務補習教育令を續々發布して來た。私が昨年十一月、中央政府の實業教育局に行つて聽きました處に據ると、其時は既に二十五州、義務補習教育令を發布したとのことであつた。さうして近いうちに、四十八州悉く發布するであらうとのことであつた。今頃はもう大多數の州が義務補習教育令を發布して居ると思ひます。

桑港に上陸すると直ちにビュロー、オブ、エデュケーションに行つて見ました。新たに補習教育課長が出来て居ること、遇ふて見ました。同課長は警察官のバッヂを附けて居りました。何の爲であるかと尋ねると、義務補習教育實施は容易からぬことである。若し本人や父兄が承諾せぬ時は、警察官の權能で罰金若しくは禁固の刑に處する爲であると申しました。之に由りて義務補習教育に對する彼等の熱心さ加減が伺はれます。

そこで此義務補習教育は如何なる状態で、現在亞米利加に行はれて居るか云ふに、是も各州區々であると申さねばなりませぬ。私は今回七八州の状態を目撃して參りましたが、之等各州の金は區々になつて居ります。併しながら大體の精神に於ては略々同じであると云ふことが出来ます。其中で比較的によくもあり又

代表的のものとして、紐育州の義務補習教育のことをお話致します。各州共に法令の大意は似て居りますが、其中で紐育市の分が比較的代表的で、又當局の説明も面白いと思ひますから茲に紹介致します。

補習學校に關する紐育州の法律

（千九百十九年法律第五百三十一章第六百〇一節第二十二條）

補習學校……州内各都市及び各學校區域は補習學校を設くべし。當該學校は公立學校系統の一部とす。授業は通常の授業日に之を行ひ、時間は午前八時より午後五時迄とす。

處罰……この法律に違反する両親又は保護者は百弗以下の罰金又は十日間の禁錮若しくはその双方に處す。十六歳未満の未丁年者は一般學校出席に關する第六百三十五節の規定によりて處分せらるべし。十六歳以上の未丁年者は十弗以下の罰金又は十日以内の禁錮若しくはその双方に處すを得。會社又は他の法人にして本條令の規定に違反するものは二十五弗以上百弗以下の罰金又は五日以上十日以下の禁錮若しくはその双方に處すを得。未丁年者を雇ひ入れたる際は雇主は三日以内に學校當事者宛雇入證書を提出すべし。

法律の施行……法律は五ヶ年以内に市内に於て十八歳未満の未丁年者全部を收容し得る設備をなすべきことを規定す。千九百二十年に於ては小學校卒業生に非ざる十七歳未満の未丁年者のみ登録を要求せらる。

登校を要する者……十八歳未満の未丁年者にして修業年限四ヶ年の中等學校（私立と公立とを問はず）の課程を終了せざる者は一週四時間以上八時間以内出席するを要す。未丁年者にして一時職に従事せざる者は毎日出席するを要す。千九百二十年に於ては小學校の課程を終了せざる十七歳未満の男女兒のみ登校を要す。通學者は滿十八歳まで登校を繼續するを要す。

夜學校に通學するものは之を以て補習學校の通學に代用することを得ず。

千九百二十年に於ける紐育市補習學校の事業計畫

社會的實驗所の設置……補習學校は、特に社會的實驗所たることを期し、少年労働者の職業的、精神上、身體上の素質、道徳的、社會的的特質を分析し、其結果として發見さるべき特殊能力を發達せしめ、同時に短所を矯正する事を目的として居る。特に力を用ふる點は、實際生活に關聯して教育を行ふことである。此事は、男女兒の職業的、家庭的生活を中心として之を行ひ、立派に、社會の一員として立つべき米國市民を養成するのが目的である。補習學校は知識を授けるところと云ふよりも、寧ろ各自の従事する仕事及び職業、教室に於て各自に課せられる仕事を行ふ上に於て、どこに缺陷があり、どこに長所があるかに關して、自己を省みる機會を與へることを目的として居るのである。

青年期の橋渡し……補習學校のつくられた第一目的は、少年労働者に、その教育を繼續する方法を與へてやるにあつたので、その意味に於て、補習學校は「繼續」學校である。即ち十四歳から十八歳迄の間、換言すれば、彼等が子供と大人との中間にある過渡期に於て、起つて來る教育の中絶をつなく役目をするのである。で、若しこの學校の繼續教育の影響が有效であるならば、早晚生徒は自ら進んで再び正式の學校教育を受け氣になり、或は夜間の小學校、中學校、職業學校、其他の補助教育機關を利用するに至るであらうと考へられるのである。

補習學校の目的……働いてゐる小供を、たとひ一週四時間でも、再び學校に呼び返すと云ふのだから、今迄の學校と同じ様な教育方法では到底駄目である。子供を學校に引つけるため、學科も、學校の空氣も、そ

の子供の職業生活、社會生活に、最も適切なものとせなければならぬ。
補習學校は特に以下の諸項を目的としてゐる。

- 一、職業上の嚮導……職業の選擇を助けるために、職業的經驗を與へること。而して、首尾よくその選擇が出来た上は、その職業をよく呑み込ませて、決定した目的に、なるべく早く到達出来る様にしてやること。近來の産業は、單調になり、生産は急速度に行はれ、而して、労働者の知的發達などには一向注意を拂はぬため、仕事に従事する男女兒は、なるやうになれと、まるで顧みられない状態にある。そこで、補習學校では、それ等の男女兒を、機械工場、印刷所、割烹場、事務所などで實際に働かせ、親しく色々の仕事を觀察する機會を與へ、知的嚮導を行ふのである。かくして、彼等の特殊能力を分析し、生得の短所を斟酌し、これ等を基礎として、職業生活の計畫を立てやることが出来るのである。
- 二、職業生活との聯絡……彼等の雇主を訪問することにより、學校と彼等の職業生活との間に聯絡をつけて、職業的嚮導の補ひとし、又出来るだけ、總ての生徒の進歩をみとけること。
- 三、就職の世話……生徒の爲に適當な仕事を見つけてやること、この際には、豫め考慮してある職業上の計畫に従ふ。これは前項に附随した事業である。
- 四、社會の安定……唯一の恒久的方法に依つて社會の不安を緩和すること、即ち盲目的な憤懣に代ふるに合理的な聰明な立身の希望を以てすること。落着かない、給料の安い、不熟練な労働者が、自己を發展せしめる機會を與へられる時は、この願ひは一般労働者を改善することに向ふもので、怠業などには向はないものである。この様な補助が、市町村の如き公共團體から來るときは、労働者は、その團體に

對し、その施政に對し、尊敬の念を深めるものである。即ち補習學校は、各人に平等の機會を與へるといふ米國主義の實現に向つて、更に一步を進めるものである。

- 五、健康……少年労働者の健康を維持し、これを増進すること。衛生的習慣を、系統的に發達せしめ、その職業上の價値を力説し、併せて、醫師や看護婦に検診を行はしめること。
- 六、社會化……各種の社會的施設と提携して、彼等の爲に、一層健全なる社會生活を創始すること。
- 七、實用國語及び算術……特に職業上に關係ある國語及び算術の基礎的智識を確實にし、進歩を計ること。學校を早くやめた者に限り、これ等の科目を嫌ふ者が多いのであるが、職業上に於ける實際的價値が分り出すと、これ等の學科は、新しい意味をもつて來て重要視される様になる。
- 八、公民としての責任……初歩の歴史、經濟、公民學を授けて、絶えず時事に關聯せしめ、公民として、習慣的に立派な行ひをする様に注意してやり、善良な公民をつくること。

補習學校法律の背景に關して州教育局長フィンレー氏の曰く

「千九百十九年、州立法部が、補習學校法案を通過し、州知事スミス氏が之に署名したのは、労働少年少女をして、市民としての義務を一層立派に盡し得る様、適當な教育を受けしめる必要を明らかに認めたからであつて、この法律は「小供の憲章」と呼んでもよいと思ふ、なせならば、この法律によつて、本州内に住む凡ての子供は、州からこの教育を受ける權利を保障されたからである。思ふに、年幼くして職業に従事せしめられる男女兒は、州として特に顧慮すべきものであつて、私は、非常に重大な義務として、彼等の利益を保護する爲に到來した、この機會を迎へるのである。なせ

ならば、我國の將來が、現代少年の理想と、民主政治に對する彼等の信仰と、彼等が之を行ふ能力とに依屬することを、今日程切實に感ずることは、未だかつて無かつたからである。年々學校を去つて行く、十四歳乃至十七歳の無慮幾千の兒童は、市民の大部分を形成するので、彼等こそは、眞に社會の基礎となるべきものなること、少しも疑ひを容れないのである。

この義務補習學校の運動が起つたのは、合衆國に於て比較的近代のことであるが、千九百二十年の九月には、この種の學校を開校する州が、紐育州以外に十八まで出来ることは、まことに心強く思ふのである。その州名は、アリゾナ、カリフォルニア、イリノイ、アイオウア、マサチューセツツ、ミシガン、ミゾーリ、モンターナ、ネブラスカ、ネブアード、ニウ・チャージ、ニウ・メキシコ、オクラホーマ、オレゴン、ペンシルヴァニア、ユートー、ウオシントン、ウイスコンシンである。ウイスコンシンは、千九百十一年に義務補習學校を設置する法律を制定し、ペンシルヴァニアは千九百十五年之に倣ひ、他の十七州は千九百十九年之に續いたのである。他の各州も近き將來に於て皆かくの如き法律を設くるに至るであらう。而してその結果として、補習學校は、米國教育制度の一要素と見做されるに至るであらう。

最後に、自分は補習學校は、義務教育なるが故に眞に民主的であることを指摘したい。換言すれば、これを、學習の希望と能力とを有するもののみを隨意學校として了へば、その利益を受ける者は、「恵まれたる少數者」に限られて了ふ筈であるが、これを義務教育とすることに依つて、凡ての兒童をその恩典に浴せしめることが出来るからである。と。

次には補習學校實際の有様を、紐育教育當局者の口をかりて述べませう。

補習學校教育の實際

生徒……補習學校を參觀して、第一に受ける印象は、小學校を見た時の感じとは大分違ふ。生徒は、男女共大抵身體が成熟して居て、責任を持たされて居る労働者と云ふ様子が見える。そして、彼等の多くは過勞のあとを見せて居る。組々の人数は少くて、決して二十人を越えない。そして、教師は授業をするのにも、仲間同志のやうに寛ろいだ態度でやるから、凡ての生徒に個人指導をすることが出来る。教師は相談相手であり道案内であり、又友達でもある。生徒は十四歳から十八歳迄の男女兒で、各種製造所、會社、商店等に雇はれて居るものである。そして一週四時間づつ授業を受けて居るのである。

豫科……參觀者は、豫科教室に入ると、こゝには新入生が居る。こゝでは職業顧問が居て、生徒を助けて各自の嗜好や趣味を見つけさせて居る。これは、學校が彼等に與ふる教科を適當に選擇せしめる準備である。で、この組では、教師は生徒と會談しつゝ、その好き嫌ひや、天賦の能力や、傾向などを吟味するのである。又生徒は既得の教育の程度を檢べられ、試験的に、しかし、きつぱりと將來の計畫を立てる様に勵まされる。生徒等は、學校内の各工場を觀、數多い職業について、適不適、將來の見込などを比較研究する。そして、その中から各自の好む所を選擇するのである。教師と相談して、決定的選擇をした後は、生徒は各自の選んだ普通の組に編入せられる。

男生作業室……他の室に行つて見ると、男生はせつせと電線で働いて居る。これは、電鈴の附け方、修繕から、報知機、出火盜賊警報機、電燈などの取付けを學んで居るのである。これ等の生徒は、電氣技師になる

ので、彼等の中には、既に電氣工場に雇はれて居るものも多い。又他の室では、生徒等は、家具の製作、修繕をやつて居る。模型の家の骨組や、實物大の階段をつくつたり、筆筒を磨いたり、其他大工、指物師としてやらねばならぬ様のことを何でもやつて居る。これら實際的の練習により、彼等はいろいろの道具や繪圖面の使用法を習得し、のちのちその熟練を實地に應用する準備をするのである。又他の室では、他の生徒達が、印刷、機械作業、金屬板作業、鉛管細工、衣服仕立などを教へられて居る。

女子職業教室……女生は、帽子の製造裝飾、圖案模様、衣服の裁ち方作り方、刺繡、新しい意匠の凝らし方などをやつて居る。先の方には、まるで春期大掃除も同然な室がある。白い帽子を被つて、前垂をつけた少女達が床を掃く、ストローグを磨く、壁を洗ふ、寢所を拵へる……凡て腕のある主婦として、棲家を家庭らしくするに必要なことは皆やつて居る。これ等の仕事は済むとお料理をして居た少女達が、食堂に御馳走をならべる。それから食器を洗つたり、必要な洗濯をしたりする。この實踐室に於ては、家事は技術でもあり又快樂でもある。

商業教室……事務練習室では男生女生共に、簿記、騰寫版、書類整理方、事務處理方、簿記、速記、交換機の扱ひ方等の授業を受けて居る。

學科……二時間は生徒の選擇した職業上の事業、即ち實科で、残りの二時間は學科(普通の學問)を授けられる。こゝに行つて見ると、經驗のある教師が、米國の理想、歴史、經濟、勞働法、公民學、手紙の書き方、商業算術、國語、倫理、衛生等を生徒に教へて居る……それ等は皆生徒の實際生活と關聯せしめて授けて居る。

會合……最後に生徒の會合の様を參觀すると、こゝでは、生徒達が、俗歌、愛國歌などの唱歌をうたつたり、上手な者が出てうたつて聞かせたり、或は各種産業の代表者、州産業委員、社會事業に従事する人々、政府の役人などから講師を頼んで、最も生徒の利益になるやうな題目を選んで、講演をして貰ふ。參觀者は、この時に於て、校内に瀾漫する共同の精神、愉快な友誼を、最も容易に感知することが出来るのである。紐育補習教育當局者は如上の補習教育施設綱領に左の如き宣言書を加へて小冊子となし雇主に配布して居る。

雇主諸君に一言

補習學校が、州民に依つて定められたる學校の目的をよく達し得るか否かは、雇主として諸君がよく學校と協力して下さるか否かによつて定まる所が多いのであります。過去數年間、まだこの學校が小規模で、殆んど任意的に行はれて居た時に於て、諸君は、何等直接明瞭な利益を得ることなく、毎週四時間づゝ諸君の雇人を遊ばせなければならぬと云ふ事實が明白なるにも拘らず、殆んど例外なく喜んで協力して下さつたのは非常な助力でありました。然し諸君には先見の明がありました。學校が諸君の使用される少年少女に對し、彼等が諸君の爲になしつゝある特殊の仕事に於て一層能力を發揮し得る様、その訓練に特別の努力をして居ること、従つて結局それは諸君の利益になるのであると云ふこと……これ等のことは今や諸君もよくお分りになつたことと思ひます。猶此上の協力には次のやうなことをやつて頂けたら誠に結構に思ひます。

一、諸君の雇人が通學する學校を參觀せらるゝこと。學校は諸君のお出でを歓迎します。若し産業の形勢などにつき生徒にお話をして下さるなら一層結構に存じます。

二、學校と職業との密接なる提携を計るため、學校教師が諸君及び諸君の會社を訪問することを許さるゝこと。

三、學科課程に附け加ふべき科目ありとお考への時、或は課程の變更を必要と認めらるゝ時は、その旨御申し出で下されたきこと。諸君の御意見は生徒を利し、ひいて諸君を利するわけであります。

四、諸君の備せせらるゝ少年少女労働者に對し、通常の賃銀を支拂はれたきこと。而して昇進の價値あるものには昇進を惜まず、又彼等が義務的に學校通學を強ひらるゝため、他人よりも不利の地位に立つことのないやう注意せらるゝこと。

五、生徒に通學を勵行せしめ、出席係と協力せられたきこと。各學校には出席係があり、各係は出席を強制し、法律違反者には相當の手續をとることを任務として居ます。出席係は諸君の御助力と御好意とを感謝するに相違ありません。

六、雇入の御希望あらば、貴地補習學校の就職係に申し込まれたきこと。

七、この小冊子を熟讀せられて、學校の範圍目的をよく記憶せられたきこと。不明の點は補習教育局長宛、或は學校長宛御申出でになればいくらでも御答へ致します。

紐育市補習學校教授科目は

男女共通として

實科

商業算術

タイブライタ

事務實習

書類整理法

商業の方法

電話交換機

學科

讀方

手紙の書き方

綴字法

産業史

米國史及市民學

經濟

個人衛生

公衆衛生

男女各別科目として

男生の部

木工術、指物細工

實業教育講演集

筆筒類の作り方

模 型 製 作

家具の仕上げ

一 般 木 工

金屬板製作

機械工場實習

電線及取付け

用器畫、建築用圖面

印 刷

青色版讀方

男子衣服意匠

女生の部

縫ひ方、裁縫

婦人帽子小間物類製作

機械の動かし方

女子衣服意匠

造 花

商業圖畫(女子服裝に應用せる)

家 事

割 烹

洗 濯

以 上

最後に私は唯一希望を述べて置きたいのであります。我國も昨年實業補習教育令が改正になつて、一大進歩を爲したのであります。私は尙是は義務教育に致さなければならぬと云ふことに就て主張したのである。さうして今は其時が我國にさし迫つて居ると考へるのであります。是は三つの根底から此論を立てるのであります。

理論上より補習教育の必要……國家は國民によりて組織せられて居る。故に國家は近き將來に國民たるべき児童及青年に、國民として然るべき教育を授けねばならぬ、而も其機會は均等であらねばならぬ。然るに、少數の富貴若くは知識等の天恵あるもの、爲には、中學校、高等學校、大學等の教育機關を設けて、之を教育正系と名付け外に中等程度の實業學校や實業專門學校を教育傍系と名づけ、是等各學校の聯絡問題が解決されるれば、所有る教育問題は解決されたかの如く思はれ、大多數の小國民は、六年乃至八年の初等教育から直に社會に送り込まれ、生存競争の荒波にもまれ、二十一歳になれば兵役に服さなければならぬ。これでは正義人道に叶ふとは云はれぬ。教育上の機會均等とは云はれぬ。國家教育の目的は、學者や紳士の職業に従事するもの、みを教育するに非ず、農工商所有る職業に従事するものに、其職業に必須なる知識技能を授く

るの機會を均等に與へねばならぬ。小學教育を終り中等學校に入學志願せぬから、それは其儘打つちやつて置いてよいと云ふ譯のものでない。小學卒業後、滿十八歳迄頃が青年の危機である。其間を國家が放任して置くべき筈のものでない。然らば如何致してよいかと云ふに、それには義務補習教育が最も適當なる方法である。之れが義務補習教育必要の理論である。

經濟政策の上より補習教育の必要……理論を離れ、國民經濟政策の點より補習教育は必要である。富國の道は殖産興業に待たねばならぬ。それには學理も必要であるが、應用が最も大切である。學理は應用されなければ、經濟上からは何等價值のないものである。大學や専門學校で、學者を養成することは必要であるけれども、之を殖産や興業に應用する所の國民大多數が、無教育の爲に、之れに不適當であるならば、學者の貢獻は國民幸福の爲には何にもならぬ。小學校を卒業した丈で、衣食の爲に其日々々々を働き送つて成長した職工に、精練工業の期待は出來ぬ。粗製濫造は、我が商工業者の不徳に由來するもの、如く、我れも外國人も思つて居るけれども、あながちに不徳に基づくのみ云はれぬ。不徳よりは寧ろ無教育に基づく、不熟練の職工使用に原因すると思はれる。若しも獨國に於けるが如くに、義務實業補習教育を勵行したなら、數年ならずして我邦の生産品に天地隔世の感あること、思はれる。

社會政策の見地より補習教育の必要……今は世界各國が労働問題に悩まされて居る。我邦に於てもストライキやサボタージュやと日々各所に何かかにか起るやうである。政治家は今の問題を無論解決せねばならぬが、近き將來の問題を解決して置かねばならぬ。近き將來の労働者に相當の教育を施し、職業に對する理解あらしめる様に努めねばならぬ。それには補習教育が最も適切である。小學卒業後、假令一週一回宛で

も、教育者の監督の下にあらしむることは、監督丈でも利益になる。獨逸かあれ丈の大戦に、世界を敵にして、あれ丈の年月を支へたも、亦戦敗後一大革命が起り、随分苛酷なる媾和條約に屈服しても、尙ほ國民的統一を失はず、労働問題などは却つて戰勝國の何れよりも靜穩であると云ふことは、全く義務補習教育の行き届いたお蔭である。獨逸商工業の勃興、進歩發達は一に補習教育の力であると云はれて居る。獨逸國力の恢復は案外早いであらう。それは補習教育が普及して居る爲に、世界何れの國よりも優秀なる労働者を作出して居るからである。普通選舉は早晚我國に實施されるものと思はねばならぬ。之れが準備には、國民義務補習教育に如くものはない。それは理解なき國民に、選舉權を與ふる程危険のことはないからである。

社會思潮の基礎

社會思潮の基礎

社會思潮の基礎

東京帝國大學教授 桑木嚴翼君講演
文學博士

第一回

今度此方で現今の思想問題に關する事を私に講演しろと云ふことであります。私の始終研究して居ります事は餘り實際の方面に關係が有りませぬ、諸君の主にして居られる事と稍々縁が遠いやうな所があるかも知れませぬ。尤も大體に於ては教育と云ふやうな事にも關係があるから、無論全く關係のない譯でもありませぬが、併し少しく立場が違ふ所があるだらうと思ひます。それで私の申上げることが或は諸君に對して直接關係が少いやうな事が多くはありはしないかと云ふことを恐れて居るのであります。併し萬一諸君自身の御參考にも多少なることがあり、或は又事業の上にも關係があれば仕合せと思ふて居ります。豫め通知しました題は極めて簡單にたゞ一部分の意味を示すに過ぎないと思ひますが、大體私の申上げます趣意は、思想問題を自分の専門の哲學の方と結付けて御話をして見たいといふことであります。故に本來が理論的である思想問題を殊に理論的の方面に結付けて御話することになるのであります。併し私はそれが寧ろ思想問題の適當な解釋の方法であると云ふ考でありますから、多少それに就ては辯解することが出来ないでもない

と思ひます。大體今日の問題は思想問題と哲學との間に密接の關係のあると云ふことを申上げやうと思つて居ります。それで私の講演は今日と明日とになつて居りますが、詰り明日が主なるもので、それには思想問題の内容に入つて、主として社會思想問題と云ふことに關係を付けて御話をする積りであります。或は文化の問題に就ても述べたいと思ひます。即ち先づ大體三章位に分れる積りであります。今日が二時間で一回、明日が二回分と云ふ積りであります。それで今日先づ申上げることが或意味で序論であります。併し時間が餘つて居たならば多少内容の方をも申さうと思つて居ります。即ち前述の通り大體は思想問題と哲學と云ふ關係のことでありませぬ。

第一思想問題と云ふ言葉の意味から研究して見なければなりません。思想問題と云ふ言葉は今ではもう可成り耳に慣れて居りまして、慣れ過ぎて居る位でありますからして、新しく紹介する必要はありません。併し慣れ過ぎて居つて、却て濫用されて居ることがありはしないか、私は或は場合に依つては誤解がありはしないかと思つて居ります。若くは場合に依つては之を説く人が謂はば多少越權と云ふやうな分に過ぎて居るやうなことがありはしないかと思ひます。説くべからざる人が説いて居るといふやうなことがありはしないかと思ふ感があるのであります。一體思想と云ふことは申すまでもなく考へると云ふことでもありますからして、思想問題と云へばマア平たく云へば考へる問題であります。考へると云ふことは理論的の働であります、實際の働ではない。考へたことは實行にも移りますが、然し實際と違ふ譯であります。連結はあるけれども働としては違ふのであります。それ故に思想問題を取扱ふと云ふときには、考へると云ふことを本分として居る方から出ることでありませぬ。實際の事柄に直接に従事して居ると云ふ方は、思想問題に對

しては無論考へても宜い譯であります。併し他に教へ他を導くと云ふ資格は無いのであります。さう云ふ人は不斷から考へること、直接若くは間接に關係の有る仕事に従事して居る人、さう云ふ人に寧ろ教を乞ふべきものである。考へることに従事して居ると云ふのは、學問をやつて居ると云ふ人が勿論其の一であります。考へるが、宗教家とは或は文學者とか藝術家とかと云ふ者は無論のこと、まだ名を挙げればそれに類したものが多少ありますが、さう云ふやうな人々が考へることに直接若くは間接に縁の深い人でありませぬ。之に反して實際の實業に従事して居る方は、諸君は實業の教育に關係して居る者でありますから、教育家と見て居るですが、即ち教育家でなくして實業家であるとか或は軍人とか政治家とかと云ふやうな人々は無論斯う云ふ人でも人間として考へないことではない、考へることは考へる、廣い意味に於てはそれは誰でも考へない人ではありませんが、所謂思想問題を考へる方のことを専門として居ることには稍々縁が遠いと言はなければならぬ。でありますから、思想問題の話を教育家からして實業家が聴くとか、政治家が聴くとか軍人が聴くとか、と云ふならば尤らしいことでもあります。然るに逆に政治家或は政略家軍人、實業家の方から教育家や學生等へ思想問題の講義をするやうなことがあつたならば、是は詰り孔子に論語を説くとか釋迦に説法と云ふやうなことになる譯であると思ふ。

元來思想問題と云ふものは或時代には餘り人に喜ばれて居らなかつたこともある。思想問題と云ふ語は一體何時の間にか出来た語であつて、適切に例へば西洋の言葉で何と云つて宜いか一寸困る、マア意味は大體何處の國にもあるであります。思想問題と云ふ語が日本に於て吾々が始終平易に輕々に使つて居るやうに、それでは何かそれを翻譯して見やうとか、英譯して見やうと云ふときに、何と譯して宜いか困る。マア

意味は無論或思想に關する問題と云ふことで宜い譯であるが、さう云ふ問題が何時の間にか日本にも言及されて出來て居りましたか、初めは多少さう云ふやうなことは一部分の人々から嫌はれて居つた。思想問題と云ふものは餘計なことを色々言つて種々詮索をしたり何かして害が有る、教育家などには殊に思想問題などに首を突込むと云ふと、自分の適切な本分を忘れてしまふと言はれて居つた時代があつたのであります。併し近頃さう云ふことを言ふ人は殆ど無いのみならず、前に申したやうに實際家は矢張思想問題に關して適當に處分をしなければならぬと云ふやうなことを誰に向つても云ふやうになつて來ました。思想問題と云ふ言葉が夫程に普通に行はれるやうになつて來たのであります。其處は大變に都合が好くなつて來た。同時に今申す通り餘りに多くの人が使ひ過ぎてしまつて、思想問題は誰でも口にするのが出來るものであると云ふやうな感を今度は一般に抱かせるやうになつてしまつた。随つて自から健全な考を主張すると思ふ人に對してそれに違ふことを言ふと、叱つたり抑へ付けたりすると云ふやうな場合も起るやうになつて居ります。如何なる事でも人間の働である以上は、それは誰でも喙を容れる權利はありますが、併し多少又専門的の素養を要するのであります。其素養のむづかしいと誰でも考へて居るものが澤山ある。例へば自然科学などの事柄に關しては、一般の人々分らないから大抵の人が喙を容れないで、科學者の言ふことを忠實に聽取るのであります。それが解れば大變喜ぶし、萬一解らなければ、是はどうも自分がまだ素養が十分無いからであるどうも矢張彼れだけの事も解らないのであると云ふやうに考へるのが普通であると思ひます。中には少し押ししの太い人、圖々しい人があつて、もう少し解るやうに言ふことが出來ないのは學者が悪いのだと云ふ人がありますが、概して言へば自然科学に對して解らないと云へば、それは罪はないと思ひます。或は自分の考

へて居ることに大變違つたことを言はれても、それを信じないこともありますし、又場合に依つては是は自分の方が悪いのであると云ふやうにして諦めることもあり得ます。即ち言換へて見れば、多くのさう云ふ科學的問題に對しては専門家の仕事を認めることになつて來て居ります。所が事柄に依るとさうならないことがある。例へば政治上の問題に對しては割合に専門の事は認めない、誰でも喙を容れる權利があるやうに思つて居る。一國の總理大臣の仕事を見ても、田夫野人が或は勝手にそれを批評するやうな場合がある、随分露骨に亂暴に批評することがある。外交上の事柄に對しても、自分が出たらどんなに旨くやるかと云ふやうな調子で以て論斷することも随分あります。かく政治上に關しては或度までは専門的の修養は要らないやうに感じて居る人が随分あるやうに思ふ。藝術の批評などに於てもさう云ふことがあります。大家の描いた繪でも詰らぬとか何とか大にけなしたり何かすることがあり、甲乙の各々自分の意見を主張して下らないことがある。さう云ふやうに政治とか藝術とかと云ふ方面に關しては、素人の論が中々自信力を有つて言はれて居ります。斯の如きことが思想問題に關しても矢張往々にしてあるやうに思ふ。

思想問題と云ふものはどう云ふ専門の人であらうか、それは自分が世に處する上に於て自然に考へる一種の人生觀とか世界觀と云ふものから來るものであると考へるから、實業上で成功した人も一角の人になれば思想問題に關して中々學者に説法するやうなことをしても願ひない。政治界で以て成功した人、軍人として立派に名聲の揚つた人が矢張思想問題に關して第一の賢者となることが出來るやうな氣分になつてしまふことが多いのであります。そのみならず又普通の人でも丁度前に述べた政治藝術に關して勝手に批評が出來るやうに、大體思想問題に關しては、自分の意見が定つて居つて、勝手に色々な人を評することが出來る場

合が多いやうに思ふ。是は或度までは當然のことであつて、其處に又思想問題の興味の有る所もあるのではあります。即ち何人にも直接に關係の有る事でありますからして、随つて多少の意見を用ゐると云ふ譯であります。併し若しそれが誰でも譯なく出来るものであるならば、それは一方から云へばそんなにむづかしい問題として、又色々意見が出ないで大體定つてしまふ譯であります。全く常識で定まること、全く人間の普通の感覺作用からして來るものであるならば、そんなに疑問がない。例へば食物であるとか、寒い時に衣服を着るとかと云ふやうな衣食住の問題に關しては、色々細かいことは人々に依つて違ひ、國々に依つて風俗も違ひますけれども、大體に於ては一致して居る。さう云ふ風なものであるならば思想問題に於てもそんなに異論がなく出来る譯であります。併しさうでなくして可成り反對の意見なども出来ることがあります。一方は誰でも良いと云ふものを一方は誰でもいけないと云ふ、それは丁度政治や藝術に於て見ると同様なことが少くないと思ひます。斯様に人々の意見の違ひが起ると云ふのは、其處に何等か専門的の養を要することを意味して居るものであると見ることが出来るであらうか、さう見て差支ないやうに思ふのであります。政治は誰でも喙を容れることが出来るけれども、それでは吾々が直ぐ政治界に立つて自分の今迄言つたことを悉皆實行し得るかと思ふと、それは出来る人があらうが、多數は出来ないと思ひます。藝術であつても勝手に大家の作を批評はするけれども、書いて見るとさうはいかない。さうして見ると自分の今迄の批評の必しも十分でなかつたと云ふことを察することが出来るであらうと思ふ。思想問題に關しても考の問題であると云ふ限り、矢張考へると云ふことに直接間接に最も深い關係の有る人は之に對して最も權威ある意見を出すとしても宜い譯である。それが今申した通り多少反對のやうな傾向になつて居ると云ふことは、第一

には思想問題が餘り流行し過ぎた一つの弊害であると云つても差支ないやうに思ふのであります。それ故に思想問題と云ふ語に對しては何だか餘り耳について反感を有つやうな場合さへも起り得ると思ふのであります。さう云ふ風に先づ第一に思想問題と云ふ語の解釋を定めて進んで行かうかと思ひます。

扱て斯様に思想問題を幾らか吾々の畑のものとして御話を段々して行きたいと思ふのであります。お互に斯う云ふことを研究して見やう、他所の人が色々の事を云ふけれども、それはマア其局外者の意見であると云ふやうにして、何もそれを排斥する譯ではありませんが、無論他山の石で參考にはなるけれども、併ながらお互が先づ考へて行かなければならぬものだと思ふ風にして、問題を密接のものとして考へて見たいと思ひます。

二

所で此思想問題は考の問題である、第一に思想問題を構成する其材料が決して事實から直ちに來るものではないと云ふことを認めなければならぬと思ふ。人が物を考へるときには無論事實を材料にする、唯漠然と考へると云ふことは出来ない、漠然と考へて居るやうに見えることも、實は過去の經驗が材料になつて居る。斯様に人の思想は事實と離れて居るものではありません。事實と離れたる所の思想は是は空想であると言はれるのであります。併ながら唯事實では思想にならないと云ふことは、是は注意すべきことであらうと思ひます。事實と思想との間には多少の距離がある。事實を材料にしても事實を適切に結付けたらなければ考にならない、言換へて見れば事實に對して何か適切なる方法で判断をする、批評をすると思ふやうなことがあつて、そこで思想となるのであると考へなければならぬ。そこで此思想と云ふことが假定せられる限り、事實

ばかりを主として居る所の實際家の方からして多少毛嫌ひをされるやうな結果も生ずる譯であらうと思ひます。即ち思想は事實ではない、事實に對して多少手を加へたもの、隨つて事實に重きを置く所から云へば餘計なものが入つたと云ふことになる。それが事實の助けになるならばそれで宜いのですけれども、何が加はるか分らないのでありますから、Xでありますから、其Xが必しも事實と並行したものではないとも分らない、それ故に事實家の方から云ふと其處に餘計な物が入つたと云ふやうな感を與へて行く場合があると思ふ。さう云ふ所からして一體に思想と云ふものは事實に取つてなり又總ての場合に於て、危険なものであると思ふ。是非難を受けることのあるのも亦免れ難い運命であると考へ得ると思ひます。是は私は嘗て屢々論じたことでもあります、一體思想問題と云ふものは本來危険なものであると云つて宜いと思ふ。危険性を帯びたものである、特に或る場合に危険思想とか、思想が危険だとかと云ふけれども、危険思想などと云ふものは別にやうな少しく「パラドックス」的のことを言ひたいのであります。

何故さうであるかと云ふと、既に私の説を御覽になつた方もあるかも知れませぬが、二つの點からであります。第一は一つの思想は他の思想に對して危険であります。甲乙二人の人が考を有つて居る、それがピツタリ一緒になることはないのであります、甲の思想が徹れば乙の思想は幾らか破らなければならぬ、即ち乙の思想に對しては甲の思想が危険なものである、それが若し一致するならば甲乙二つの思想でないのであります、全然一致する場合はない、或は一方が迎合して行く譯であります、さうでなければ多少違ふ譯であります、此處に危険性が入つて居ると云つても差支ないのであります。第二は思想は社會に對して危険であ

ると云ふて宜いと思ふ。此處に申す社會と云ふのは社會の實際の状態を謂ふ。今既に述べたやうに思想は事實ではない、實際ではない、實際に關する考、實際に關する批判であります、判断であります。それで事實を或別の標準からして善いとか悪いとかと云ひ、實際事實の向くべき途を教へてやる、其處までまだ行つて居ないと云ふことを其處で告知させるものであります。概して人は考へる方が先に進んで行つて、實行が之に及ばないことがあります。考へることが後になつて實行が先きになつて居ることは不言實行とでも云ふのであります、さう云ふ人もそれは無いことはありませぬけれども、併しさう云ふ人は概して少いと思ふ。大抵思ふことが出来ないと思ふのが普通であると思ふ。又或は自分の考へて居る通り實行が出来たと云つて居る人は、それは進歩の止つた人である。もう是で望み事は更に無いと云ふことを言つて居る人はそれでお仕舞ひであります。まだ斯う云ふ事をして見たい、ア、云ふ事をして見たいと云ふので生命があるのであります。でありますから、考の方が實行よりも先立つて居ることは、是は進歩する人に取つてはあり得べきことであらうと思ひます。此點から見ると、思想は事實に對して今迄の状態では甘んじてはならぬ、もう少し違つた事をしなければならぬと云ふことで、始終人を動かして居る所のものであると云つて宜いのであります。でありますから現實の状態を以て先づ是で宜いと思つて居る人に對しては五月蠅いことを言ふのである、厄介なことを言ふものである。折角出来上つたものをももう一遍壊して新しくしろと云ふ、壊さないまでももう少し修繕しろと云ふのであるから、全體壊さないまでも一部分壊す、何處か直して行けと云ふのでありますからして、其點に於て其儘で維持して行かうと云ふ人に取つては五月蠅い厄介なことを言ふものであると考へなければならぬ。さう云ふ風に考ると、思想は社會に危険と云ふことを意味して居ると思ふ。要するに思想は仲間の他の思想に

對しては危険であるし、又思想の現れて居る社會に對しても危険なものであるとも言へると思ひます。それ故に自分の考で以て押徹して行かうと云ふ人は違つた思想を許さない。又世の中を極く無難に平易に治めて行かうと云ふ様な人にとつては色々の異説の出ることを喜ばないと云ふ様な傾向もある譯であります。そんなやうな所からして此處には特に思想問題と云ふことが嫌はれたと云ふ様な形跡があると思ふのであります。斯う云ふ風に考へて見ますと、今日では少くなつて居りますが、併し一時随分問題であつた所の思想の危険性と云ふやうな問題は是は當然のことである。危険でなくなつた思想は思想の働をしないものである。それは唯實際の状態の後に附いて行く所の實際家に阿諛する所の思想に過ぎないものであつて、思想の效能を爲さないものであると云ふことになる。確か諫臣五人あれば國治まると云ふことがあるやうであります。國に對しては忠諫すると云ふものが必要であると云ふやうな意味に若し思想があるならば、此思想はどうしても社會の實際家とは違つたものでなければならぬ。それを諫めないで唯御尤もであると云ふ思想であるならば效能の無いものである。それで思想が思想の働をするならば、一方の人の考へて居るやうな、危険性は是は免れ難いものであると考へて宜いと思ひます。斯様に言ひますが、併し是は實は多少詭辯的の所もあるのであります。此處に危険と申すのは果して本當に人々の恐れて居るやうな危険であるかと云ふことも、又考へるべき所だと思ひます。若し世の中の進歩發達と云ふことを望む人であつたならば、斯様な意味の危険は危険とはしないで、寧ろさう云ふことも必要なことと思ふのでありませう。さう云ふ危険は普通なことである。凡て人が新しい事業をする時には多少冒險的のことがある。船に乗つて行く時には何時船が顛覆するかも知れない譯であります。さう云ふ危険を冒して行くけれども滅多に顛覆するものでないと云ふ所から

してかまはずに行く。同じやうに多少危険を冒すことは避くべきことではないと云ふ考が根柢にあるからして、斯の如き危険は本當に危険とは考へられないと思ふ。寧ろ場合に依つては其危険と云ふものが反對に斯う云ふ思想を止める方に餘計あるとも分らないとも考へられる。即ち進歩發達と云ふことが多少の危険性を伴つて居るからと云ふことで止めると、其の止める方に却て危険性が伴つて居ると云ふことが言へる。子供が危い事をするのはいけないと止めて居れば、子供は極く平凡な生活をして行くが進歩發達を害することになりはしないかと云ふことが起る。是は唯そればかりではない。もう一步進んで考へますと最早古くなつてしまつて今日に於ては適切ではない。過去に於ては功勞があつたけれども、今日には適切ではない。謂はゞ過去には美味い御馳走であつたけれども、最早生憎腐つてしまつた。腐つてしまつたものを飽迄も御馳走であると云ふて食べさせると云ふやうな、さう云ふことと同じ結果になりはしないか。さうなるとまだ能くはつきりと試みないものを食ふのも危険であるけれども——場合に依つては危険なことが確にあるけれども、みす／＼腐つた物を食ふのも危険になることがあります。新しい思想を持つて行くと云ふことにも危険がないとも限りませぬが、併し舊い思想を以てそれを一々抑へ付けやうと云ふ方にも腐つたものであると云ふ危険がないとも限らない。さうして見るとどつちにも危険があるのか分らないと云ふ虞が生ずると思ふ。

三

そこで其問題を決める爲には、此處に思想に依つて事實を批評すると申しました、其批評と云ふことの意味を考へて見る必要があると思ふ。批評と云ふことは普通人々の考へて居る所では、先づ自分の一つの標準を立て、それで以て人の事柄を批評することでありませう。或一定の標準を立て、それを以て外界の事物の

是非善惡を判別すると云ふ働きを理解して置く、例へば繪を批評すると云ふ場合に自分が斯う云ふ風に繪を描くべきものであると云ふ一の標準を立て、置いて、南畫なら南畫の法則を學んで、繪と云ふものは斯う云ふ風に描くものであると云ふことを、自分の心に考へて、それで以て此處に現れた一の日本畫なり油繪なりを批評する。さうすると事々物々自分の批評の標準に合はないことが澤山ある。それで是は詰らぬと云ふやうに論ずることがないとも限らぬ。さう云ふ風の批評は批評者が批評して居るものを超越した立場から起つて來るのであります、吾々は通常超越的批評(判)と呼んで居りますが、斯う云ふ批評は随分多いことと思ひます。そこで今申す通り明かに意識してしない場合も随分あります、唯好嫌ひで印象批評と云ふやうなこともあります、即ち是は自分の趣味に合はないからいけない、是は自分の豫て考へて居る法則に合はないからいけない、と云ふ風に定めてしまふ批評の仕方、是で以てやつて行くならば、例へば此處に一つ新しい思想が出來た場合に、自分の今迄習つた標準で之を批評して行くことになつたならば、其結果は超越批評になつてしまふ。それで新しい問題が何故に起つて來たか、新しい思想が何故に起つて來たか、或は實際世人がさう云ふ新しい思想を要求するやうになつたのではないかと考へることが無くなつて、唯思想は斯うあるべきものである、と定めた標準で何處迄も押徹して行かうと云ふ所の結果になる。是が即ち超越的批評であります。斯様な方法でやつて行くと云ふと、詰り融通の利かないことになつてしまつて、即ち一度宜かつたものは何時でも宜いと云ふやうなさう云ふ弊を生じて、其方から生ずる危険性を伴つて來ると思ひます。尤も是は唯舊いものから新しいものを評すると云ふばかりでないものであつて、或一つの新しい思想に關してもさう云ふことが無論言へる。唯自分一個の理想から一の思想を考へる、それで以て事々物々を批評するとなれば、

是は現在の状態に對して矢張超越的立場を執るのでありますから、此場合に於ても無論正當を得ないこともあるでありませう、さう云ふこともあり得る。どつちからでもそれは言ひ得るのであります、兎に角さう云ふ風な批評を名付けて超越的批評と云ふのであります。此結果は所謂水掛論になつてしまふ。第三者が聴けば水掛論になつて終つてしまふ。どつちが宜いか分らぬ、各自が勝手なことを言ふて居ることに終つてしまふと思ふ。之に對してさう云ふ弊害を避ける爲には、斯の如き超越的の立場を執らないで批評する所の人々が批評をされるもの、中に自分の身を置いて考へる態度を執らなければならぬ。平たく言へば向ふの立場になつて批評をするので、即ち之を内在的批評(判)と云ひます。例へば繪を評する場合に於て油繪を批評しやうと思ふならば、油繪の標準を持って來て批評しなければならぬ。日本畫を批評しやうと云ふならば、日本畫の標準を持つて來なければならぬ。日本畫の新しい畫を批評するならば、新しい畫を標準として批評しなければならぬ。暫く自分の立場を捨て置く、それは暫く捨て置いて向ふの者の中に自分の身を置いて批評して行く方法であります。斯様な方法が即ち内在的批評と云ふ語を以て現はすものであります。

今思想を評する場合に於てもさうでありまして、或一つの思想が唱へられて、自分が從來さう云ふ思想には訓練を得て居らない、併ながら自分の事は暫く捨て、又自分の好嫌ひもそれは暫く捨て、さうして先づ能く向ふの思想を理解して見て、どう云ふことを説いて居るか、又どう云ふ時勢と關係を有つて現れて居るか、と云ふことを考へて見る。即ち向ふの思想の内部の要素と外部の要素と分析して考へて見る。即ち思想を能く分析して見ると、其思想は斯う／＼云ふ要素から成立つて居ることが判るし、又是等は斯う云ふ時代の影響に依つて生じたものであると云ふことが判る。夫等の點からして向ふの思想の意味を能く理解して、さう

して自分が假にさう云ふ思想を説くやうな位置に在り、それ丈の準備を有つて居つたらどうなるかと云ふやうに考へて見て居つたらどうなるか、と云ふやうに考へて見て、更に其論を進めて行く。是は矢張其思想に對する内在的批判であります。さうすると自分は今日今迄の立場から言へば、さう云ふ説を言ふことが出来ないが、成程向ふの見方にすれば、一理あるなど云ふことが判るのであります。自分は最早其思想を説く人ではないけれども、併ながら他の人がそれを説いても、それには一理あるか知らぬ、或は自分の考は此處で以て終つたものであると云ふことにまでも思を及ぼすことが出来るか知らぬ。丁度自分は文人畫を好きだけれども、油繪は油繪として宜い、唯自分の趣味に合はないけれども、綺麗であると云つて世間の人が大變歎ぶ所を見ると、斯う云ふものも藝術と認めて宜い、或は又考へ様に依つては自分の趣味は過去のものであると云ふやうなことにまで疑ふことが出来る。それ位に公平に謙遜に自分の考を見ることが出来るのであります。さう云ふ風にして行くのが是が此思想の内在的批判と云ふことになるのであります。此批判を用ゐて行きますれば舊い思想を有つて居る人が新しい思想を批評する場合にも、それ程頭を悩めることはない、又新しい思想を唱へる人も其人は舊い思想を有つて居る人を納得するだけの準備が出来ると思ひます。又他の思想を學ぶとしても唯故なく一方の思想を善いとするものが無くなると思ひます。

それで斯う云ふ所から大勢に順應すると云ふ意味が理解されると思ひます。世の中には順應すると云ふことが嫌ひであると云ふ、順應することは卑屈だ、寧ろ世の中に色々な風俗は流行して居つても飽きでも信じて居る所を守つて行くことが男らしい態度であると云ふ人であり、無論自信を有つて居るときにそれを守ることは悪くはありません。でありますから大きな勢だからと云つて自分の嫌ふことを尤もだと云ふこと

は必要はありませんが、順應と屈從と云ふことを同一にすることは出来ないと思ひます。順應と云ふことは唯媚びて行くのではないと考へて行く必要があると思ひます。即ち世の中で勢を得て居る所のものが單なる一時の流行であると考へてしまふと、順應と云ふことが無意味になつてしまふ、流行を追ふことになつて居る人などが色々流行の衣服を着たりするやうになつてしまふと云ふ、斯う云ふやうに見て、大變悪く考へられますけれども、一體に世界の人々が人間である以上は大體同じやうな心持を有つて居るものであります。さうして是が色々歴史的に研究して見ると、國々に依つては違ふ所もあります。國々ばかりではありませぬ、人々に依つて千差萬別であります。併し時代の精神が大體に於て四方に充滿して居ることがあるとすると、識らず知らずそれに化せられることは、人間として普通のことであるから、順應したからと云つて無理なものでないと考へても宜い譯であります。そこでそれを逆に出ることは片輪になることになり、流行は考へに依つては悪いことではない、流行を追ふことは悪いことか知らぬ、吾々が衣服を着て居る、どんな衣服を着ても宜いかと云ふと、さうはいかないと思ふ。裏返しに衣服を着て歩いて寒さをよけるには同じではないかと云ふやうなことは言へないと思ひます。吾々が印絛纏を着て歩いて差支ない譯だけれども、どうも工合が悪い。矢張洋服なら洋服、日本服なら日本服、チャンと一體の風の出来て居るものを着て居る方が、詰りそれが人の眼に立たず心持も好いや、な風になつて來ます。即ちそれが一の流行の結果であり、それが併し段々に變つて行くかどうか分りませぬか、能く世の中に改良服と云ふことを言ふけれども、矢張それが旨く出来ない、改良服よりは寧ろ洋服の方が宜いとか、或は筒袖で袴の方が宜いと云ふやうなことになつて、變な改良服を拵へて見て、子供には着せるけれども、自分には着はしない。餘程

風變りの人は着て歩くか知れませぬけれども、先づ着ない風であります。人の着るのを待つて居ると次第にさう云ふ風になつて着て居る。併し段々大勢の人が着てしまへばさう可笑しいこともなくなつて來るので次第に流行るやうになつて來ます。でありますから流行を追ふと云ふことを大變悪く言ひますけれども、其處は矢張人間の心理状態から云ふと許せることもありませぬ。思想もさうであつて突飛な意見が初めて出たときにはそれを歡ばない人もあるのでありますけれども、識らず知らず色々の意見が變つて來て、世の中の大勢が變つて行くのであります。それを變つて行くのが残念だと云ふので、自分の昔習つたことが無用になつて行くのだと云ふことで憤慨して行く態度は、今日に於ても丁髷をつけたり社袴を着けたりすることと同じであると思ひます。大勢順應と云ふことを能く人は反對しますけれども、順應と云ふ語の意味を知らないのであつて、さう云ふことを口にして居る人の方が、實際に於て實行上に於ては順應をし過ぎて居ることがあります。それでさう云ふ點から考へて見ると思想に對して適切なる批判を行へば、之に依つてどう云ふ事が一體順應であるかと云ふことも判る譯であると思ふ。

其點に對して然らば何が標準となつて順應と云ふことが出来るかと云ふことを言ふと、此處に私は思想問題の根據となる所を考へることが必要と思ひます。斯う云ふことが本當の流行である、斯う云ふことは一時の流行であるに過ぎない。是は消失せしめざるものでであると云ふやうなことを區別する爲には、即ち適切な根據がなければならぬ、根據があればそれが判る。思想問題に關しても是が唯一時の思想に過ぎないものであるか、或は過去に於て勢力のあつた思想であつても、それは今日に於て現すことが出来ない、外國に於て非常に有效のものであつても、それは或國に於て行ふことが出来ないと思ふことは、色々其處に基礎があ

ると云ふことが考へられたならば、此問題は解決されることが出來ます。其基礎は色々ありますけれども、其一つとしては哲學上の基礎と云ふことを考へることが必要と思ひます。それで哲學上の根據を思想問題に就て考へることが必要になつて來ると思ふ。さう云ふ所からして私は思想問題と哲學との關係の有ると云ふことを結付けて來た譯であります。

四

それで次の問題は然らば哲學はどう云ふものであるかと云ふ御話をすることになるのであります。哲學と云ふことを此處で細かく其方の問題に入つて説く積りではありませぬ。唯哲學の立場を明かにすることが必要であります。夫等の必要な事だけを一つ述べて話の順序を付けて行かうと思ひます。哲學の定義でも何でもありませんが、唯準備として述べて置くと、哲學は有ゆる事物の根本的原理を論ずるものであると考へたら宜いと思ひます。特殊の科學は特殊の原理を論じて居る、哲學は有ゆるものに關しての一般原理を論ずるのであると斯う云ふ解釋をして居ります。是は必しも十分且つ適切ではありませんが、幾らか見當が付く。併し有ゆるものと云ふのでは餘り漠然として居りますが、もう少し言葉をはずきりして言つたならばどう云ふことになるかと云ふと、或人は之を世界及人生と云つて居ります。然らば世界とは何かと云ふ問題が起りますが、或は之を唯自然と云つても宜いと思ひます。それで自然界に起る事柄、人間界に起る事柄と云ふことの有ゆる事柄の共通の根本原理を論ずるものが哲學である。斯う云ふやうに大體考へて置いてよいと思ふ。

併し此定義は實は改めて行かなければならぬのであつて、一言唯私の今の解釋を附加へて置きますと、私

は哲學は物と我との關係を明かにするものだ、斯う云ふ風に言つて居ります。物と云ふのは有りとも有ゆる物であります。即ち世界人生皆物であります。我と云ふことはそれを取扱ふもの即ち自分であります。かくて我と物との關係を説くのである。物を物として説くと云ふ立場はそれは科學であります。其物が自分に對してどう云ふ關係を有つて居るものであるか、自分に對してどう云ふ風に知られるか、其知ると云ふことはどう云ふものであるか、又物が我に對してどう云ふ形になつて現れて來るか、と云ふことを説くのが哲學である、唯漠然と世界人生の學であると云ふことでは十分適して居ないと考へて居ります。そんな風にして入つて行かうと思ひますが、今夫等のことを深く論じやうと思ふのではありませぬ。大體哲學と云ふものは漠然と有ゆる根本の原理を論ずるものであると云ふ、若くは總ての物と我との關係を論ずるものであると云ふやうなことです。何れにしても極く一般的のものである、總ての物の基礎になるものと考へて宜いだらうと思ひます。さう云ふ風でありますから、考へることに關する思想問題の根據を哲學の方に持つて行くことは、大體無意味でないと思ひます、是丈のことを許して置いて、そこで哲學の立場を考へまして、それが思想問題の解釋に依つて、どう云ふ意味を現はすか、全體思想問題について色々のことが出て來ますけれども、それが哲學上の根據に相違があることに因るのではないかと考へて見る。さうして見ると思想問題の相違は思想問題としての相違としてだけでは説けない。それで此次の時間に於て哲學の立場の分れる理由を説きまして、今日に於て思想問題に關する色々の意見の岐れる理由を説いて行かうと思ひます。

哲學は大體今申したやうに世界の有ゆる事物の根本原理を論ずるものであると云ふやうなことで、一通りの理解が出來ますが、然し斯様な目的を有つて居るものは、必しも哲學ばかりではない、宗教もさうであり

ます、文藝も亦見方に依るとさうであります。即ち是等のものは其點に於て大體同じやうな目的を多少異つたる形で現はすと云ふやうに解釋せられます。それは畢竟考へて見ると元が多少同一であると云ふやうなことも原因があるのであります。元來此哲學、宗教などの本を遡りますと、先づ神話と云ふものに歸すると云つて宜いやうに思はれる。古代の人民が色々の不思議な現象に接したり、或は自然現象に接したり、或は自分の運命、死んだり或は生れたりするやうな死生の運命に對して驚いたりする場合に、之を極く簡單に説明したいと云ふ要求も起ります。其場合に於て最も直きに考へることは之を以て神々の所業に歸することでありませぬ。或は神々自身の現れが萬物になると見る仕方でありませぬ。斯う云ふものを神話と稱する。斯様な説明が最も古く一般に行はれて居つたことは、是は別に深く論ずるにも及ばないと思ふ。是が後にまで残つて居つて一種のお伽噺と云ふやうなものになつて居るものもありませぬし、或は傳説のやうに残るものもあります。傳説になれば段々人間的になつて來ますが、さう云ふやうなものになつて來ます。斯様に神話とかお伽噺とか傳説とかと云ふものが、其根源に遡れば神話でありますが、是は何れの國に於ても古く残つて居る、其中の發達したるものが組織が立ち、神々の系統なども十分に明かになつて來るものもあります。又さうでなく断片的の神話を有つて居るものもあります。併し目的は何れも同じでありますが、是等の神話では段々人々が満足しないやうになつて來る。そこで神話の中に含まれて來る要素がそれ／＼獨立の發達をするやうになつて來る、即ち神話に依つて吾々は主として自然現象や何かに就ての説明を爲して居るのであります。此説明の中から神に結付いたことを離れて、もう少し吾々の經驗内の事柄で爲し遂げて行かうとするやうになります。一方には神話に依つて吾々の日常の行爲に關する教訓を受けて居ります。例へば惡事をすれば神

々が之を調する爲に天變地異を爲すものであると云ふやうなことで、道徳的の教訓になつて居るのであります。此教訓は説明とは目的が違つたものでありますからして、是は是で又別の發達をするやうになつて行くのであります。斯の如くして神話の中に説明の方に關する部分と教訓の方に關する部分とが相別れて行つて、それで一方には説明の學問のやうな形を段々帯びて行く、一方に於ては實際の道徳宗教と云ふやうな形を帯びて行くやうになつて來るのであります。それで詳しく言へば科學と宗教と云ふものは其の中から分かれて來るやうになります。昔は科學とか哲學とかさう云ふ風の精密に區別が出來て居つた譯ではありませぬが、唯學問と云つて宜いので、専ら今日謂ふ所の科學の働きのするやうになつて居つたのであります。

所が其科學と宗教との間に立つて、多少宗教的の要求をも満たし、さうして同時に科學的説明の方にも關係する所のは哲學であると考へることが出來ます。でありますから哲學は神話がもつと合理化されたものである、と云つても宜い、科學と宗教との二つの要素を合せて居るものである、是が發達しない間は神話であるが、一旦發達して、さうして兩方を合せたものが即ち哲學であると云ふやうに見られると思ふ。隨つて哲學の中には此二つの精神が消長して居る。或種類の哲學は科學的精神の方が非常に勝つて居る、或種類の哲學に於ては宗教的の要素が勢力を得たと云ふやうな形になつて、昔から發達して居るのであります。隨つて哲學の本來の目的は世界の根本を明かにしたいと云ふことであります。それが其點に於ても現れて來て、所謂根本と云ひ原理と云ふもの、性質に關する考を色々變へて行くやうになつて居るのであります。哲學と科學と云ふやうなものは吾々は假に區別して言葉を使つて居りましたが、其點も第一に考へて見なければならぬ。古代の學問の有様に於ては別に科學とか哲學とか云ふ區別はない譯であります。或意味に於ては皆

之を哲學と云つて居つたのであります。其中から段々と科學が分離するやうになつてしまひました、獨立するやうになつて來ました。それで一方から云へば哲學の領分が段々減つて行くやうな有様、例へば物理學と云ふものは昔は廣い意味の哲學の中で講義をされて居たと見られますが、もう餘程前から物理學は一の獨立なる科學として研究されるやうに出來て居る。ズツと後になつても心理學とか倫理學と云ふやうなものは可成り長く哲學の中に入つて居つたのであります。是も次第に獨立なる學問となるやうになりました。そんなやうにして段々と哲學と科學とが區別され、或は哲學の中から段々學問が獨立して自ら科學であると云ふやうになつて來た。さうなつて來ると終ひには哲學の問題が無くなつてしまふやうな感がして來ました。或人は哲學は次第々々に領分が無くなつてしまつて、今では唯名だけになつて居ると云ふやうに言つて居る人があります。又或人は哲學の時代は既に過去つてしまつて、過去に於ては宗教神話が全盛であつたことがある。それに續いて哲學的思想で以て萬事を支配して居つた時代があつたが、今日に於ては最早科學萬能の世の中であると斯う極込んでしまつて居る人もあります。さう云ふやうな有様で哲學の領分は餘程減つては來て居りますが、併し兎も角其學問が残つて居つて、未だに哲學を研究して居る人がありますから、何か其處に問題があつても宜い譯であります。それでそれを色々論ずるのであります。それに對して私は昔の哲學の中に含まれて居つた色々な學問は多くは唯、物を物として——物と云ふのは物質と云ふのではありませぬ。世界や入生なりですが、其世界なら世界を物として、自分としての研究を離れて研究するものが科學になつてしまつた。けれども自分と物を結付けて論究する場合は、是は科學では論究が出來ない、科學では一部分の事を研究して居るのでありますから、それを引括めて自分の中にどう云ふ風に世界が現れて來

るか云ふことを研究するときには、其處に哲學と云ふ特別なものが現れて来る。是はどんなに科學が出来ても及びはしないと云ふやうに考へて居りました。例へば是等のもの、一つを考へたならば、それは物理學なり或は化學なり、夫等の學問の研究になつて來ます。併ながら是は私に對してどう云ふ關係を有つて居るか、是がどう云ふ意味を以て現れて居るか云ふやうな、其物の私に對する意味は、此物自身の研究では出來ない。それは私と其物との間に於てのことであつて、如何なる科學に於ても論究が出來ないことになつて居るのであります。其處にはむづかしい問題が残つて居ると見て宜い。それで唯の原理の研究と云ふやうなものは無くなつてしまふけれども、我と物との關係の問題が一方に出來て來るのであります。是は私の哲學の解釋の生ずる所以で、さう云ふ風にして哲學を残すことが出來ますが、哲學が残るか残らないかと云ふことは、今吾々の問題に就てはさう重大なことではない、兎に角哲學はあると云ふことで宜いと思ひます。どう云ふ點に於て残すかと云ふことに就ては大體さう云ふことを許して置いて戴いて、さうして哲學のあると云ふことを許して、そこで哲學がどんなやうに違つて現れると云ふことの問題に進みたい、一方には哲學は要らない、若くは無くなつてしまつたと云ふことがあるけれども、それは暫く考の外に置いて戴きたいと思ひます。

五

さうすると哲學は何かの形で以て一般の原理を論ずるものであると云ふことを許して行きますが、所で一般の原理が何處に現れるかと云ふ問題が生じて來ます。前に申す通り哲學の問題は問題として考へるときは科學の方になつてしまふ、さうしたならば哲學に於て論ずる根本原理も皆分かれてそれ／＼の科學で論せら

れて來ますから、別に根本の原理は何處にもないことになつてしまふ。今迄根本原理と云ふことが出て居つたのは名だけである。例へば私が人と云ふことを言ふ、此堂内に集つて居る所の會員と云ふことを用ゐますが、會員と云ふものは何處かにあるかと云ふと、そんなものは何處にもない、皆會員でありますけれども會員なるものは言葉に過ぎない、お互に會員何某が此處に居るのでありませう、併し吾々は便利の爲に會員全體若くは一人の會員と云ふやうな言葉で以て現して居る。哲學の根本原理も結局そんな風のものであつて、唯便利上作つた名であると考へることが出来る。實質は科學の方で分かれて研究されて居る。唯それを統轄する名であると考へて見たならば、哲學の原理は科學原理の中にあるものであつて、それを合せたものであると云ふやうになつてしまふ。即ち哲學の原理は吾々の經驗内に存在せられて居るものであると云ふ結論になるのであります。

所が今迄の哲學を論ずる人はそれ丈では物足りない感が起つて來るのであります。もう少し哲學原理に意味を付けやうと云ふことを試みて居ります。即ち哲學は前に述べたやうに唯科學的に説明するだけの任務ではなくして、一方に於ては宗教的教訓を與へる意味を有つて居る、何等か奥深い感を與へるものでなければならぬと云ふ。でありますから哲學の原理は唯科學の原理を集めたものであると云ふだけでは満足が出來ないで科學の原理ではない。科學の奥に在る原理である、さうして其基礎になつて居るもの、科學の原理を結付けて居る所の根本の原理である、斯様に考へて見るのも尤もであります。昔から哲學者と云ふやうなものは何か奥深いことを考へることを努める、唯經驗的事柄を経験的に説明しやうと云ふだけに止まつて居りはしない、例へば世界の根源は水であると云ふことを説く人でも、即ち希臘哲學史の第一頁に出るタレー

それはそれは詰り何か奥深い思ひを凝して水と云ふものが根源であると云ふ、吾々の目前に現れて居る所のものでは水ばかりではありませぬ。併ながら本體に遡つて見ると水が萬物の根源であると斯う云ふやうに考へたらこそ斯の如き説を吐いたものと思ひます。何か吾々の日常の経験の奥にあるものを捉へやうと云ふのが哲學の主眼であつて、随つて哲學はさう云ふ奥の秘密なるものを代表して居るものであると解釋することが出來ます。斯様になつて來ますと此原理は経験内のものでなくして、寧ろ経験外のものである、或は経験を超越して居るものである、吾々の経験することの出來ない経験を超越して居るものである、と云ふやうな説明にならなければならぬのであります。經驗的なものが有形のものであるとしたならば、斯様なものが無形のものであると云ふ。尤も有形無形と云ふ語は使ひたくない、古くは使ひましたけれども、色々誤解があるから使ひたくない。今少し術語的に言へば、一方が形而下にあるに對して一方が形而上であると云ふ。哲學の原理は斯の如く形而上的な経験を超越したるものであると云ふ觀方が、是は哲學の解釋の仕方として割合に古く行はれて居つたものと云つて宜いのであります。斯の如き解釋から來たならば、前の論とは大分違ふ。そこで是等を對立して一方を経験的傾向と申し、一方を形而上學的と申すのであります。

哲學には經驗論的と形而上學と此二つの傾向があるのであります。是は前に遡つて見てさう云ふ風に考へられる。前に申した哲學は神話から出た科學と宗教との二つの要素を結びやうと云ふ精神から出た、即ち二つのものを結びやうと云ふものであるが、然し調和したものは矢張どつちかに傾く虞がある。それで科學と宗教とを結び居る哲學が、或る時は科學的に傾き易く、時に依つては宗教的に傾き易くなるのであります。それで經驗だけに止つて行かうと云ふ所の哲學は科學的精神、其を超越しようとするには宗教的

精神を主として居るのである。かく古來の哲學の系統に二つの大なる傾向が出來て居るが、色々な思想の問題に對しても亦此二つの傾向が現れて居る。經驗的に考へる側と形而上的に考へる側に於ては根柢に於て一致しない所が出來るのであります。それ故に假に意見が大變違つても若し此立場の相違を許せば、兩方の意見の間の諒解が多少起り得るのであります。或は兩方の立場が共に不完全であるとして、第三の立場を選んだならば、それに一歩進んだ解釋が出來ると豫期されます。例へば能く「デモクラシー」と云ふやうなことが出來ますが、此「デモクラシー」と云ふ考は一面から見ると經驗論のやうな哲學を基礎にして居るものであると論せられる。そこで之に反對する所のものは何であるか、色々ありませうが、先づ此民衆の自由平等と云ふことに對して專制壓迫と云ふことを主とする觀方が考へられますが、其方は稍々形而上學の傾向を帯びて居ると考へることが出來ます。自由平等と云ふことが吾々の日常の経験の範圍内に於て色々な事を經驗する場合に、許されなければならぬことは、理論上又實際の歴史に於ても常に證明せられて居る。之に對して何か奥深いもので經驗界を支配して行かうと云ふのには、民衆的の平等なるもの、上に更に奥深いものがあつて、さうして其物で以て支配すると云ふ形になりますからして、奥深いものを求めると云ふ形而上學の精神に一致して居ると考へなければならぬ。斯んな風に自由平等とそれに反對する思想に於ても、斯の如き哲學上の思想の系統の區別が認められるのである。それでありませうから此二つの社會上の思想の區別は單に思想の末の方に於て分かれて居るものであると考へることは間違つて居る。其人の根本の哲學に於て經驗論を採るか採らないかと云ふ所に於て根據があると考へて宜からうと思ひます。尤も經驗論だから民主主義にならなければならぬと限つたことはない、經驗論で無い方からも民主主義の基礎が出來る、專制主義の方からでも

經驗論と結付くものがあり得るのでありますが、概して言ふと前に述べたやうに考へられるのであります。是は唯一例として挙げたのであつて、まだ細かい説明をして行く積りはないのであります。唯如何に哲學思想の上の區別が思想問題の區別と一致して居るやうになるかと云ふ其例を示すに過ぎないのであります。

六

斯様に哲學が思想問題に結付いて行きますが、併し哲學と云ふものがさう固定して居るものでないのでありますからして、今述べた二つの型が何時も同様な形で以て現れて居るのではありませぬ。即ち經驗論の「タイプ」と形而上學的の「タイプ」と二つあると云ふことを申しましたが、併しそれは實際に於てはさう明白に區別されて居るものではない。一寸他の例で申しますと、例へば政治界に於て二つの黨派がある、假りに政友會と憲政會とあると云ふ風に、是が實際分かれて居る。兩方に屬する人が犬猿唯ならずと云ふ人があるか知れませぬ、けれども場合に依つてはどつちも人間であつて、どつちも國利民福を圖ることを標榜して居ると云ふやうな、色々の共通點がある以上は、色々の主張して居る所が段々見ると能く似て居ると云ふことが言へる。政綱だけを見ればどつちも尤ものことになるのであります。尤らしいことを言ふのであります。さうして其兩方は何處が違ふのでありませう、唯感情ばかりではない、何處かに違ひが出来て來るのでありませう、極く僅の相違で兩方が成立つて居る。それでさう云ふ風になるのはどう云ふ譯であるかと云ふと、初めは色々反對したのでありまして、段々兩方で論をして居る間に一致點が其間に出て來る。議論をするとは人は互に諒解するものであります。今迄話して見るとお互に同じやうなことを考へて居つた、畢竟するには是は言葉だけの争ひであつた、と云ふて實に詰らなかつたと云ふやうなこともあります。併しそれは實を言ふとさう

云ふこともあるでありませうが、初めからさうではなかつたかも知れない。初めから言語の争ばかりでさうなつたのではなからうと云ふこともあります。鎗を削つて争ふと云ふことは矢張初めは兩方の意見が随分違つて居つたのであります、けれども段々議論をして行く中に、一方の人が他の方の説を識らず知らず容れる。他の方が一方の人に識らず知らず感化されて行つて、次第々々に接近して行つたのであります。労働者と資本家と議論をする、大に喧嘩をする、喧嘩をして「ストライキ」をやるとか「ロック、アウト」をやるとか兩方で色々な事をやつて兩方で互に争つて居る中に多少諒解を得ることもある、尤も諒解を得ないこともありまして、どうしても腕力に訴へて行くこともありますが、言論に訴へると段々と諒解して行つて一歩宛近寄ることもあり得るのであります。さうなれば宜いのであります、適當な所で諒解されると旨く圓滿に解決されることも起る。それで段々調べて見ればさう違つて居つたのではなかつたと云ふことがありますが、實は初めはさうではなかつた、一方は要求が強くして、一方は中々強硬であつたと云ふことがありますが、それは態とするのではない、諒解して行く、段々本心に歸つて行つて適當な解決を得ることになるのであります。さう云ふ風に影響し合ふのでありますから、今經驗論と形而上學とありますが、元を質せば全く異つた精神から出たのであるけれども、幾らか兩方が接近して來る。そこで經驗論の議論の中にも形而上學の議論が入つて來る。形而上學の中にも經驗論が入つて來て、兩方で折衷して來る。でありますから今日在る哲學を見ても經驗論の派に屬して居るものでも、昔の形而上學派が入つて來て居る。又形而上學でも餘程經驗論を取入れて居るやうになつて來て、兩方の間に單純なる差別がない譯になります。随つてそれを基礎として居る思想問題に於てもさう單純に區別が出来ないと云ふ風に次第になつて居るのであります。それで斯

様にして哲學思想も進歩して行くのであります。何時も同じやうな事を繰返して行くならば、進歩も何もありません。斯様に両方が入混れて行つて、段々複雑になる、經驗論が六分に形而上學が四分とか、或は形而上學が七分に經驗論が三分とかと云ふやうな色々な組合せで両方の傾向が分かれて行つて居ると云ふのが今日の有様であると思ふ。併し實は此間に正しい道が考へられる。そこで以て両方の思想を結付けることがあつて宜いのであります。私は其方の眞ん中を取つて行くと云ふ、新しい哲學を結付けて行かうと云ふのであります。即ち物と我との關係の觀方は眞ん中の觀方であります。經驗論と云ひ、形而上學と云ふものは、多少物を物として觀ると云ふ觀方の精神を残して居る、我の働きに重きを置かない所の態度になつて居るのであります。さう云ふ事は尙ほ明日の問題に於て他の例と共に又言ふ機會があるのであります。大體そんなやうなことからして新しい所の立場を考へることが出来ると思ふのであります。斯様にして色々な説が出て居りますが、所で此經驗論と形而上學と其間を行く所の新しい道もあると申しましたが、近頃になつて來て是等の色々な立場を全く離れて是等の色々な立場と全然異つた哲學の新しい傾向を拓いて來るものもあるやうであります。所謂哲學の改造が其處から起つて居るのであります。私の言ふ所の物と我との關係は一種の哲學の改造であります。是は後に申します。斯う云ふ意味は十八世紀の終頃に獨逸のカントに依つて唱へられましたが、それから以後或意味で逆轉しまして、別の方に向つて來た。それが十九世紀の終になつて來て、又カントに復れと云ふやうなことになつて、哲學は物と我との關係を續くものと云ふやうなことになりました。尤もカントはさう云ふ言葉を使つて居りませぬ、是は私は言葉でありませんが、即ちそれはカントの批判哲學、批評哲學と云ふ立場になるのであります。併し其外に又最近に於て特

に哲學の改造と云ふことで以て、哲學に別な問題を提供しやうと揚言して居る者があるのであります。是等に就てはカントの哲學の如きものも矢張改良されるべき哲學の一種であると云ふやうに見られて居るのであります。さう云ふ思想は何處から出て居るかと思ふと、殊に亞米利加、英吉利等に於て唱へられて居る所のものであります。もう二十年以前に亞米利加に於て唱へられて居りました「ブラグマチズム」と云ふやうなもの、哲學改造の一つであります。此時分には改造と云ふ言葉が今日程流行つて居りませぬが、言つて居ることは確に今日の改造論であります。其精神が近頃のものとして現れて居ります。尙ほ亞米利加、英吉利には此「ブラグマチズム」の外に、最近數年前に於ては新實在論と稱する所の派が起つて、そこで是等の人が哲學の改良を云ふやうになつて居ります。最近に於て亞米利加の「ブラグマチズム」の先達たる（他の先輩のジエームスは死にましたが、もう一人の）ジョン、デューイ氏は（昨今日本に來まして、數日中に歸られますが八月中旬の事）、先來我邦に渡來して「哲學の改造」と云ふ題目で以て講演をせられました、其書は既に日本に譯されて居ります。近頃丁度社會其他の改造と云ふことが盛んに使はれて居りますから、デューイの改造は特別の意味を有つて居る感情を與へるものと思ひます。

デューイの考は「ブラグマチズム」に次いで餘程新實在論の方に近くなつて居る思想であります。今是等の人々の考に依ると、從來の哲學に於て眞理が絶對的に定まつて居るものと考へたのは大なる間違である。又今迄の經驗論は何れも經驗と云ふことに對して間違つた考を有つて居る、經驗は單に外部の經驗であると考へて居つた。外部の統一して居ない雜駁なるものとせられて居つたが、それは間違ひである、經驗に新しい解釋を施さなければならぬと云ふやうなこととして、此二つを基礎にして論じて居ります。眞理は相對的のもので

ある、吾々は相對的の力を離れるものではない、經驗と云ふものは經驗其ものは連結したる體系である、だから随つて經驗を離れて何等の超越的のことを求めることが出来ない、必要がないと云ふことを論じて居ります。更に最も重要な點は是は結論としてでありますが、哲學と云ふものを今迄の人は生活と相離れたもの。若くは對立したものと考へて居る、是は間違であります。哲學若くは智識と人生生命生活と云ふものが異なつたものと考へることは大なる間違である。智識は生活の働の中の段階に過ぎないもの、一の作用に過ぎないものであります。今迄の經驗論者も形而上學者も哲學を以て純粹の智識のものとしたが、實は？ さうではない、吾々の實際生活が哲學の基礎であると論じて居ります。所で今日に於ける實際生活は過去に於ける個人の生活ではない、社會生活であります。随つて社會生活其ものが哲學の根源である、基礎である。社會生活を適當な形にする爲に、哲學が生じたものである。随つて哲學の主なる問題は、社會生活をどうするかと云ふことに歸するのであると言ふやうになつて居ります。

是等の論に依ると哲學の問題は俗に言ふ思想問題に外ならぬ。今日俗に言ふ思想問題は社會思想の問題のことであるといふことは改めて論じないでも宜からうと思ひます。所で此社會思想の問題と見ても、之を新しい改造論者の方から行くと、それは詰り哲學の問題であると云ふ風に説いて居ります。斯様になりますと社會の改造と云ふことは其改造せられたる哲學に於て初めて論究することが出来ることと云ふことは是等の議論は當然導いて來るのであらうと思ひます。今迄人々の考へて居りました形而上學經驗論或は其間を新しく行かうと云ふ私の考へて居る哲學の基礎も、或意味に於て思想問題の基礎になることとあります。併ながら斯の如き哲學改造論者の説に従ふと、哲學が本當の社會問題の基礎であつて、哲學を離れて別に思想問題に關係

のあるものが無くなつて來る。或は思想問題は哲學問題に外ならない、社會問題は哲學問題に外ならないと云ふ結論になつて來ると思ひます。

此哲學の改造論が果して善いか悪いかは是は別問題、是は明日論じたいと思ひますが、とにかく斯様に三つの立場があります、經驗論の立場又形而上學の立場、又社會改造の立場、此三つの立場に依つて各々違つたる思想問題が解釋が出來て來るのであります。極くざつと云ふと形而上學の立場から來るものは思想問題に對しては多少舊式の考と云ひますが、今日の多くの時勢の問題として考へますと、過去の思想を代表して居ると云ふやうに考へて來るものが多いやうであります。必しもさう限つたことではない、例へば獨逸の思想などは形而上學から來て居ると云ふ、それは私は總てが當らないと思ふ。さう云ふ例も随分あると思ひます、之に反して經驗論も改造論から來るものは概して言ふと所謂新思想に傾くものが多いやうに思はれます。併し是等の新思想の中にも必ず新でないものがありますから、今日の勞働問題の一方の論者から云ふと、非常な舊思想であると云ふことが言はれるのであります。それであるからしてどの思想が舊いとか、どの思想が新しいとか言ふことは避けなければならぬのであります。兎に角色々形に於て是等の思想が——是等の哲學の根據が思想問題の背景になつて居ることを證明することが出来ると思ひます。

是だけで私は思想問題と哲學の間に結付けた關係を終つたのであります——次には其實例として或種類の社會問題を選んで、是等の哲學的基礎がどう云ふやうに働いて行くかと云ふことを説き、尙ほ今まで説いた中の不完全な所を補ひたいと思ひます。

第二一回

今日は初めには社會問題、或は廣い意味の社會主義と云ふやうなことに關係した思想の哲學的基礎を主として論じて見たいと思ひます。尙ほ終りには文化主義と云ふやうな問題に就て論ずる考であります。

昨日も申したやうに、思想問題と云ふことは非常に範圍が廣いのであつて、人間の考に基くことは凡て皆其中に入るべき筈であります。併し今日之に對して人々の主として解釋して居るのは、社會思想の問題、社會問題と云ふやうなことの意味であらうと思ふ。又此問題が此講演に適切な題目となつて居ることは言ふまでもない、今特に宗教思想の問題を論ずるとか文藝思想の問題を論ずるとかと云ふやうなことは、直接に必要なことでないかも知れぬ。併し實は關係して居る問題でありまして、或人々のやうに是等を全く離して考へることは大變に間違つて居ると思ふから。自然にそれを論結するやうなことも試みるでありません。併し主として目を着けて居る問題は社會思想の問題で、其處を中心として説くのであります。併し何分今申した通り既に他の問題にも連結して居るのであつて、隨つて此社會思想の問題と云ふことが、此數年來殊に人の注意を惹いては居りますが、併し突然として此數年來に起つた問題と云ふ譯ではないのであります。勿論其の形に於ては新しいもので、戰後の歐米に於ても從來とは大變異にして居ることが起つて居るが、それと同じやうなことが形式は色々違ひますが、日本に於ても多少見られるのであるから、前の状態とは同一とは言へないが、併し之を以て突然起つた問題だと思ふのは、それは思想の歴史に通じて居ない、若くは從來

思想の問題に餘り眼を閉ちて居つたと云ふ爲であると思はれる。即ち今日迄盛んに説かれて居る所の思想の動搖とか思想の問題とか云ふことは、是は別に珍しいことではないのであつて、即ち歐羅巴の文明で言へば世界の近世文明の起つた時からして、斯う云ふ問題は根柢を有つて居つたと云つて差支ない。日本は特殊の系統の文明になつて居るやうな所もあるので、無論過去に於ては全然歐羅巴と同じ形ではありませぬが、併し是も大體に於ては同様の有様で、歐洲に於ける數百年前からの變動と併行した趣を示し、殊に最近約百年位前からして非常に變動が起つて居つて、其状態は大體に於て近世の歐羅巴などに於て見るやうな變化を繰返して居るのであります。

然らば如何することが變動と言はれるのであるか。一言に申すと近世の歐羅巴に於て初めて「我」と云ふものが本當に發見されて來たと云ふことである。能く人は近世の始めを發見發見の時代と云ふ。御承知の通り中世から近世に移る時期に於て地理上の發見が澤山ある。亞米利加が發見される、或は世界一周をする航路が發見される、と云ふやうなことで、地理上の發見が澤山あります。又色々新しい發明も起つて來る、火藥だとか或は印刷術だとか云ふやうなことが、全く新しい發明のみでもありませんが、從來の改良をしたり或は色々手を加へて、殆ど根本に於て變つたものが出來て來た。それは自然科學の發達と云ふことに歸するのであつて、長い間中世の時代に於て壓迫されて居つた所の科學精神自由に自然を研究しやうと云ふ精神が起つて、其應用として斯様な發明發見が出來たと云ふことは詳しく言ふまでもないことでもあります。さう云ふ風に色々な發明發見がありました。或る歴史家は又、其時代に於て最も大なる發見は人間を發見したことであると言つて居ります。人間を發見すると云ふのはどう云ふ意味であるか、昔希臘に餘程風變り

の哲學者があつて、其人は日中提燈を點けて歩いた。人が怪んで何故にさう云ふ風なことをするかと云つた所が、世の中は眞暗である、自分は人間を探して歩いて居るのだ、と云つたと云ふ。即ちそゝ等に澤山ウヂヨクして居る所の人間は、彼れは本當の人間ではないのであつて、眞の人間と云ふ者は何處かに居るのであるから、それを探すのだと言ひました。併し近世の初めの人間の發見と云ふのはそれとも違ふのであつてさう云ふ風に唯一人の或特別なる偉い人間を發見すると云ふのではない、お互が皆人間であると云ふことを初めて本當に意識し、さうして人間たる能力を自分で發揮しやうと考へるやうになつて來た、と云ふことではありません。と云ふのは中世の時代に於ては羅馬に本山を構へて居る基督教會が非常な勢力を有つて羅馬法王が總てのもの權威になつて居りましたからして、宗教上のことは無論のこと、學術上の問題でも、政治上の問題でも、時としては羅馬法王の權勢の下に支配されて居つたのであります。それで人々は唯古い書物、神の言葉と云ふものの外に出ることは出来なかつた。斯様にして此人間として唯神の下に仕へて居ると云ふやうな有様であつたのであります。所が近世の初になつて人々が自然を自ら研究しやうと云ふ所の心を生じて、徒に傳説に服従することを欲しない。是に於て初めて人間が人間の本性に具はる力を自覺して、之に依つて自然を研究し、又之に依つて自然力を利用することが出來ると考へて來たのであります。即ち是に於て初めて人間が目覺めて人間と云ふものを發見したのである。其意味に於て歴史家は此時代に於ける最も大なる發見は人間の發見であると云ふて居るのであります。

併し尙ほ之に言葉を加へて言ふならば、或は之を唯人間と云ふのみならず、「我」を發見した世の中であると斯う云つても宜いと思ふのであります。唯漠然たる人間性を發見したばかりではない、自分と云ふもの

方を本當に發見したものである。我と云ふものが昔の人の言葉或は宗教上の傳説と云ふやうなものに囚はれて居る時代には、我は殆ど認められて居らない、又人間性と云ふやうな一般概念の中に包括されて居る間は、我が本當に自分のものと云ふことは出來ないのであります。併ながら唯漠然たる人間性と云ふことではない、お互の我が眞の力を有つて居るものである、總てのものを中心點であると云ふことを知るやうになつた所で、それで初めて我の意味が本當に發見されたことと云つても宜いのであります。近世の文明は殆ど我の發見、或は他の言葉で云ふと自覺の發達と云ふことを、次第々々に明かにするやうな有様であつたのであります。日本に於ても長い間の戰國或は封建時代に於て或種類の人間は大變に發見されて居りましたらうが、士農工商と云つたら士だけは本當の我であつたか知れませぬが、農工商は人間でもなく、我でもなかつたかも知れませぬ。或意味に於ては其時代が異つて來て、農も工も商も皆我であると云ふことを段々意識するやうになつて來たのが近來の現象であらうと思ひます。斯様な意味に於て我の發見自覺が近世文明の一の特色と見られるのであります。

併ながら其我の發見と云ふことが常に必しも完全に行はれた譯ではない、又眞直に行くと云ふ譯ではないのであります。初めは我が稍々漠然たる人間性と云ふやうなことの中に含まれて居つたのでありませう、次第に我と云ふものが獨立して來るやうになつて、我の意味は明かになつて來ましたが、今度は反對に我の意味が正しい道から離れて來て、唯我の發見と云ふことは詰り各々の人々が勝手氣儘を振舞ふと云ふやうなものと解釋されるやうになつて來た。それは手取早く極く粗雑に言つたのであります。マア一言に申せば個人的自我の專横を極めると云ふことが、それが本當の我の發見であると云ふやうな風に段々考へて來るやうな

時代もあつたのであります。左様にして色々混亂も起つて来て我の發見と云ふことが譯なく出来て来た譯ではありませぬ。併ながら兎に角色々曲つたり、時には極端なる弊に陥つて居りましたけれども、向ふ所は我の發見自覺と云ふことになつて来て居るのであります。それが色々各方面に現れて居る。或は宗教上に對して現れると、昔の宗法問題に對して新しい宗教改革が起つて来る。或は政治上に對しても從來のやうに唯壓制する譯に往かず、所謂人民の權力が高まつて来て、國會が開かれ、憲法が布かれるやうになつて來、場合に依つてはそれが順當に往かないときは革命などになつて來ると云ふやうな譯であつて、色々我の發見が政治界に於ても現れる。或は學術界に於ても色々形の形に於て現れ、一般の思想界に於ても現れ、自由思想が起つて宗教社會、有ゆる方面の根本の事に關して斯様な自由自覺が起つて來ました。或はもう少し細かく言へば婦人問題と云ふやうなことに關しても婦人の自覺と云ふことが段々に起つて來た。是等は新しい現象であります。十九世紀の初頃からして殊にさう云ふやうな問題が起つて來て居る。斯う云ふやうに様々の問題が起つて來たのであります。是等は孰れも皆根柢に於て關聯したものである。今日思想問題とか社會問題とか云ひますが、大きく考へて言へば矢張是等と同様な潮流の一つの現象である。唯時勢が異つたり或は事柄が違ふので、其間に差別が出来て居ることは言ふまでもないのであります。全く突飛な孤立した現象であると考へることは出来ないもので云ふことは、少しく此思想の變遷を見たならば、直に判ることが出来るだらうと思ふ。随つて之に對して非常に驚いてしまふ人は、善いも悪いも、悪く言ふ者或は賞める者其に其當を得て居らないのであつて、もう少し歴史的の變遷を辿つて見たならば、斯う云ふ場合には斯う云ふ問題が起るだらう、之に對して正當なる處置もすることが出来ると思ふのであります。

尤も所々に依つて此思想問題がさう其同じ形で以て又同じ方で以て起つて居るとは見る事が出来ない。色々諸君の實際に於て遭遇されて居る所の場合に於ては、或は私共が考へて居るやうな意味のことではないかも知れない、昨日も色々御話などを聽いて居る中に、或は私共の言ふことは餘り諸君に取つて適切な問題にならないかも知れないと憂へて居るのであります。言換へて見れば諸君の日常遭遇されて居る所の青年は、今私の問題として居る所の思想問題などは稍々縁の遠い方の類ではないかと云ふやうな感がある。随つてそれに對して心配することも要らなければ、若し悪いことがあれば心配する、又善いことがあれば、それを進めて行かうと云ふ場合もないのか知らぬと考へて居ります。必しもさうではないのであります。一寸さう云ふやうな感もしないこともなかつたのであります。それであるから總て斯う云ふ問題は一律には論せられない。甲の人に對して大變力を盡すと言はなければならぬ事が、乙の人に對して夫程意味の無い場合がある。又甲の人に對しては少し劇しく言つて置かなければならぬ事が、乙の人に對してはそんなに言ふ必要がないかも知らぬ。一方の人に對して餘りに穩健のことを言つて置くと、それが却て何等の刺戟にならないことがあるかも知れぬ。一方の人には多少極端な風には言はなければ中々まだ動かないと云ふやうな場合があるだらうと思ふ。それも聴き方に依つては其處に誤解が起つたり又實際悪い結果が起るだらうと思ふ。でありますからして私の言ふことは何處と云ふ當なしに唯言つて居るのであります。聴く方の諸君に於て適當にそれを利用されることを御願ひして置く譯であります。でありますからして諸君の中に、或人はどうも是は少し亂暴のことを言過ぎると言はれるかも知れぬ、或人はまだ微温的であると言はれるかも知れないですけれども、そこ等は適當に應用されることを望む譯であります。それは一寸横路に外れましたが。

斯の如く思想問題と今日言ひますのは、根本精神に於ては決して珍しいことではない、詰り歐羅巴の歴史から云へば近世の三四百年前から起つて居る。日本の歴史から云つても殆ど百年前近くから起つて居る精神の繼續であります。少し前には文藝上に於て色々新思想が起つて論じたり、或は自覺の問題に就て色々人が唱へたことがある、或は婦人問題と云ふやうなことも可成り聲が高くなつて來て居ります。又教育上の色々な自由思想の問題と云ふことも之に關聯して起つて居る。是等の中にある者は最早今日では怪しまれず又當然のことと思ひ、寧ろ之に反對する人は非常に頑固な、進歩しない人と云ふ風に考へられて居りますが、其問題の起つた當座は可成り非難せられたものであると云ふことは言つて宜いのであります。之れで今日謂ふ思想問題の或ものは最早既にさう云ふやうに時期を經過してしまつたものがあります。即ち左程問題にならなくなつてしまつたものもあります。又或ものは依然として問題になつて居るものがあります。又人々の中でも或人は問題にして居り、或人はそんなことは問題とするに足らないと云ふやうな風に考へて居るやうになつて居つて、色々差別があるやうに考へられるのであります。それで此思想問題は決して根本に於ては新しくないものである、と云ふことを第一に明にして置きたいと思ふ。即ち要するに我の自覺、我の發展と云ふものが根本になつて居るのであります。而して其の對象が宗教となり社會となり經濟となつて現れて來て居るに過ぎないと考へます。

そこで我の發見が或意味に於ては多少反抗的な外形を以て現れて來ることは、それは認めざるを得ないと思ふ。各々が皆我を有つて居る、其我を發見することは、幾らか人々をして自信力を得せしめて、從來の如く人の言つたことに唯盲從し、今迄の制度に疑問無く服従すると云ふやうな状態とは違はせるものでありま

す。何か意見があれば其意見を述べて見たい、不平があつたならば不平を述べて見たい、と云ふやうな精神になつて行くのであります。それで我の發見と云ふことにはどうしても今迄現存して居るものに對する多少の反對を伴つて來るやうなことがあると思ふ。勿論現存せる制度が理想の極であつて、完備して居るものなら、それはさう云ふことがないけれども、人間の世界にさう完備したものがあつた筈はない、又完備してしまつたならばそれは夫れ限りで將來の進歩は止つてしまふ。完備しない所に却て價值が有るのでありますから、完備して居ない以上は、どうも眼が開いて見ると、此所が工合が悪いと云ふやうになつて、多少反對をし反抗することになることは已むを得ないことであらうと思ひます。でありますから我の自覺には反抗と云ふ外形が伴つて來る。其反抗が無意味な反抗になつて來ると、是は價値の無いことと言ふまでもない、唯何だか氣に食はないでぶつかつて見ると云ふやうな氣分、さう云ふ氣分は無論宜いことではありませぬ。私が言ふ所の反抗は必しもさう云ふ意味ではありませぬが、併し其反抗せんが爲の反抗と云ふことと、それから本當の意味の反抗と云ふことの區別はむづかしいのです。何處迄が本當の反抗であるかと云ふに、それは反抗して居る人は恐らくは反抗せんが爲の反抗だと考へて居ないだらうと思ひます。本人に聞いて見ると氣に食はないから反抗する、氣に食はないと云ふのはもう少し理想があつて、それが暗々裡に支配して居るから、何だかむしや、いやしてならない、それで反抗して居るのである。だから能く自覺して見たならば反抗せんが爲の反抗にも同情しなければならぬことが出て來るだらうと思ふ。けれども反抗されて見ると、自分が此位好くして居るのに反抗するのは甚だ不心得だと云ふ考になる。私共反抗する身分になつて居るときには反抗したくなるけれども、自分が自分の子とか或は學生とかと云ふ者に對して人が此位にして居るのに、まだ反

抗するかと思ふやうな時には、少し反抗に對して不愉快の感を有つ。だから人間は勝手な者であつて、境遇に依つて色々違ふ譯でありませうが、併し此際に若し公平な心を用ゐるならば、自分が反抗したときは出来るだけ反抗の理由を考へてからするが宜いし、又人の反抗に遇つたときは理窟が無いときに骨を折つて理窟を探してやると云ふやうな所までしなればならぬと思ひます。夫だけの心得はあつて宜いものだと思つて居ります。さう云ふやうな譯でありますからして反抗と云ふことは唯理窟から云ふと、往々にして反抗せんが爲の反抗もあるのですが、併しさう云ふ場合に於ても出来る丈其處は考へて見なければならぬ。さうして見ると我の自覺と云ふことに反抗的外形があると云つても、一概にそれが爲に罵倒されると云ふことはしないで、もう少し親切に反抗の原因を探つて見ると云ふことに心掛けて行かなければならぬことだと思ひます。随つて我の發見を何れの方面から見ても悪いことであると極込んでしまふことは間違つて居ると思ひます。随つて今日の思想問題と云ふものは或人の眼から見たならば非常に詰らぬこと、危険なことを言つて居る、と見えましても、出来る丈さう云ふ判断をすることを豫じめ避けて、もつと公平に考へて見て是は抑々近代に於ける根本精神の一の現れであると云ふ所に著眼をして問題を解決して行かなければならぬ。さうした上に實際にそれが害が有ると云ふことであつたならば、それは取るに足らない譯であります。豫じめそれ丈の注意は拂つて宜いだらうと斯う考へて居るのであります。斯様にして私は今日の社會思想の問題は根本に於ては別に新しいものではない、さうして反抗的外形は取るけれども、併し夫が爲に直ちに之を悪いものであると云ふやうに決めてはならないと云ふやうに考へて居ります。出来る丈虚心平氣に此社會問題の原因を究めることが必要である、社會問題を唱へて居る所の人で、場合に依つては随分危険な人と見ら

れるやうに考へる人にも、出来る丈同情の念を有つて善意に解釋して見ることが必要のことと思ふのであります。豫じめ彼奴はいけない、彼奴の言ふことは危険だと云ふことを眼中に置いて論じない所の態度が好ましいと思ふのであります。

二

それで次には今日人々の唱へて居る所の社會思想の問題の中心に移つて行かうと思ひます。此問題は色々あるのでありませうが、昨日も申したやうに今日社會問題と云ふのは、多くは經濟問題と云ふことに歸著して居るやうに思ふのであります。宗教でもなく文藝でもなく、凡て經濟問題と云ふ所に著眼して居ります。經濟問題とは何であるか、即ち經濟問題でも富の生産上の問題と云ふやうなことは即ち社會問題ではない、今日謂ふ思想問題ではない。生産の問題は是は生産の技術の問題であつて、如何にして僅少の資本、僅少の勞力で以て出来るだけ澤山の結果を得やうかと云ふことに歸著するのでありませうからして、どんな人でも其點に於ては異論が無い、ですからさう云ふ風なのは思想問題にはならない、學術上の問題であります。それで寧ろ問題は富の分配の方にあると云ふことは、言を俟たないであらうと思ふ。分配もそれは公平に分配すると云ふことであるならば、是も極り切つた話、けれども何事が一體公平であるかと云ふことが別に問題になる。そこで是が思想問題を喚起するのであらうと思ふ。公平、正義と云ふことは大體同じやうなことで解釋されますが、併し實は誤りである。昔アリストテレスは正義と云ふことに二つの意味を述べて居る。即ち報償上の正義と分配上の正義と此二つのものには差別があると云ふことを言つて居ります。悪い事をした者を罰するときには是は平等であつても宜いのでありますから、法律上の正義は平等であると云つて宜い譯で

あります。分配上の正義、經濟上の正義は必しも平等と云ふことにはならない、餘計に働いた者が少く働いた者と同じ丈の報酬を受けることは平等のやうに見えるけれども、實は不平等である。そこで按分比例が出来たり或は勞力に應ずるだけの分配が出来たりすることが自然に生じて来るだらうと思ひます。さう云ふことをアリストテレスは詳しく説いて居ますが、是は尤もの議論であらうと思ひます。そこで分配上、經濟上の正義には二つのものを合せて二で割ると云ふやうなさう云ふ簡單な譯には往かない、其處に幾らかの變形が付いて来るから、随つて曖昧な所が生じ疑問が起つて来る譯であります。誰でも自分は相當に働いた積りで居る、所が自分の分け前が少いと思ふやうになると其處に紛議が起る。一方に於ては其紛議の起るに拘らず、分配の不平均と云ふことが著々として行はれて來まして、其結果、貧富の別が段々劇しくなると云ふのであります、是は己むを得ないことであらうと思ひます。世の中に於て貧富の別の出来ないやうにするに云ふことは、今日迄の有様に於ては出来て居らない、そのない所はないやうな有様と云ふことは申す迄もない、が所謂經濟上の問題、社會上の問題は根本の基礎が其處に在ると思ひます。

併しさう考へて見ると是は前に述べた思想問題よりはもう一層古い問題であつて分り切つた問題で、人類の生れて以來と言ふことが出来ぬか知れませぬが、兎に角曲りなりにも社會に類したものを造つた時代から自然に出来て居る。それで貧富の別のあることは言ふ必要がない、同時に大抵の場合に於て貧民が非常に不平を有つてありませう、又富者の方で随分強慾の者が多い、尤も中には又仁慈の心に富んで居る者があつてどうかして貧民を救助して見たいと云ふやうな考のない者はないであらませう。若し富者の方から積極的に働かないならば、少くとも其中に何か有識家が出て、或は宗教家とか教育家とか政治家と云ふやうな者が出

來て、適當の方法で餘り大なる貧富の差別を軽減しやうと考へて見ることは、例が無いことではなからう。貧しい者を憐れむとか、又貧しい者を助けやうとか云ふ心をもつことは、是は人間として別にむづかしいことではないと思ひます、さう云ふ運動は始終あります。さうして同時に又其運動は或度までは大抵の時代に於て實行されて、貧民の不平等も抑へることが出来、それで世の中が大體無難に通つて居るのであります。無論貧富の別が無くなつてしまつて大地主も小作人も同様な生活をして居る所はないのであります、小作人は不味い物を食つて居る、大地主は美味い物を食つて居ると云つても、併し小作人は不味い物を食つて居つても不平を言ふて居ない、又大地主は本來味覺が餘計發達して居るか否かは別問題として自然にさう云ふ生活をして居ると、段々さう云ふ風に味覺も發達して来る、ですから自分の生活に於て甘んずると云ふ有様になつて居ると思ひます。時々大なる變化が起つたときには又倉を開いて賑はすと云ふやうなことをして用を使つて居る。併し段々と時勢が複雑になつて來ますれば、さう云ふ風に簡單に行かなくなつて來、そこで不平も段々多くなつて來る。又一方には富を蓄積して容易に散逸しないやうな傾向の人も殖えて來て居ります。時々騒動も起つて居る。中には又有志家があつて正當の途ではないかと言ふので、多少自分の一身を犠牲にして幾らか逆の道を執つて、さうして民を賑はすやうなこともある。是等も無論全然賞められて居る譯ではありませぬが、さう云ふこともある。それで大抵片が付くのであります。さう云ふ風にして行く間は先づ思想問題として斯う云ふ類の問題は起つて來ないと思ふのであります。

所が段々と此問題が複雑になつて來て、貧富の區別が平均することが出來ない、緩和することが出來ないと云ふやうな世の中になつて來ると、徐ろ／＼世の中の人々が疑ひ出して來る。元來自覺し掛かつて居る我を

有つて居る人民は、それで宜いかどうかと考へる、貧民は無論のこと、富者の中にも多少考へるやうになつて來ます。中には自分の財産を抛つて物質的にも精神的にも人間を救はうと云ふやうなことからして、色々な事をして居る人があります。例を昔に取つて言へば、釋迦の如きは一の例であります。自分は宗教でなければ救はれないと思つたのでありますから、宗教を説いて人民を救ふ、謂はば一方から云へば今日の一部分の人から考へたならば随分餘計なことをしたものであります。併ながら社會に取つてはさう云ふ事をしなければ満足が出来なかつた、又其時代に取つては夫位のことをしなければ、普通の方法では人民の困難を助けることが出来ない、と云ふやうな風になつて來たものと見て宜いだらうと思ふ。そんなやうに段々と世の中が複雑になつて來ますればさう云ふ運動が現はれ、それを矯正する運動が現れて來て、一の思想の形を備へて來るやうになつて參りました。それが益々劇しくなつて來るに従つて、さう云ふ問題が段々と簡單には行かなくなつて來た、其運動を喚起したのは近代の即ち十八世紀の頃に於て歐羅巴に於ける色々な變化、之を主として促したのは蒸氣機關の發明等に依つて色々紡績の機械が改良されるとか、其他種々の産業上の機械が發達して、今迄手仕事でやり又小さな工場で家族的にして居つたものが、大工場で組織的にやられるやうになつて來て、そこで總ての經濟上の状態が一變したと云ふことであります。即ち所謂産業革命であります。其原因になつて社會に大變動を起して來た。斯うなつて來ると今迄のやうな小資本では中々大きな機械を使ふことも出来ない。随つて資本を成だけ大きくして行く、さうすると餘計人間を使はなければならぬ。餘計人間を使へば、大勢の間に分業が起る、分業が起るから餘計人間を使はなければならぬが、色々分業を起し、さうして各自が極く一小部分をやると澤山出來ますからして、生産の數が多くなつて來る。さう云ふ

風になつて萬事大仕掛になつて來ますから、大資本を有つて居る者は益々收益が多くなつて來る。即ち富んで居る階級は今迄よりは益々富を餘計造るやうになつて來る。使はれて居る方はどうかと云ふと、是は順當にさへ行けば相當の報酬を受けて賃銀を得て働いて居るのでありますからして、今迄のやうな生活をして居れば宜い。又工場が儲ければそれ丈自分の方にも幾らか恩恵を受けられますから損はしなくなるのであります。又色々な物が安く出來て、豊富の生活が出来るから生活が樂になる譯であります。だから資本主も富みます。勞働者も富むと云ふ譯になつて來ますが、併し其富む割合は比べものにはならない。一方はドン／＼富んで居る、一方は家庭の職人であつた時よりは、大きな工場の職人になつた時の方が何かに依つて身の廻りなどが好くなることありませうけれども、併し其程度は極く僅であります。其位にして行くのであります。所が段々考へて見ると賃銀はさう際限なく増す譯にいかない。何故かと云ふと賃銀が段々増して行けば生産費が高くなるから物價が高くなる譯であります。高くなれば買手が幾らか考へるやうになつて一寸賣れなくなる。賣れなくなつてしまへば困りますから、今度は値段を下げなければならぬ。でありますからさう際限なく工場の方では物價を高くする譯にはいかないやうになります。それでありまして職工にさう澤山の賃銀をやると云ふことは出來ない。それで矢張賃銀と云ふものは或一定の度まで上ることは上りませうけれども、それから先きは上がることが出來ない。それから先き上げれば今度は經濟界に變動が起りますから、又元へ下げなければならぬ。それで職工の方の賃銀には局限がある、資本主の儲かる方には局限が無い、であるから資本主の方はドン／＼儲けて行くやうになるけれども、職工の方は程度があつて賃銀が上らないと云ふやうな現象も考へられる。さう云ふ一つの現象も出來る譯であります。さう云ふ所からして勞働者の生

活は今迄考へて居る程には皆く往かないのみならず、段々と悪くなつて来る。資本主が段々と良くなつて来て、差別が益々大きくなつて来る、比較的今迄の職工の状態から見たならば、確に良くなつて居つても、例へば煙草を喫ふにしても片方の低い家庭的にやつて居る時には悪い煙草で済んだのが、職工となると良い巻煙草を喫ふて見ると云ふことが出来るかも知れない。そこで段々と不平が起つて来るし、色々問題も起つて来るやうになつて来ます。それは極く善い場合を假定したのでありますけれども、若し假りに資本主が悪い人であつたならば、出来る丈儲けて、片方の人が出来る丈こき使つてやらうと云ふので、段々と労働者は悪くなつて来ます。間に事務を執る者の中には色々な者がありますからして、さう云ふ者が間に於て頭をはね上前を取ると、一番困る者は労働者であるから、下の労働者は瘤だらけになつてしまふ譯になる。悪い場合になつて来れば段々惨めになつて来ますから、色々問題が起る譯であります。さう云ふのが今迄の貧富平均の法では到底解決されない、それが十八世紀の終頭からして、段々と歐羅巴の各國に於て起つて居る、機械などの割合に早く發達して居る國々は最も早くさう云ふ状態に達して居る。英吉利だの佛蘭西などは早くさう云ふ状態に發達して居り、獨逸は佛蘭西と戦争があつた爲に、疲弊して居りましたが、十九世紀の中頃に於ては、さう云ふ風な状態が段々と一般に行はれるやうになつて参りました、日本に於てももう數十年來さう云ふやうな状態に段々となつて居ることは是は申す迄もないことであります。即ち工場組織がさう云ふやうな機械などを餘計用ゐるやうになつて来て居るのでありますからしてどんなにしたつて同じにならなければならぬ譯であります。同じやうな條件を與へて居つて、同じやうな結果を生じない筈はないのでありますから、同じやうになるのが當然であります。今日規模は違ひましても、併ながら大體に於て同じやうな状態になつて来ることは、是は當然の現象であると言はなければならぬ。

斯様に十八世紀の終りから十九世紀の初に掛けて段々さう云ふ機運が熟して來たのでありまして、そこで是は打棄つて置けないと一方に考へることが當然であります。昔から貧富の別が劇しくなかつた時でも斯く考へて居るのでありますから、今のやうな時代に於て一層之を憂へる者が出るのは當然であります。さうして一方には人々の自覺が盛んになつて来て、我の發見が段々多くなつて来て、殊に十八世紀になつて個人我の觀念が強くなつて「デモクラシー」の精神が英吉利や佛蘭西に於て盛んになつて来て居る時代に於て此問題が經濟上の問題に就ても行はれざるを得ないことは當然のことです。さう云ふ譯で、どうかして此世の中の不幸な者を救ふてやりたいと云ふことを考へる志士仁人と云ひますか、さう云ふ者が居りまして、正義人道の聲を高くして世の中の横暴なる富豪、財産家、資本家に反省を促すと云ふことをやつたり、或は適當な手段で貧民を向上させようとして居る者が出て居ることは英吉利及佛蘭西に於ても誰も知つて居る通りであります。是等の人は一齊に色々な經營をしたり或は色々な事を説いたりして、議論としては過激な極端な論を吐いて居ります。例へば財産は盗品であると言つたりする人もあります。唯自分は何も骨を折らずに出來た財産、それは一種の盗みものだと言ふ、それなどは理想論としては又許せる議論でもあらうと思はれます。盗みものだと云ふことは少し言葉は過激でありますけれども、自分が何も骨を折らずに唯巨萬の富を黙つて受取ると云ふやうなのは、どうも少しく虫のよいやうな話でありますから、幸ひな人であると言つて宜いか知れませぬが——或場合には幸ひでないかも知れませぬが、俗に考へれば先づ幸ひであるけれども——少しも威張るに足らない、誇るにも足らぬ所が今日に於ても随分さう云ふことを誇る人もあります。又さう

云ふことを羨む者もある、又さう云ふ中に潜込んで行かうと云ふやうな、詰りさう云ふ所へ養子に行かうとかさう云ふ人を嫁に貰はうとか考へて居る人も随分あるのであります。中々さう云ふ風な財産を重んずる精神が減びて居ないやうであります、そんなやうな方に却て危険思想があるか分らぬ。そんなやうな者も随分ある譯です。是は餘計な話であります、とにかくさう云ふものを攻撃はして居るけれども、財産を有することを非難することにまでなつて居ない人も随分此時代には多かつたのであります。たゞ餘り甚しい不均のことを痛嘆して之を正義人道の觀念に訴へて矯正しやうとして居るのが十八世紀の終から十九世紀の初に掛けての社會運動家の仕事であつたかと思ひます。

三

所がどうも是はさう實效が擧げられない、正義人道と云ふやうなことを言つても、中々財産家が聽いて呉れない、安請合だけはして呉れるけれども、中々承知して呉れない、或は折角自分の理想を盡さうとしても、實際の事情に束縛されて結果が擧げられないことになつて、是ではならないと云ふことが段々浮んで來るやうになつて來たものだらうと思ひます。そこで根本的に社會運動の方法を變へやうとしたのが獨逸に出たマルクスであります。マルクスの名は無論今日では最早陳腐のことになつて居ります、今日に於て陳腐なるのみならず、二三年前も嶄新と云ふ譯ではないのであります。一八八三年頃に死んで居る人であるから、マルクスと云ふ人も随分古い人ではありますが、専門家はマルクスの名は前から知つて居りますが、世間一般に響いて來たのは此數年前からであらうと思ふ。其マルクスが十九世紀の中頃に於て獨逸に社會運動を惹起した。そこで根本的に新しい面目を劃しやうとしたのであります。マルクスの考に依れば今迄の人々の社會運動は空想的で

ある、社會問題はもつと實際に社會の状態を考へて見なければならぬ。唯人間の理想とか道德觀念に訴へて居つた所で、そんなことで人間の社會は動くものではない、今日もつと確實なる基礎から論じて行かなければならぬ。科學的の基礎を有つて行かなければ、社會運動の效を奏することが出來ない。何故ならば人生と云ふものが一體科學の支配を受けて居るのでありますから、其人生に於て實效を擧げるには矢張科學の結果を以てやらなければならぬのであります。其處を勝手な理想や何かで論じても駄目であると云ふことがマルクスの主張する所であります。マルクスの如何なる人物であるかと云ふことは、必要がないと思ひますから申させぬが、とにかく學界に於て有力な人でありましたけれども、自分の將來の發達と云ふことを犠牲にしてしまつて、専らさう云ふ報はれない所の運動、寧ろ迫害を大分受ける運動を起して、獨逸に居堪れずして放浪生活をして佛蘭西に行つたり英吉利に行つたりして、同志の士を集めた譯であります。

マルクスの根本の思想は是は誰方も御承知であらうと思ひますし、私も専門的に知つて居る譯ではありませぬから餘り言ひたくはありませぬけれども、順序として申しますと、資本論などを書いて、資本の研究と云ふやうなことで社會運動の基礎を立て、居る。マルクスの考に依ると、資本家の有つて居る資本と云ふものは、労働者の労働力を盗んで或は搾取して拵へて積重ねた所のものである、斯う云ふやうな考であります。労働者が労働して、それに應ずるだけの報酬を受取り、資本家も資本に應ずるだけの報酬を受取ると云ふならば圓滿であるけれども、實際はさうではない、労働者は何時でも餘分の労働をして居る。自分の労働に適當した報酬を受けて居ない、労働者の實際生活に必要なだけの賃銀は出して居るが、それより以上のものは皆資本主の方に入つてしまふ。それ文物價を安くするかと云ふとさうも往かない。ですから儲けは皆資本家

に入つて行く、労働者自身の生活を養ふに足りる勞力は、例へば一日三時間なら三時間働けば十分でありま
す。三時間分に相當するだけの値打が其人の一家族を支へるだけのものである。所が實際に於ては八時間な
り十時間なり働くと、後の七時間なり五時間と云ふものは詰り餘分の労働をして居つて、それは自分の手に
入らない、何處に入るかと云ふと資本家の方に入つてしまふ。即ちそれは剩餘價值である。さう云ふものが
積重つて行くから資本に行く譯であります。それでありませうから資本家は益々富んで、労働者は益々惨めな
風になつて、どうしても一旦労働者の方に足を突込んだら、其足を洗ふことが出来ない。悶けば悶く程奥に
入つてしまふと云ふやうな身分になつてしまふのが今日の社會組織の經濟組織の状態である。併ながら斯う
云ふ状態は是は昔から續いて居るのであります。色々形を變へて續いて今日迄に至つて居るのであります。
昔から何時でも異つた階級が對立して居つて、其間に意見が互に反對して居るから、茲に階級闘争が起つて
居る。さうして争が極に達すると遂に兩方倒れてしまつて、さうしてそこで又新しい世界が出来ますが、其
處に又新しい階級が出来て、さうして其間に相争つて行くと云ふやうにして、昔から今日迄歴史が續いて居
る。世界の歴史を考へて見ると希臘から今日に至るまでの研究を見ると、何時でもさう云ふ階級の闘争を繰
返して居るものであります。其根本の基礎は經濟上の點に在る、經濟上の物資の多いものと少いものとの争
が色々形を變へて今日迄來て居るのであります。今日に於ては資本家と労働者若くは貧民と云ふ形に於て現
れて居るのであります。それは人力の如何ともすることの出来るものではない、人間の理想や何かで以ても
それは變るものではない。或哲學者は世界の歴史は理想で動くものであると考へて居るのであるが、成程此
世界の歴史にさう云ふ連結はあるのであるけれども、其連結は理想の連結ではないのでありまして、經濟上

の關係の連結である。それで以て人間は必然に動いて行くのであります。人間は唯經濟關係と云ふ絲に操ら
れて居る操人形であると云ふやうに考へて居るのであります。理想から説かうと云ふのはヘーゲルの考であ
りますが、マルクスはヘーゲルの思想の感化を受けたものであります。それを他の方面に應用して來まし
て、歴史の連結を有することに就てはヘーゲルのやうに認めて居るが、併しヘーゲルのやうに理想ではなく
して、經濟の關係が歴史の根本努力であると考へて、理想を以て動く人間は自由意志を有つて居る人間と考
へられて居りますが、マルクスのやうに唯經濟の絲に操られて居る人間は、自由意志の人間ではない、全く
物質的に動いて居るものに相違ない、斯様に考へて居るのであります。でありますから世の中は皆自然的で
あつて、なるようにしかたならない、行くべき所より行かない、どんなに悶いた所がそれを變へることが出来な
い、即ち倫理學などで言ふ意志自由に對する必然論を説くことになりませう。さう云ふ風に人間の社會は全く
經濟的關係で必然的に支配されて居るものであると云ふ斯う云ふ考を能く唯物史觀と申しますが、即ち歴史
を唯物的に解釋したものであると見るのでありませう。

斯様にして今日に於ては資本家と労働者と相對して居るけれども、是は此儘に置いて長い間には平均し
てしまつて、そこで新しい歴史が開かれることになる。是が本當に良い歴史になる。出来る丈さう云ふ運動
を速めたが宜い。それにはマルクスの言ふには今日の資本家がいけない、資本が惡の根源であるから之を壊
さなければならぬと云ふので、一種の共産的の社會を唱へる譯であります。併しマルクスの考はどう云ふ風
な組織でやるかと云ふと、何も皆がバラ／＼になつて無茶苦茶に財産を皆に分けてしまつて勝手次第に振舞
ふと云ふのではない、矢張組織を考へて居る。國家的組織と云ふことも出来ませうし、或は何かの組織を以

て財産を管理して行つて企業をして行くと云ふやうになるのでありませう。さう云ふ機運を主張した譯である。即ち斯の如くして唯其道徳心に愼へるとか、澁然たるものでなくして、社會の實際の状態を斯う云ふ必然的の方面から考へて、其機運に應ずる運動をしやうとした。それで議會に多數自分の仲間を拵へて、議會で其輿論を拵へて運動を速めやうと云ふ、所謂社會民主黨を引起して來て居ります。

此マルクスの考が段々に變つて來て、マルクスの同志の中にもラツサルとか色々の人がありますけれども、多少違つて居る。色々な違の中にも或者は國家社會主義と云ふやうになつて居るものもありますし、又或者は必しもさう云ふやうな方面に行かないものもあります。又それが段々と一方に分かれて行つて總て政治上に權力を向けて行くことは害があると云ふ考で、政府を無くなす所の考の所謂無政府主義もある。それも極く平和なものもあるし、又多少亂暴な暗殺したり何かするやうな物騒な急進的なものもある。さう云ふ風な色々な種類も出て來て居る。或は又どうもマルクスのやうに政治上の言論の自由と云ふやうなことでやつて行くことは手緩い、どうしてもそれは出來ない、幾ら政治家に手頼らうと思つても、其政治家は初めは社會労働者に一致して居るやうに見えても、位置を得たりすると段々違つて來る。又政府に立つたり議會に行つたりする人は腐敗して居ると云ふことから、さう云ふやうな所に手頼らずに産業者自身が直接に運動しなければならぬと云ふやうになつて來て居ります。即ちそれは佛蘭西の「サンヂカリスト」であります。佛蘭西の政治界が十九世紀の中頃から以後に非常に腐敗したものでありますからして、人々が最早政治界には失望してしまつて、手頼ることが出來ない。そこで産業者自身が自ら運動を始めることになつた。それはどう云ふことをしたかと云ふと、「ストライキ」をするとか「サボタージユ」をするとか云ふことをして、詰り他に方法が無い

ので、さう云ふことをして自分の意志を徹さうと云ふ者も出來て來たのであります。中にはそれに澤山の弊害が生じて來たのもありますし、又秩序整然として行はれて、餘り騒動なしに目的を達する場合も起つて居る。併し又、是は餘り極端である、さう産業者ばかり労働者ばかりが經濟上の權威を握るべきものではない。資本者も無論關係して居らなければならぬ、又消費者即ち吾々も參與する權利があつて宜いものである。それで經濟上には是等のものも入れなければならぬ所から、さう云ふ所から色々折衷説が出來て英吉利の「ギルドンシヤリズム」が出來たり、又その色々變形が出來て居るやうになつて居りますが、根本から云ふと皆是は社會の經濟上の不平均を或方法で以て訂正したいと云ふ、斯う云ふ精神から出て居ることは言ふまでもない。其中に段々と過激になつて來るものもありますし、又色々事情から穩健になつて居ると云ふやうな差別はありますが、根本精神の所から云ふと、前申すやうに一に歸してしまふ譯であります。

是は戦前から起つたことであります、十九世紀の末から二十世紀の初に掛けて段々斯う云ふ運動が起つて居つたのであります、御承知の通り戦争に依つて非常に經濟上の状態が變つて來たが爲に、益々此問題が激しく現れて、さうして今日に於ては斯う云ふ運動はもう世界の一つの共通の現象となつて居るやうに見えて來たのであります。日本に於ても中々盛んになつて來て居ります。日本に起つたと云ふても残らず起つて居ると云ふのではない、まだそんな所に少しも觸れて居らない所もあります。農村の社會などに於ては恐らくはさう云ふことが起つて居らぬだらうと思ひます。マア主に工業の地方だらうと思ひますが、併し根本精神として考へれば決して農村だつて無いとは言へない、段々不平が起つたり、青年が農業が厭やになつて來たり、都會に出て來たりすると云ふのは根本の精神に於ては同じことである。それを都會に行つてはいけな

いからと云ふてギウ／＼と抑へ付けた所で仕方がない、行きたい者なら行くやうにするが、さうでなければ行かないでも済むやうな考にしなければならぬ。兎に角斯う云ふ問題は随分起つて居ります。それで人はさう云ふ事は西洋感れをして外國の眞似をしてやるのだと云ふ、或は一二の人が煽動するからやると云ふことを云ふ人もあります。それはさう云ふこともありますが、實際多數の運動は皆さうであります。煽動と云ふと語弊がありますけれども、誰か一人音頭を取らなければ大勢の人がやらない、けれども大勢の人が考へて居ないことが出来るかと云ふと、それは出来ない。幾ら其處で或人が絶叫して見ても氣分が熱して居らなければ葬られてしまふ。それで賛成者が出来ると云ふのは、多數の人の心の中に無意識に有つて居つたり、現すことが出来なかつたり、或は勇氣が無かつたりする、それが口を開くので、大に共鳴をすることになるのであります。でありますから或人が言出して賛成を得ると云ふ場合には、決して此人が煽動すると云ふことにはならない、煽動するなど云ふて夫程其人に力が有る譯ではない。若しさう云ふことが出来ると云ふならば、昔からさう云ふ偉い人が不遇になる譯はない。そこで能く煽動とか何とか云ふ言葉を聞きますけれども、煽動する者は無論悪いに定つて居りますけれども、併ながら煽動される方も多少さう云ふ考を有つて來たのだと云つて差支ないと思ひます。それで又外國の思想に感れるとか何とか云ふけれども、此外國のものも全く自分の身に引移らないものは感れやうと思つても感れない、吾々がむづかしい本を讀んで面白いと言はれても、むづかしくしても解らないのは馬耳東風であつて、それからして讀んでやつとことと解つても夫程腹の中に染みて來ないものもあります。話を聴いてもさうだらうと思ふ、マア言ふことは解るけれども、能く腑に落ちないと云ふことがあります。即ち同じやうな思想の狀態に一致して居ない。丁度此所が非常に面

白いと斯う云ふやうになつて來たときには、面白いのではない、自分の考へた所が其處に在るので興味を感ずることが多い。人に依つては私の強い人は本を讀んでもさう云ふ所ばかり見て居る、唯自分の考だけ見て居つて、自分の考に一致しない所は解らないから棄てしまふ。或人は書物を讀んで居つて此處が面白い、平生考へて居つたことが悉皆書いてあつたから面白いと云ふ、さう云ふ人は進歩しない人である、それでは困る。

それで今日色々な事が起つて來て、中々やがましくなつて居ることは皆善いとは決して言はない、又實際やつて見ると随分變なものが澤山あります。併し大體の精神を掴んで考へて見ると、矢張一つの行くべき道を示して居るものであると考へられる——行くべき道かどうか知れませぬが、世の中の所謂大勢を示して居る。そこで問題は斯う云ふ風な社會運動が果して皆正しい道に向いて居るかどうであるか、それが果して此儘にして行くのが宜いのであらうか、此方に向つて行くのが宜いのか、今日の社會運動が凡て何れも皆同じやうに是認されるかどうか、其處に於て私は其方法としては昨日既に述べた所の途を執りたいと思ひます。今日の社會運動を手嫌ひして資本家の立場から見ると、今の労働者は我儘でいかない、賃銀を此位増したからも少し増して呉れと云ふ、時間を此位減したらもつと減して呉れとつけ上つて仕方がないと云ふ。労働者の方から云ふと、資本家は呉れる／＼と云つて呉れないで自分では贅澤をして居ると云ふ、それが果して正當を得て居ると云ふやうに、唯一方の立場から見ると論ずることでは何にもならないと思ひます。出來る丈眞中に居つてもう少し兩方の言ひ分を考へて見る必要があるのであります。それには昨日述べたやうに是等の議論の根據を探して見ることが必要であります。どう云ふ所から斯んなことが起つて來たのか、歴史的の根據の

大體は述べましたが、一步進んで理論上の根據を考へて見たい。社會問題の基礎になる所の社會思想の根本の原理から即ち哲學的根據たるものを考へて見て、資本家はどうか云ふ哲學的根據を有つて居るか、勞働者はどうか云ふ根據を有つて居るか云ふことを考へて見て、其根據を調べて見たならば、各々言ひ分が理解され或は一致することになるかも知れないと云ふ點が其處から出て來るだらうと思ひます。或はもつと新しい道を其處から開いて來ることが出来るのではなからうかと思ひます。さう云ふ風にして考へて見たいと思ひます。

第三回

前の時間には色々の社會論の起ることを申しまして、大體に於て是等の問題の基礎を述べました。今日に於ては吾々の社會に於ても亦色々の論があるやうであります。併し先程申しましたやうに近世の狭い意味の社會主義と云ふものの源泉を爲したのはマルクスであります。其マルクスの考を飽迄も嚴密に維持しやうと云ふ側の者が殊に一方の狭い意味の社會主義と考へられて居るものであらうと思ひます。併しそれは既に獨逸に於ても亦他の歐羅巴諸國に於ても色々形を變へて居るのでありますが、随つて日本に於ける社會論の中にも、廣い意味では社會主義と言はれませうけれども、結果に於ては随分それと正反對と云つても宜いものもあるのであります。併ながらどう云ふ點が其れであるか、或は言葉を換へて言へば狭い意味の社會主義或は純粹のマルクス主義のものと考へられて居る點は何處に在るか云ふと、先程申した唯物史觀と云ふこと

を根據として説くと説かないとに於て分れて行くと思ひます。或はもう少し之を源泉に遡つて唯物論で以て總ての社會問題を解決しやうと云ふやうな説と、さうでないものとの二つに分けることも出来るかも知れませぬ。

但し唯物論と唯物史觀とは實は同一ではない、唯物史觀と云ふのは詳しく言へば唯物論的に歴史を觀察するのでありますから、唯物論が基礎になつて居るやうに見えますが、併し此處で言ふ唯物論と云ふのは哲學的に言ふ唯物論ではなく、即ち世間に普通考へて居る唯物論とか物質論とは少し意味が違つて居る。所謂唯物史觀は歴史の原動力を經濟上に置くと云ふことに歸するのである、而して經濟の事實は廣い意味で言へば所謂物質的のものとも考へられますから、そこで自然唯物論的と云ふ言葉が出来て來たのであらうと思ふ。併し哲學的に謂ふ唯物論と云ふのはもう少し意味が複雑になつて居ります。又哲學上に於ては今日なほ之を取るものもありますが、併し今日に於ては餘程陳腐と云ふて宜いか、或は成立しにくい思想である。陳腐でも何でも構ひませぬ、舊くても間違つて居ると云ふことにはなりません。唯物論と云ふ思想は哲學上の説としては成立しにくいやうに見える、併し今日の社會主義論者の中にもマルクスの唯物史觀のみならず、唯物論までも唱へて居る人がないではありません。斯う云ふ説を唱へて居る人は自信力が強くして、夫れ以外の考を有つて居る者を唯心論して嘲つて居ます。元來唯心論と云ふ言葉も漠然として居りますが、廣い意味の哲學を言ふ者は大部分此中に編入されることになる。即ち唯物論者は唯物論だけが新しくして、唯物論でないものは舊いものだと云ふて居るものであります。社會改造の基礎は唯物論では足りない、など、云ふ者は是は昔の理想に囚はれて居るものであると論するのであります。私共は文化と云ふことを言ひますが、此文化などと云

ふことも其が唯物論に於て説けない限りやはり誤まつた觀念で、其説は資本主義の方に傾いて居るとまで云ふ者もある位であります。さう云ふ人は極力唯物主義を唱へて、労働本位労働萬能の思想であると云ふやうな傾向になつて居るのであります。今日露西亞の「ボルシェビズム」がどう云ふものであるか、真相は中々判らない點もありますが、普通に悪く解釋せられて居る所の「ボルシェビズム」の意味は多少さう云ふ風になつて来る點もあります。尤も私の言ふのは必しも「ボルシェビズム」のことではありませぬが、兎に角さう云ふ物質主義の社會改造と云ふことを主張する論が中々一方にあるのであります。其論を私は正面から批評すると云ふことの前に、所謂唯物主義、物質主義と云ふことの意味の今日の哲學上に於て不完全になつて居ると云ふことだけを、先づ第一に説いて行きたいと思ふ。

吾々の目に觸れ耳に聞へて居る所のものは皆物質の變化であると云ふことは、是は俗に常識的に人の許す所であると思ふ。それで吾々は割合に物質に囚はれて居るのであります。口では精神が宜いとか物質は卑賤だと云ふことを言ふて居るけれども、どうも物質の方が確實であると云ふことが、割合に人の心を支配して居ると思ひます。日本の古來の思想に於て、物質本位の思想は中々勢力があつたものであります。固より物質主義ばかりではなく、色々のものがありました。元來物質の思想ばかりあると云ふことは決して出來ないものであります。たゞ或人が考へて居るやうに日本人は非物質的のものではないと思ひます。それは決して日本を悪く言ふのではない、當然の話であります。何處の國でもさうであります。物質的精神が無いと云ふものではありませぬ、人間として土地に住んで居り、身體を具へて居りますから、どうしたつてさう云ふものを重んずる、物質的思想があるのは當然であります。それでありませぬから割合に之に囚へられて居る。

此物質と云ふものは中々吾々の思想界に於て力の強いものであります。でありますから唯物論とか何と云ふむづかしき哲學的の言葉になると、それは普通の人はどうでも宜い譯でありませうけれども、兎に角何の彼のと云つた所で、物質と云ふことが吾々の考の基礎になることは承認せざるを得ないと思ふ。併しそれを少しく考へて見ると疑はしい點が出て来る。物質上の現象を研究する、物質科學の所に於て物質觀念を段々吟味して來ると、何だか分らなくなつて來るのであります。何が物質であるか、斯んなものが物質であるか、物理学で謂ふ物質は決して此處に現れて居る斯う云ふものではない。斯う云ふ物體を構成して居る其或物が物質であるに相違ない、それは吾々が見ることが出來ない。それでも物質の根源は或は分子であるとか、逆も肉眼で見ることの出來ない小さな分子であると云ふか知れない。或はそんなものではない「エネルギー」の變化である、「エネルギー」の現れが物質になつて居るのであつて、吾々が科學的に確實に知り得るものは「エネルギー」であると思ふ。斯う云ふことになる物質と云ふ觀念が異つて來る。斯んなものは物質ではない斯んなものよりも確實なものは「エネルギー」であつて、それが本當の物質だと云ふことになつて來ると、マア俗に言ふ物質とは異つて來る。或は「エレクトロン」にしても其「エレクトロン」はどんなものであるかと云つた所で、逆も吾々の眼に見ることが出來ない、非常に小さなものであつて、小さいと云ふ言葉を使ふことが出來ない位小さいものであつて、極く僅な所に何萬もあつて、それがどの位宛段々消えて行くと云ふやうな風になつて、詰りそれは數學で推して測つて行つたものであります。詰り吾々の思想上に造り出した所の一の考に過ぎない、概念に外ならないものであると云つて宜いと思ふ。物質と云ふ言葉は、之を換言すれば一の思想上の假定であります。假定と云ふても空想ではありませぬ、即ち科學的の根據を有つたものであります。

すから、假定と云ふ言葉を使ふことは悪いか知れませぬが、要するに思想上に於て斯う云ふことを立て、置かなければ、先きの論が出来ないと云ふ所から造つた所のものであります。それでありますから或意味に於て物質は思想的のものである、精神的のものであると云つても宜い、物理學者の言ふ所の物質は案外精神的のものである。意識の産物であると云ふことを言つても差支ない譯である、自然科学の結果はさう云ふ風になつて來るのであります。

此頃日本にも有名になりましたし、最近又日本に一寸來て歸りました彼の英吉利のラッセルが最近に著書を出して居りますが、それは倫敦や支那等で講演をしたものを基礎として書いた物で、「心の分析」と云ふ題で以て心理哲學との根柢に横つて居る問題を論じて居る。ラッセルは社會問題について中々過激なことを言つて居ります、理論一方で論ずるものでありますから、理論的に随分徹底した過激な論を吐いて居りますが、併し其本領は哲學に在るのであつて、而して哲學に於ても徹底した過激な論を書く方ではありません。私は嘗てラッセルのことを尖つた人と云つたことがあります、鼻も尖つて居るし頤も尖つて居りますが、思想も尖つて居ります、社會の問題に對しても、哲學の問題に對しても尖つて居る。尖つて居りますから其尖つて居る針にさゝれると痛いのですけれども、確に一個の人物でありますが、其人が最近哲學の問題に關する書物を出して居るのが即ち今いふ所のものです。其中に近頃では心理學者が却て物質の方に重きを置き、物理學者が心の方に重きを置く傾向がある、逆になつて居る。亞米利加の心理學者は動作心理學と云ふて人間の精神的意識的作用を動作の方からばかりで心理を説明して行かうと云ふ、意識現象を生理的の動作の方から説明して行かうと云ふ、即ち心理の特色は無くなつてしまつて、物質的動作の方の働きになつてしまふ、さう云

ふ傾向になつて居る。所が物理學の方は段々論じて行くと、時間も空間も皆相對的のものであつて、さうして物質も心の創造したものであると云ふやうになつて來て、最近に於てはアインスタインの相對性の論もさう云ふ風のことを述べて居ります。昔の物理學者の考へて居つたやうに絕對的空間とか絕對的時間とか、絕對的運動とかと云ふことはアインスタインの論では成立たぬやうになつて來ました。さう云ふ風になつて來ると物理學者の言つて居る論は却て意識的になつてしまふと云つても宜い。それからラッセルの考へは結局物質と云ふものはさう云ふ風な意識的の方から説明が付くものと説いて居る。但し意識は勿論昔の心理學者の言ふやうな意味のものではありませんが、兎に角理論的の産物であると云ふやうに主張して居るので、俗に考へて居る形を具へたものが物質でも何でもないことになつて行くやうであります。是は私も今迄の物理學說の變化して行く所を見ると、どうしてもさうなるだらうと豫て思つて居りましたが、ラッセルの言ひ方は餘程面白いことを言つたと思ひます。

さう云ふやうな譯で此物質と云ふことの意味が斯様に論理的のものになつて變つて來て居る、それが大勢だと思ひます。さうなると唯物論とか物質主義だとかと云ふことを無造作に言つて、何しろ物質が基礎である、社會改造には物質の方から始めなければならぬ、麵麩を與へよと云ふ所に石を與へても仕方がないと云ふやうなことを言つて、それが即ち本當の科學的である、物質的である、實際的である、さうでないものはそれは唯資本家の手先に使はれて居る議論に過ぎないのであると論じて行く傾向が一方にあります、併し其物質なるものが決して明白ではありません。成程腹の空つて居る時に麵麩を與へないで置いて、美味い話ばかりして聴かした所で、それは實際役に立たない、實際に於て麵麩を與へることは勿論適當な意見で

ありますけれども、併しそれを理論的の根據に遡つて考へる場合に、物質論だけで行くのが本當の社會改造の途であると言ふ論をするならば、それは大なる誤解であると言はなければならぬ。何となれば物質其ものの考が最早論者の考へて居る通り物質的のものでなくして、論理的のものでありますからして、物質を興へることは論理を興へることになつてしまふことになるからであります。即ち論者の議論は不精密なる間違つた思想を根據として居るものであると云つて宜いと思ふ。

是は議論を極く理論的の所に持つて行つたのでありますが、唯之を實際問題として考へて見ると、それは確に意味がある。實際上食を興へないで置いて、救済の途を講じやうと云ふのは間違つて居る、疲れきつて居る所者には道德も宗教も何も言つて居られない、さう云ふ者に向つて道德宗教の話をして何もならない譯であります。マルクスが十九世紀の中頃に獨逸に於て科學的基礎によれる社會主義を唱へて、資本家の横暴なることを嘆息し、それに反抗して色々の説を唱へたことに就ては、其議論の實際的の意味を認めなければならぬと思ふ。今日色々の社會運動を惹起す人の精神の中にも、それと同じことがあり、又事情がさうなつて居る場合もあるだらうと考へても宜いだらうと思ひます。私は實際の事を調べても居りませぬ、又餘りさう云ふ事に興味を有つて居りませぬからして、何處迄が宜いかなどと云ふやうなことを云ふことは致しませぬが、恐くは全く無意義のものばかりではないだらうと思ふ。一方の人の考へる程無意味ではない。一方の人の考へる程有意味だとは思ひませぬが、餘り無意味なれば問題になる譯はない、何か其處に理由がなければならぬ。それであるから實際問題として考へるときには、物質を主とする所に意味が有るのであります。併し論者はそれ丈で満足して居ない。どうしても論を進めて行つて、社會を論ずる場合に於て物質を

基礎にしなければいけない、物質以外のことを言ふのは、或は今日の科學的の基礎を離れて論を立てることは、それは間違つた陳腐な思想であると云ふことになる、それで議論をして見たくなる。即ち論者の謂ふ物質は何ものであるか、物質其ものは論理的の産物ではないか、斯う云ふ風に答へたくないのであります。それは理論的のことでありませぬ、とにかくさう云ふ理論的の薄弱なる點があるのであります。是だけで以て總ての問題が解決出来ないことになるのも相當だらうと思ひます。或部分の——或手段の改造とか或事情の改造とかと云ふことには、此議論でも通るかも知れぬ、即ち現在衣食住の生活に苦んで居る者を救ふ爲には、先づ衣食住の満足なる生活を興へなければならぬと絶叫するのは、是は當然の話であります。けれどもそれ丈で宜いと云ふ感を興へるやうにしたならば、其結果は決して満足にはならないだらうと思ふ。ふ所が物質的基礎からばかりで社會の事を論じやうと云ふ議論は、さう云ふ所に了つてしまひはしないかと云虞がある。それで物質上の満足が十分に得ることは、是は實際に於て望まれないことでありませぬが、併し假に大體に於て物質上の満足が得られたとしたならば、それでもうする事は無くなつてしまふ。さうすればそれで宜いことになつてしまふ。それで此世の中が確に善くなるかどうか、資本家が十分なる物質上の満足を得て居る、労働者も十分の満足が出来て居ると云ふだけで、社會改造が出来たと云へるかどうか、世の中が善くなつたかどうか、労働者もそれで満足が出来るかどうかと云ふと、さうはならないと思ひます。資本家は物質上の満足はして居ると云ふけれども、随分多數はさう云ふやうなものであるかも知れませぬ。餘り知識も無く趣味も無く、唯衣食住の贅澤の生活をすればそれで宜いと云ふ位の資本家も居るか知れませぬ。それを見做ふ労働者もそんな所で満足して居るか知れませぬ。併ながら教養ある資本家なり富豪なり或は相

當の資産を有つて居る人があつて、色々又自分の趣味要求に應ずる事をして居る場合に、労働者がそれを見て、労働者の方にも多少眼が開いてさう云ふ事に興味を有つ人が出来たならば、どうなるか、矢張それを要求するだらうと思ふ。例へば或「ブルジョア」は成程衣食住の満足しか何もない、衣食住の満足と云ふことも意味はむづかしいが、元來趣味が無いから金さへ使へば宜いと云ふ譯で、所謂成金式の遣り方をやつて、使ひ場が無くつて困つてしまふと言つて居るやうなものも出来るかも知れませぬが、偶々其中に教養の有る者は音楽を聴くか知れない、或は良い藝術を味ふかも知れぬ。或は良い書物を集めて見るか分らない。或は同じ住居を造るのでも唯大きな金の掛かる家ばかりではない、凝つた物を造るか知れない、衣服にしても唯金目の掛かる着物ではない、其處に意味の有る着物を造るか知れぬと云ふやうなことにすると、さう云ふものを見て其處に段々興味を感じることに労働者がなつたならば、今迄の自分等の要求した所だけでは足りない、また他に人生に意味のある所をしたと云ふことになると思ひます。さうすれば唯物質上の満足だけを盡したからと云ふて、衣食住の問題は解決は出来ないと思ふ。善い悪いは論じませぬが、實際としてさうはならないものだらうと考へるのであります。

二

さう云ふ風に觀ますと今日物質上の方面からばかりで以て、社會問題を解決しやうと思ふ者があつたならば、其事も或は手段が過激になつて往けないとか、亂暴のこゝろをして往けないとか、社會の秩序を紊して往けないとか何とかと云ふさう云ふ問題を離れて考へて見ても、單にさう云ふ根柢の基礎から考へても、非常な一面的な基礎しか有つて居ぬ、と云ふことが出来るだらうと思ひます。所謂一而的の基礎とは或不明瞭の物

質的の觀念を基礎とした哲學を背景に有つて居る思想に過ぎないので、思想として非常に不完全なものである。其處へ労働者が徒黨を組んで亂暴するとか、さう云ふことの弊害は無論ありませうが、其處を離れて考へても、假にさう云ふ事が無くしても、夫だけのことと社會を改造して行かうと云ふやうなことは少しく間違つて居る淺薄な不明瞭な哲學的根據を有つて居るといふ缺點があるのであります。それは何故にさう云ふかと云ふと、詰り是等の思想は昨日申した哲學の二つの系統に就て考へて見ると、總て哲學の原理を經驗から説いて行かうと云ふ思想、即ち經驗論派の流れであります。此不完全なる解釋に依る經驗萬能の思想から來て居る哲學的根據を有つ思想である、と考へて宜いと思ふ。さう云ふ結果は色々の時代に於て色々の形に於て現れてありますが、十九世紀に於ては特に實證主義、自然科學萬能主義、自然主義等と言はれる思想の傾向に屬するものであります。前述の社會論は又自から夫等の思想の有つて居る所の缺點を備へて居るものであると云つて宜いと思ふのです。科學の尊ぶべきことは論ずるまでもない話であります。此に所謂科學は主として自然科學の意味であります。而して此自然科學と科學とを全然同一視すべきか否かは別の問題であります。とにかく自然科學が今日の文明に非常な貢獻をして居ることは、是は言ふまでもないことでありませぬ。併ながら此自然科學萬能主義は自然科學を研究することとは違ふ、自然科學には其の研究し得る領分があります。元來自然科學と云ふ其ものが何かの根據に依らなければ成立たぬものであります。吾々が自然科學を研究するときには自然現象に關して吾々が認識し得るもの、自然現象を知り得ることを假定して居る、而して自然現象を知り得る爲には、是等の自然現象が一定の秩序を保ち、其間に原因結果の法則が支配して居る、と云ふことを假定して居るのであります。若し自然現象が勝手氣儘なものであるとしたら

ば科學が成立たない、けれども科學が假定するさう云ふ法則は現象中に自から具つて居ると言へるか、自然現象が自分原因である、自分は結果である、と名乗つて出るのでないことは言ふまでもなく、唯前後色々な現象が引續いて起るだけでありませぬ。それを吾々は自分で定めて、此方は原因である、此方は結果であるだから將來に於ても斯う云ふ原因の事情が起れば、斯う云ふ結果が起るだらうと云ふことを論じて居るのであります。さう云ふ事が出来ると云ふことを吾々は豫想して居る。而して其れがどう云ふ根據で出来るかと云ふと、其處には吾々自身の知識の能力が假定されなければならぬ。さう云ふことを假定して初めて自然科學が成立つのでありますから、自然科學其ものは吾々の知識の中にもさう云ふ力があるものだと言ふ假定の下に出来て居るものと言はなければならぬ。随つて自然科學は其知識に統一せられ得る限りの事實を有りの儘に受取つて行くだけで、其事實が結局吾々に對してどう云ふ意味を有つて居るものか、善いか悪いかと云ふことは少しも示して居りませぬ。善いか悪いかと云ふことを言ふのは、丁度其の知識を有つて居る吾々自身が、別の標準によつて定める話である。雨が降ることは自然の出来事でありませぬ、何故雨が降るかと言ふことを研究するのが自然科學であります、けれども雨が降るのは宜いか悪いかと云ふことは、別に自然科學の方で言ふことが出来ない、各々の立場に依つて其雨を宜いとすれば宜いとす。さう云ふやうに或事件に就て其事件の價値を考へることは、是は事件其ものから直ぐ出て來ない、事件と人間との關係、所謂物と我との關係から生ずるのであります。吾々はさう云ふ風の價値の世界に住んで居るのでありますからして、どうしても其處に科學的の見方以外の見方を持つて來なければならぬことになつて來るのであります。所が科學だけで以て一切を解決して行かうと云ふ思想は、さう云ふ所まで科學をやつて行かうと云ふ、さうなる

と自然科學萬能主義、自然主義であります。價値の世界を自然の世界として考へて行かうと云ふ立場になつて來るのであります。人間が餓えれば死ぬと云ふことは是は自然的の出来事でありませぬ。けれども或場合に於ては寧ろ餓えて死んでも構はない、渴しても盜泉の水を飲まずと云つたやうなさう云ふことが出て來る。其の渴しても盜泉の水を飲まずと云ふことが宜いかどうか、それは問題でありませぬが、是は自然科學以外の材料に據らなければならぬと思ふのであります。

さう云ふ譯で自然科學で説けない領分があるのに、之を無理遣に自然科學で説かうと云ふのが自然科學萬能主義であります。是は決して自然科學を悪く言ふのではない、自然科學の範圍を擴め過ぎて、或は自然科學其ものが智識の結果として出来たものと云ふことを忘れてしまつて、初めからさう云ふものが出来たかと思つて居るやうな態度を非難するのであります。左様に自然科學を妄信すると自然科學で何でも説けるやうになつて來て、自然科學で哲學を説くやうになつて來て、所謂科學的哲學を生じます。然し本當の科學者はさう云ふことをやらない、本當の科學者は自然科學の領分を守つて、自然科學は自然現象だけを取扱ふものと考へる。それからもう少し考へる人は全體自然科學の原理は果して絶対的の確實なものかと考へて、遂に其は相對的である、或約束に依つて定めたものであると考へ、即ち自分の智識を擴めて行く爲の手段として法則を設定するのだと言つて居ります。例へば奥太利のマツハの如きは科學と云ふものは法則などを作るものではない、法則を作る爲には思辨像想が入るのであるが、科學は自然の現象を忠實に記載すれば宜い、併し忠實に記載することは、有ゆるものを記載するものではない、そこで選擇をしなければならぬ、どう云ふ風にやるか、出来る丈簡單にする、出来る丈簡單に考を運らすやうに作る、其手段として色々な概念や、法

則が出来るのである、と云つて居ります。でありますから科學上の概念や法則は時々刻々變つて行く、それであるから學説は絶對的の猛打が無いものと云ふことをマツハは考へて居ります。更に又佛蘭西のボアンカレは數學物理學の原理も約束であると云ふ、併し約束であるからと云つて無暗に勝手に破つても宜いのではない、是は大勢の人が認めて居る約束で、確實なものでありますけれども、要するに約束である。何故かと云ふと數學で取扱つて居る時間とか空間とかは絶對的のものではない、約束に依つて出来て居るものであります。そんな風にして科學其ものは約束なり或手段として出来て居るものであるからして、科學は決して絶對のものではない、科學の結果は決して絶對のものではない、科學を造る所の方が寧ろ絶對と言へるか知れぬ、科學を造る者たる人間の智識の働と云ふ方に根據がなければならぬと云ふ。併ながら物質なども唯意識の要求として起つた所の論理の産物であると云ふことも言へるかと思ひます。

此の如く既に科學者自身の中からも斯様な説が出て居るとすれば其科學の或結果を持つて來て、其不完全の結果から物質と云ふものは分り切つたことに考へて、物質が社會の基礎でなければならぬと云ふやうに論ずる議論は、非常に淺薄な基礎になつて行くものと言はなければならぬと思ふ。所謂陳腐と稱するのは、此處から言へるのであると言はなければならぬと思ふ。さうして見ると此議論を基にして、さうして此勞働者の衣食住のことは第一の問題である、それより以外のことは考へる必要がない、餘計な御世話である、文化主義などと云ふことは餘計な御世話であると云ふのは、殆ど意味を理解して居ない所の議論であると言はなければならぬと私共は考へて居ります。

随つて又勞働者其ものを定めることに就ても同様の理論が言へるのであります。勞働者を尊ぶこと、勞働

者の價值を認めることは當然であります、特に勞働者なるが故にと云ふ議論は出て來ない。殊に勞働と云ふことは曖昧であります、勞働を筋肉勞働と云ふことに限ると云ふことは偏狹な物質的思想から出て居るので、精神を勞働する者も精神ばかり勞働させることが出來ない、筋肉も勞働しなければならぬ筋肉勞働者でも精神を空にして勞働は出來ない。でありますから意味は曖昧になつて來ますが、趣意は判つて居るのであつて、詰り今日非常に輕蔑され、又非常に一方の生活に不幸の多い所謂筋肉勞働者、鑛山の抗夫とか或は全く無意味な機械的勞働をして居る者を眼中に於て居る論でありませうが、成程さう云ふ状態を改善することが最も急務だらうと思ひます。併ながらそれが一番宜いと云ふ論は立たない、さう云ふ人でなければ産業を支配することが出來ないと云ふ議論は、是はどう考へても理窟に合はないと思ふ。自分が勞働しない人間だからさう云ふことを言ふのであらうと言はれる夫れ限りであるけれども、一體私は極く不精な人間で勞働を嫌ひな方であります。それで勞働問題を論ずることは可笑しいやうですが、併し私は普通の勞働はしませぬが怠け者と云ふ譯でもない、本を讀むとか話をすると云ふやうなことは相當にしないこともない、それが自分は勞働だと思つて居りますが、併し鐵を持つて働いたり何かすることは私は嫌ひであります。鐵を持つて働かないで、口ばかりで理窟ばかり述べて居る者は駄目だと云ふやうになつて來れば一言もありませぬがどうも鐵を持つ方が偉くして、本を讀む方が偉くないと云ふ論も立たない、と考へて居ります。露西亞の過激派の方などはどんな場合に於ても鐵を持たなければいかぬと云ふやうな主義であるやうですが、人によつては鐵を持つて一時間も働いて居ると、疲れてしまつて後で何も出來なくなつてしまふ。それよりか藝術の上手な人は鐵を持たずに藝術の方に従事して居つた方が良くなるか知れませぬ。ラッセルなどはそこ等の所

は大變考が違つて居つて、今日所謂高等遊民と云ふ生活を多少是認して居る。働くことの嫌ひな人は勞働しなくても宜い、兎に角誰にでも食へるだけのものはやつて居る、其上でもつと働きたい人は働け、さうすれば賞銀を與へる、又何日でも掛つて繪でも描いて居やうと云ふ者は繪でも描いて居れと云ふ。此社會ならば大分私も安んじて生活が出來ます、毎日半日は是非共働を持つて働かなければならぬと言はれると、さう云ふ世の中になればやらないこともありませぬ、やつても見ますけれども、何だか半日損したやうな感が極く率直に申すと私にはあるです。兎に角色々勞働の解釋はありますが、さう云ふやうな是非筋肉を勞しなればならぬと云ふのは、矢張物質本位の考が入つて居ると思ふのでありますが、過激なる社會論の人はさう云ふ考を有つて居ります。さう云ふ人々は自然科学其ものの意味が科學者の方に於ても既に批評されて居ると考へて見たならば、かく自然科学萬能主義に基いて居る社會改造論は餘程考へて見ても宜いのではないかと思はれます。

三

所が今までは此論は主として社會主義の人や、所謂資本家に反對する勞働者の方の議論として説いたのでありますけれども、資本家の方に於ても今日同じやうな考に立つて居る人が多いと思ひます。物質主義から來て居る社會論は、決して資本家を押倒さうとか、所謂共產派とかと云ふ危険な思想の方ばかりにあるのではなくして、資本主義と今日言つて居る人々或はそんな主義と言はないでも實際に於て資本の利益を受けて色々生活をして居る所の富豪、成金或は権力者、其資本主義と結合して居る所の官僚主義と云ふか軍閥主義と云ふか、何しろ總て社會主義の人が敵視して居る人々、さう云ふ人々の間にも案外にも物質主義の精神が

基礎になつて居るのではないかと思ふ。第一に是等の人の主張して居る所は資本萬能の主張であります。總て資本主義の人々は資本を第一に考へて居る。資本さへ有れば何でも出來ると云ふやうに考へて居る。是は確にさうでありませうが、資本家が資本を運用する爲には相當の技能の有る人の援けを借りる、即ち技術家とか學者とか經營家と云ふやうな者、所謂知識階級の者の力を藉るのであるが、之を力を藉りるとは言はないでそれを使役する、詰り雇人にすると思つて居ることもありませぬ。知識階級の人には知識も何も無い金持の事業を援けて居る積りであつて、自分では援けて居ると云つて居るでせうけれども、實は向ふには使はれて居る、兎に角一定の給料を貰つて骨を折つてやつて居る。さう云ふ風になつて居つて、順序から云ふと、知識階級の者などよりも、資本が一番大切である、即ち金である、さう云ふ物質的のものが一番大切である、それで以て他の者はどうでも働かすことが出來る、學者が生意氣なことを言へば解雇して仕舞つて、他に學者を探して來れば何時でも出來ると云ふやうな考の者が暗々裡にあるとしたならば、是等は勞働萬能と同様な物質主義から來て居る解釋だらうと思ひます。夫程極端に言ふ者もないでありませうけれども、亦知識階級の方の者は夫程願使されて甘んずる者がありません。夫程極端に言ふ者もないでありませうけれども、大體それと同じやうな形式のものがあつたとしたならば、物質主義の思想は決して過激な意味の勞働萬能の思想にのみあるのでなくして、資本家の方の側にも大分あると云つて宜いと思ふ。又知識階級の人暗々裡にさう云ふ人を容認して居る者があつたならば、それもさう云ふ風な思想に傾いて居るものであると見て宜いのであります。斯様に考へて見ると中々物質を基礎にして居る社會問題の解釋は範圍が廣いのであります。決して一部分ではない、さうして世の中で以て大變危険視したり何かする方の人ばかりでないのであつて、案外に表面上

平和のやうな考になつて居る者の中にもさう云ふ思想があります。即ちと換へて見れば結果に於て左程悪い害を起すものと見られて居ないと思ふものの中にも斯う云ふ思想があると云つて宜いのであります。でありますから前から申すやうに或哲學的根據其のものが善いとか悪いとかと云ふことは言ふことが出来ない、けれども、哲學的理論の方面から言つて多少疑つても宜い、と云ふことが斯う云ふ場合には残つて居る、と云ふことだけは注意することが出来ると思ひます。それで私は主として、過激な社會主義を説く所の中のみならず、それに正反對の資本主義を主張するやうな人々或は富豪、成金で世の中の進歩を圖つて行かうと云ふ人々にも、案外に唯物的の論が支配して居ることがあり得ると云ふことを論じたのであります。

四

そこで次に起る問題は、今まで無造作に物質的と精神的と云ふ言葉を使つて見たのであります、それが果して明瞭なものであるかどうか、といふことであります。物質ばかり重んじてはいかない、精神を重んじなければいけないと云ふことを誰でも口にします。或は今日の文明は物質的でない、と云ふことを能く言ひますが、併し私は實は是等の言葉の使ひ方に疑問を有つて居るのであります、さうなつて來ると、今迄の議論が根本的に分らないやうなことになると思いますが、實際此物質的と精神的の言葉の意味は決して論者の考へて居るやうに、さう簡單ではないと思ふ。物質と思つたものが精神的となり、精神的と思つて居つたものが或人の説き方に依ると物質の基礎がなければならぬことになつて來る。さうなれば其不完全なことを基礎にして今日の文明が物質的だとか精神的だとか區別することは間違つて居ると思ふ。物質と云ふことを輕んずることは意味が無いと言はなければならぬ。

前に述べた社會問題の解決等に物質萬能を非難したことは、今私の述べることは關係が無いのであります。理論上物質と云ふこと概念を段々考へて見ると、目に見えるやうなものではなく、單に數學的に論定したものと成つて、精神的産物と差別が無くなつて來るのであります、更に又實際上に於てもさうであります、今日精神的と云ふけれども、何が精神文明であるか、例へば教育が精神的の事業だと云ふけれども、教育だつて矢張物質の基礎がなければ出来ない、金が無ければ出来ない、豫算を何萬圓と取らなければ教育が出来ないことになつて來る、それは或度までは精神に依つて出來ますけれども、精神的ばかりでは出來ない、昔は煎豆を咬んで英雄を論ずると云ふ人がありましたが、併し今日の學者は豆ばかり食つて居つては榮養不良になると言ふであります。餘り食過ぎて榮養過多になつてもいけません、適當な榮養を攝らなければ生活が續かなくなつてしまひます。屋は膝を入るに足ると云ふやうにすれば宜いかと云ふと、學校なども「バラック」にして居つてはいけない、矢張出來るならば立派にした方が宜い、餘程氣分が違つて來ます。學校建築などと云ふことも金の關係から仕方がありませぬが、光を良くする、通風を良くすると云ふだけでは満足が出来ない、出來るならば美しいといふ感情を興へなければいけないと云ふことを段々人が言ふのである。尤も是は多少物質的以外である、と言へますけれども、兎に角さう云ふ風にするには夫だけの材料が要る。さう云ふ物質的の基礎が無ければ、精神的の事が舉らないのであります。それで區別が實際付かない、理論的に於ても付かず、實際的に於ても出來ないと云ふ事から考へて行くと、今日社會の事を論ずるに於て物質の方面はどうでも宜い、精神の方を主張しなければならぬと云ふ論を立てる場合に於ても、餘程考へる必要があらうと思ひます。

そこで私は前に多くの一般の社會論者は労働者の方にしろ、寧ろ資本家の方にしろ、有ゆる昔の唯物論を基礎にして居る者が多かつたと云ひましたが、所が反對にさう云ふものを一切破つて行つてそれと全然無關係の精神主義か何かで社會改造論者も出て来るから、さう云ふ論には餘程又考へなければならぬ點が出て來ると思ふのであります。さう云ふ論に對して私は文化主義を唱へる必要があるやうに思ふのであります。次には此社會問題の一つの解決の方法として文化と云ふ觀念を立て、行く必要を説いて同時に漠然たる精神主義の過ちを説いて見たいと思ひます。

五

今此物質、精神と云ふ方の問題に入つて參りましたが、是は色々の問題を含んで居つて、十分に言ふ爲にはもう時間がありませぬ。私の今是から述べやうと思ふ所の最も必要な點は、從來考へて居つた所の物質或は自然と精神との區別よりは、寧ろ他の點の區別を考へて行くことが、社會の問題を解決する上に於て更に必要であると云ふことであります。それからして議論を始めて行きたいと思ひます。

先づ前に述べたやうに、私は物質と精神とは常識には區別が出来て居るので、又其區別を壊さうと云ふのではないと思ふのであります。それを或は唯物論のやうに精神は腦髓と云ふ一つの物質の作用であると云ふ風に無理にしてしまふか、或は一派の唯心論者のやうに、凡ての物質は精神の現れである、萬事萬物悉く生活を有つて居るものである、心である、唯其程度の高いものが人間の精神のやうになつて居る、最も高いものは神のやうなものである、而して所謂頑冥なる物質は是は心の無活動になつたものである、と云ふやうなものもありますが、然しそんな風にまで言はうと思つて居ない。是等の問題はどう解釋しても結局論理上の

困難を生ずることでありまして、さうして又哲學を若し物と我との關係を説く學と云ふ風に考へて見れば、夫等の問題の中には入つて來ないものになつて來て、結局過去の哲學に屬するものであると言ひたいのであります。即ち過去の形而上學の方の問題であつて、吾々は今外にある所の物が本來精神的であるか、物質的であるか、と云ふ問題はどうでも構はない、たゞ其が我に對してどう云ふ風に現れて來るか、と云ふことを主として考へて行かうと云ふのであります。即ち物と我との關係を以て哲學の問題にして居るのでありますから、物自身がどんなものかと云ふことを問題にしない、それをしやうと思つても、さう云ふ所を認め得る作用が我にあるかどうか分らない、それであるからさう云ふ問題とは無關係の所に暫く自分の考を止めて置きたいと思ひます。

さう云ふ風に考へて行きますと、普通謂ふ所の精神と云ふやうな作用も、見方に依つては物質の作用と何も異つたものではないと言つて差支ないやうに思ふのであります。吾々が今考へて居る作用は是は精神作用と云ふて居ります。それから物の働き即ち水が流れるとか、何とかと云ふことは、是は物質の作用と見て居る、其間に到底一致することの出來ない差別がありますが、併し所謂物質現象、自然現象を段々と細かく考へて見ると、其間に大分異つたものを發見することが出来る。此光とか熱とか云ふやうな現象と、生活作用と云ふのと比べて見ますと、随分其間に差別があります。生活作用と云ふやうなものは餘程特殊な作用をして居る、光や熱などよりもつと簡單な作用、例へば壓力と引力とかと云つたやうな、現れ方と、生活作用の生物に現れて居る現象と比べて見ると、随分の相違があるやうに見えるけれども、吾々は是等を總括して物質作用と云つて居ります。所が此精神現象と云ふやうなものは此壓力や引力などと比べて見ると、大變違

ひますが、生活作用と比べて見ると大分接近したものであると見られるでありますから往々にして精神作用は生活作用の一つであると考へて居る者さへもある譯であります。それは誤りの考でありませうが、さう云ふ風に考へて居る者もある。詰り吾々が色々な働きをして生活して居る、呼吸をしたり營養をしたり、消化したりして生活して居る。それと同じやうに考へたり感じたり何かして居るのだ、と云ふやうに考へて居る人もあります。併し其間に明かに作用がありまして、生活作用と意識作用と區別して宜い譯であります。併しそれを支配して居る法則の性質から考へて見たならば、生活を支配して居る所の生活の法則が一方に立てられると、丁度それと同様な形式で意識現象を説明する法則を考へることが出来る譯であります。もう少し他の言葉で申しますと、今日吾々が俗に謂ふ心理學で認めて居る法則、觀念聯合の法則とか或は感情の複雑な法則とかと云ふやうな事柄、是は孰れも皆自然的に起る出来事である。吾々が如何にしても之を變へることが出来ない、聯想と云ふやうなことは自分の意志が加はれば多少變ることが出来ませんが、併し自然に起ることでもあります。例へば所謂心理學で御承知の通り類似聯合とか、或は接近聯合と云ふことは、是は當然のことでもあります。恰度心理學の法則は電氣學の法則と其性質に於て何も異つたことはない、言換へて見れば吾々が心理學に於て精神現象を取扱ふ態度と、物理學に於て電氣現象を取扱ふ態度とに於て相違はない譯であります。

さうして見ますと、是等の種々の異つた現象を唯現象として考へて見れば、それ／＼異つたものになります。之を自分と云ふものとの關係として考へて見ますと、即ち自分は之をどう取扱ふかと考へて見ると、同じやうなものとして居ると考へて差支ない、精神現象と物質現象とかは我に對する作用として考へて見

れば別に差別は無ひ、今述べた範圍に於ては差別は無い譯であります。それで今迄の見方から區別したやうな自然現象の學問と精神現象の學問との差別は成立たなくなつて來る譯になります。言換へて見れば心理學も矢張自然科学の一種であると云ふやうな議論が出来る譯であります。随つて心理學を基礎として精神現象の事を説明しやうとしても、別にそれが特別の精神的であるとか、非物質であるとかと云ふことには意義が成立たないことになるのであります。此心理學を基礎としてもつと複雑なる精神現象を説明することがあります。またならば、是も矢張其意味に於て自然科学的現象として研究されて居なければならぬことになります。例へば道德現象を説くのに、元來道德と云ふものは非常に複雑な高尚なものであります。併ながら之を分解して來て、さうして簡單なる心理現象の中に歸してしまつたならば、道德と云ふ觀念がどう云ふ風にして段々發達して行つたか、或はどう云ふ社會の事情に依つて制度となつて現れて來たかと云ふことを説く場合には、是は自然の有様を説明するのでありますからして、道德の自然科学が其處で成立つ譯であります。即ち道德現象が自然科学の一部として研究されて行くのであります。法律、經濟、藝術、宗教と云ふやうなものも種々複雑な現象でありますけれども、矢張同様な方法で研究され、同様な見方から我に對して現れて來るときには、孰れも自然科学的に研究されて來るやうになつて居るのであります。さう云ふ風になつて來ると、總て是等の現象は皆自然科学の領分に入つて來て居る、と云ふやうにも一方からは見えます。

所が此處に又一つ違ふのは、是等の現象に對して吾々は單に自然的の事變とばかり認めて居ないことがある。精神作用と稱するものは成程普通或一つの法則に従つてどうしてもさうならなければならぬやうにして發達して來る。悲しみたいた時に悲しまずに居ることが出来ない、笑ひたいた時に笑はないやうにすること

が出来ない、どうも出来ないことであります。それだからさう云ふ精神状態の自然的性質は免れないことではありませんが、併ながら笑つてはならない、笑ひたいけれども笑つてはならないと云ふこともあります。笑つてはならないと考へて、笑ふのを忍ぶ時にも、どうしても忍べなくなつてしまへば吹出してしまふ、或は忍ぶ方の方が勝れば笑はずに済むのでありますからして、矢張其處に自然的の作用が行はれて居りますが、併ながら兎に角笑ふまいとする心は是は此人の自由の作用として考へて居る。笑ふなと云つた、そこで笑ふか笑はないかと云ふことは、其人の自由意志の範圍に屬して居るのであります。他の道德現象も一般にさう云ふ風に解釋が出来るのであります。過去の或習慣風俗から次第々々に或事が道德として認められて來ると云ふことを吾々は許すのであります。併ながらさう云ふ道德が何故或時代に於て是認されるやうになつて來たかと云ふ理由は、是は自然には説明が出来ないのであります。承認しなさいと思へば承認しなさいだけの話であります、けれども吾々は承認して居るのであります。さう云ふやうな差別は何處から生ずるか云ふと其處に幾らかさう云ふ作用に對しては、特別の見方をすることが出來ると云ふことを許して居るのであります。即ち夫等のものに對しては唯自然の儘に生活するに止まらずして、幾らか自然に對して自分の思ふ事を行ふことが出來ると云ふ、假定が入つて行くのであります。是は普通謂ふ自然現象即ち物質現象には出來ない、水は高い所から下りて、低い所へ流れて行く、それをどうかして此方が睨み返してやることが出來ない。日没を扇子で戻した人も昔あつたか知れませぬが、今日に於て又事實に於て是は出來さうもない話であります。所謂自然現象即ち物質現象を吾々が自分の自由自在にすることが出來ないと定まつて居りますが、併ながら或種類の現象、人間の或作用に對しては、吾々は自分で以て左右し得るものであると云ふことの豫想の

下に仕事をして居るのであります。是も大きな眼から見れば自分でやつて居る積りであるけれども、實は外のものに操られて居るものだと言へるか知れませぬけれども、併ながら自分ではさう云ふことが分らない、兎に角自分の心の中では自分で變へたと思ふこともあり、自分で變へやうと努めて行き、又變へて行くことが出来るのは普通言ふ精神現象の特色であります。随つてさう云ふ現象は單に自然科学的方法では説けないことになる譯であります。それにも拘らず自然科学でさう云ふ事を説かうと云ふのは、自然科学萬能のことでありまして、勞働主義の人も資本主義の人も共にさう云ふ結果から來て居るのであります。是は一時哲學界が自然科学主義の考方に支配されて居つた爲に、其影響が出て居ると云ふことが少くないと思はれるのであります。斯う云ふ風に一方から觀ることが出來ますが、併しそれでは満足が出来ない。

六

然らば其自然科学以外の觀方は何かと云ふと、此處に一つの特色を考へて見られる、即ち普通謂ふ自然現象、物質現象は唯事實を事實として有りの儘に認めるだけであり、今述べる特殊の精神現象は其事實が何らかの意味を有つて居るのである、何らかの價值を有つて居るものであると云ふやうに考へて行くのであります。即ち或種類の道德習慣が善いものであると是認せられることが其中にある。即ち善いものである、良い價值を有つて居るものであると云ふことが此現象に伴はれて來て居るのであります。藝術にしても色々な藝術が自然に發達して行くのでありますけれども、併ながら或種類の藝術が大變に盛んに行はれて居るにも拘らず、それは價值が無いものであるとか、或種類のものは少數の人しか認めて居ないけれども、價值の有るものだと云ふことを吾々が意識する、即ち美的價值の有無を考へて行くのであります。斯う云ふ事は唯